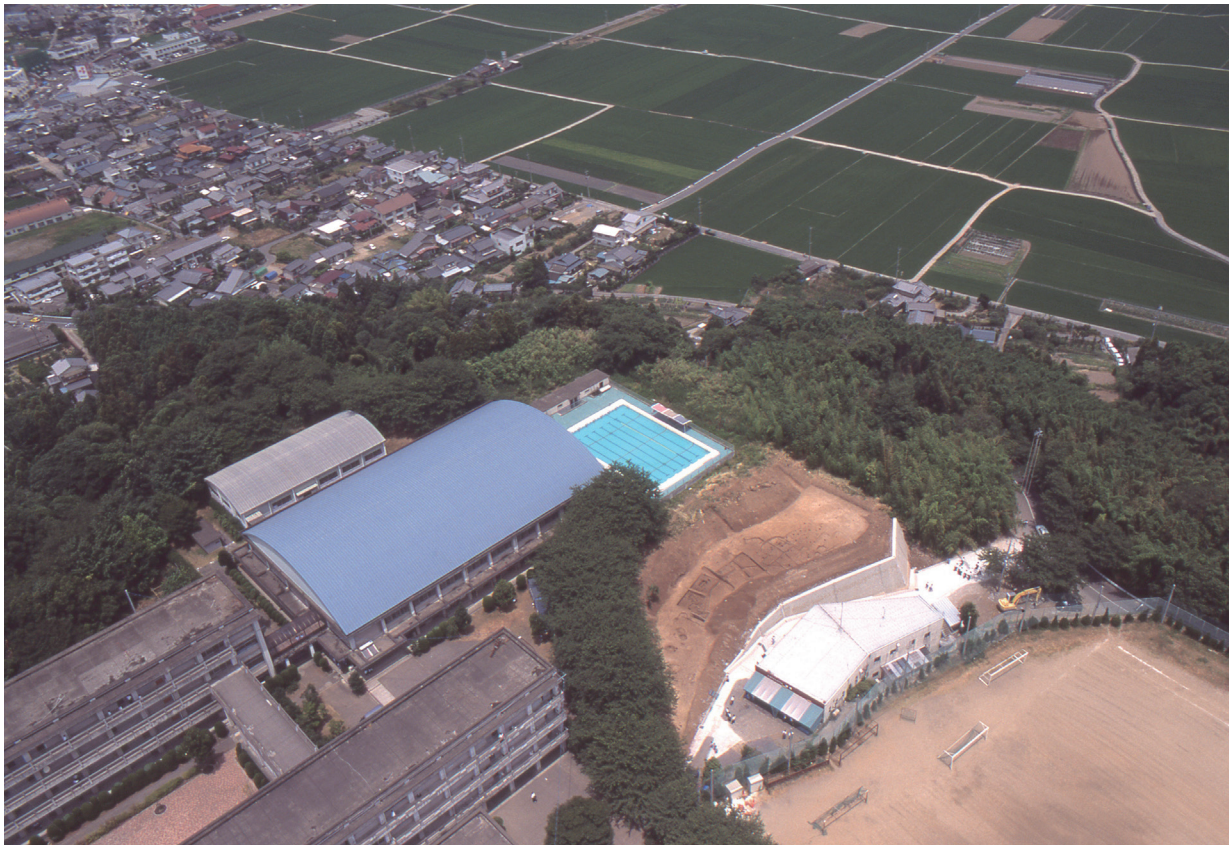
雄　城　台　遺　跡

～大分県立大分雄城台高等学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

南東方向から雄城台遺跡（中央）を望む
〈2020 年 5 月 12 日撮影〉



第 9 次調査空中写真（南東から）

巴形銅器　表面

巴形銅器　裏面

第９次調査　巴形銅器出土状態

第８次調査　溝遺物出土状態

第７次調査区（北から）

第２次調査区（北西から）

序　文

昭和30年代後半から昭和40年代の前半は、高度経済成長により特定地域への人口集中が加速し、大分市内では、生徒数の増加による高校建設が急務となりました。そのような状況の中、白羽の矢が立ったのが、当時一面桑畑であった雄城台だったのです。雄城台は以前より弥生時代の遺跡として知られており、当時同じく高校建設が計画された宇佐市の四日市台地（台の原遺跡）とともに、大分県教育委員会として初めての本格的な発掘調査を実施したのでした。

調査では、その後続々と見つかることになる中国鏡片が県内で初めて出土し、さらにはそれまで詳細の分からなかった東九州の弥生土器の実態が明らかになるなど、大きな成果をあげました。その後刊行された『大分県の歴史』（大分合同新聞社刊）や『大分県史先史篇Ⅱ』（大分県刊）などにそれらの成果は生かされることになりました。

しかしながら、諸般の事情により発掘調査報告書は未刊のまま今日に至りました。それは平成になって調査された第9次調査についても同様でした。調査要因が県教育委員会による学校建設に関わるということを鑑みても、このまま未刊で終わることは許されることではなく、平成26年より7ヶ年で報告書を作成する計画を立て、ようやく今般刊行の運びとなりました。

当時、発掘調査に関わった方々はもちろん、埋蔵文化財が国民共有の財産であることを考えると、刊行が最初の発掘調査から半世紀もたってしまったことにつきましてすべての皆様方にお詫びを申し上げるとともに、今後この報告書が大分県の弥生時代研究で大いに活用されることを願いたいと思います。

令和3年3月31日
大分県立埋蔵文化財センター
所長　松本昌浩

例　言

・本書は、大分県立大分雄城台高等学校建設および付属施設建設にあたり、大分県教育委員会が昭和46年から平成6年にかけて9回の発掘調査を行った埋蔵文化財発掘調査報告書である。
・遺構番号は、発掘調査から長い年月がたち、様々な書籍等で調査時の遺構番号（特に鏡が出土した遺構など）が使われることが多かったことから、混乱を避けるため本書でも調査時の遺構番号をそのまま使用している。そのため、同じ号数の遺構が複数あるなど分かりづらい面も生じたが、ご理解いただきたい。
・各遺構図の北は「磁北」を示しており、地形図に落とした遺構図の北は「座標北」を示している。
・1次調査から8次調査の図面整理、および断面図の原図作成は、平成25年に友廣美和（当時大分県教育庁埋蔵文化財センター非常勤職員）が行った。
・整理作業は平成26年度から令和元年度にかけて株式会社九州文化財総合研究所に一部委託（平成27年度までは洗浄、接合、実測、遺構・遺物実測図トレースを、28年度以降はそれらに加えて遺物写真撮影を委託）でおこなった。一部の遺構のトレースについては小野千恵美、岡本瑛梨、木戸倫、田中詩織、佐々木茂伸、東晃平（以上、令和2年度大分県立埋蔵文化財センター会計年度任用職員）がおこなった。
・本書の執筆は、第2章第10節を9次調査を担当した小林昭彦（執筆時大分県立埋蔵文化財センター非常勤職員）、第4章第2節を高橋徹（元大分県立歴史博物館館長）、その他を小柳和宏（大分県立埋蔵文化財センター会計年度任用職員）が行ったが、第2章第9節については、概要報告書（昭和62年、大分県教育委員会刊）から多くを引用している。その個所の執筆者は8次調査を担当した高橋信武（執筆時大分県教育委員会文化課主任）である。また、同書からは調査の経過（第1章第1節）についても参考にしている。その個所の執筆者は1次調査から調査に携わった清水宗昭（執筆時大分県教育委員会文化課主査）である。また、第3章自然科学的調査については、9次調査で出土した巴形銅器を出土後すぐに当時東京国立文化財研究所に在籍されていた平尾良光氏に分析を依頼し、平成7年（1995）3月11日付けで提出頂いた報告書である。報告書中の肩書きは当時のままである。
・第 403 図と第 404 図については、アジア航測株式会社の赤色立体地図作成手法（特許 3670274、特許 4272146）を使用し、小柳が作成したものである。
・本書の編集は小柳が行った。

目　次

巻頭図版
序文
例言
目次
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経緯と調査の経過　*1*
　第２節　遺跡の立地と環境　*1*
第２章　発掘調査の成果 …… 4
　第１節　調査の概要　*4*
　第２節　第１次調査　*7*
　第３節　第２次調査　*25*
　第４節　第３次調査　*36*
　第５節　第４次調査　*55*
　第６節　第５次調査　*83*
　第７節　第６次調査　*102*
　第８節　第７次調査　*136*
　第９節　第８次調査　*226*
　第10節　第９次調査　*240*
　第11節　その他の出土遺物　*268*
第３章　自然科学的調査 …… 271
第４章　総括 …… 283
　第１節　雄城台遺跡と東九州弥生社会の歴史的位置づけ　*283*
　第２節　大分県内における鏡の廃棄　*316*
遺構一覧表　*321*
遺物観察表　*325*
写真図版
報告書抄録

図版目次

第1図　周辺遺跡位置図 ……4
第2図　調査区位置図 ……5
第 3 図　全体遺構配置図……6
第 4 図　1 次調査区遺構配置図 ……7
第 5 図　基本層序……8
第 6 図　1 次 1 号竪穴建物 ……8
第 7 図　1 次 2 号竪穴建物 ……9
第 8 図　1 次 2 号竪穴建物出土遺物 ……9
第 9 図　1 次 4、5、6、7 竪穴建物出土遺物 …… 10
第 10 図　1 次 4 号竪穴建物出土遺物 …… 11
第 11 図　1 次 5 号竪穴建物出土遺物① …… 11
第 12 図　1 次 5 号竪穴建物出土遺物② …… 12
第 13 図　1 次 7 号竪穴建物出土遺物 …… 12
第 14 図　1 次 1 号土坑 …… 13
第 15 図　1 次 1 号土坑出土遺物 …… 13
第 16 図　1 次 3、8 号土坑 …… 13
第 17 図　1 次 3 号土坑出土遺物 …… 14
第 18 図　1 次 9 号土坑出土遺物 …… 14
第 19 図　1 次 10 号土坑 …… 14
第 20 図　1 次 10 号土坑出土遺物 …… 15
第 21 図　1 次 12 号土坑 …… 16
第 22 図　1 次 12 号土坑出土遺物 …… 16
第 23 図　1 次 13 号土坑 …… 16
第 24 図　1 次一括遺物① …… 17
第 25 図　1 次一括遺物② …… 18
第 26 図　1 次一括遺物③ …… 19
第 27 図　1 次一括遺物④ …… 20
第 28 図　1 次一括遺物⑤ …… 21
第 29 図　1 次一括遺物⑥ …… 22
第 30 図　1 次一括遺物⑦ …… 23
第 31 図　1 次一括遺物⑧ …… 24
第 32 図　2 次調査区遺構配置図 …… 25
第 33 図　2 次 3 号竪穴建物 …… 26
第 34 図　2 次 3 号竪穴建物出土遺物 …… 27
第 35 図　2 次 4 号竪穴建物 …… 28
第 36 図　2 次 4 号竪穴建物出土遺物 …… 28
第 37 図　2 次 5 号竪穴建物 …… 29
第 38 図　2 次 5 号竪穴建物出土遺物 …… 30
第 39 図　2 次 1、2 号竪穴建物出土遺物 …… 31
第 40 図　2 次土器群遺物① …… 32
第 41 図　2 次土器群遺物② …… 33
第 42 図　2 次一括遺物① …… 34
第 43 図　2 次一括遺物② …… 35
第 44 図　3 次調査区遺構配置図 …… 36
第 45 図　3 次 A1 号竪穴建物 …… 37
第 46 図　3 次 A1 号竪穴建物出土遺物 …… 38
第 47 図　3 次 A2 号竪穴建物 …… 39
第 48 図　3 次 A2 号竪穴建物出土遺物 …… 40
第 49 図　3 次 A3 号竪穴建物 …… 41
第 50 図　3 次 A3 号竪穴建物出土遺物 …… 42
第 51 図　3 次 A4 号竪穴建物 …… 42
第 52 図　3 次 A5 号竪穴建物 …… 43
第 53 図　3 次 A5 号竪穴建物出土遺物 …… 43
第 54 図　3 次 A6 号竪穴建物 …… 44
第 55 図　3 次 A6 号竪穴建物出土遺物 …… 44
第 56 図　3 次 A7 号竪穴建物 …… 45
第 57 図　3 次 A7 号竪穴建物出土遺物 …… 45
第 58 図　3 次 B1、B2 号竪穴建物 …… 46
第 59 図　3 次 B1 号竪穴建物出土遺物…… 46
第 60 図　3 次 B2 号竪穴建物出土遺物①…… 47
第 61 図　3 次 B2 号竪穴建物出土遺物②…… 48
第 62 図　3 次 B3 号竪穴建物…… 49
第 63 図　3 次 B3 号竪穴建物出土遺物…… 50
第 64 図　3 次 B4 号竪穴建物…… 50
第 65 図　3 次 B4 号竪穴建物出土遺物…… 51
第 66 図　3 次 B5 号竪穴建物出土遺物…… 51
第 67 図　3 次 A1、A2 号竪穴建物出土遺物 …… 52
第 68 図　3 次一括遺物① …… 53
第 69 図　3 次一括遺物② …… 54
第 70 図　4 次調査区遺構配置図 …… 55
第 71 図　4 次 1 号竪穴建物 …… 56
第 72 図　4 次 1 号竪穴建物出土遺物 …… 56
第 73 図　4 次 2 号竪穴建物 …… 57
第 74 図　4 次 2 号竪穴建物出土遺物 …… 58
第 75 図　4 次 3 号竪穴建物 …… 58
第 76 図　4 次 3 号竪穴建物出土遺物 …… 59
第 77 図　4 次 4 号竪穴建物 …… 60
第 78 図　4 次 4 号竪穴建物出土遺物 …… 60
第 79 図　4 次 5、9、10 号竪穴建物 …… 61
第 80 図　4 次 5 号竪穴建物出土遺物 …… 61
第 81 図　4 次 6 号竪穴建物 …… 62
第 82 図　4 次 6 号竪穴建物出土遺物 …… 62
第 83 図　4 次 7、11 号竪穴建物と 7 号竪穴建物出土遺物…… 62
第 84 図　4 次 8 号竪穴建物出土遺物 …… 63
第 85 図　4 次 10 号竪穴建物出土遺物 …… 63
第 86 図　4 次 11 号竪穴建物出土遺物 …… 64
第 87 図　4 次 16 号竪穴建物出土遺物 …… 64
第 88 図　4 次 26、17 号竪穴建物 …… 65
第 89 図　4 次 20、24 号竪穴建物 …… 66
第 90 図　4 次 20 号竪穴建物出土遺物 …… 67
第 91 図　4 次 21 号竪穴建物 …… 68
第 92 図　4 次 21 号竪穴建物出土遺物 …… 69
第 93 図　4 次 22 号竪穴建物 …… 69
第 94 図　4 次 22 号竪穴建物出土遺物 …… 70
第 95 図　4 次 23 号竪穴建物 …… 70
第 96 図　4 次 23 号竪穴建物出土遺物 …… 70
第 97 図　4 次 25 号竪穴建物 …… 71
第 98 図　4 次 25 号竪穴建物出土遺物 …… 71

第 99 図　4 次 26、29 号竪穴建物 …… 72
第 100 図　4 次 26 号竪穴建物出土遺物 …… 73
第 101 図　4 次 28 号竪穴建物出土遺物 …… 73
第 102 図　4 次 29 号竪穴建物出土遺物① …… 74
第 103 図　4 次 19 号竪穴建物出土遺物② …… 75
第 104 図　4 次 30 号竪穴建物出土遺物 …… 75
第 105 図　4 次 12 号土坑 …… 75
第 106 図　4 次 13 号土坑 …… 76
第 107 図　4 次 15 号土坑 …… 76
第 108 図　4 次 15 号土坑出土遺物 …… 77
第 109 図　4 次 17 号土坑 …… 77
第 110 図　4 次 17 号土坑出土遺物 …… 78
第 111 図　4 次 27 号土坑 …… 78
第 112 図　4 次 33 号土坑 …… 78
第 113 図　4 次 101 号土坑 …… 79
第 114 図　4 次 101 号土坑出土遺物 …… 79
第 115 図　4 次南壁土坑 …… 79
第 116 図　4 次南壁土坑出土遺物 …… 79
第 117 図　4 次一括遺物① …… 80
第 118 図　4 次一括遺物② …… 81
第 119 図　5 次区遺構配置図 …… 83
第 120 図　5 次 1 号竪穴建物 …… 84
第 121 図　5 次 1 号竪穴建物出土遺物 …… 85
第 122 図　5 次 3 号竪穴建物 …… 85
第 123 図　5 次 3 号竪穴建物出土遺物 …… 86
第 124 図　5 次 4 号竪穴建物 …… 87
第 125 図　5 次 4 号竪穴建物出土遺物 …… 88
第 126 図　5 次 10 号竪穴建物 …… 88
第 127 図　5 次 10 号竪穴建物出土遺物 …… 89
第 128 図　5 次 12、16、17 号竪穴建物 …… 90
第 129 図　5 次 12 号竪穴建物出土遺物 …… 91
第 130 図　5 次 13 号竪穴建物 …… 92
第 131 図　5 次 13 号竪穴建物出土遺物 …… 92
第 132 図　5 次 14 号竪穴建物出土遺物 …… 92
第 133 図　5 次 15 号竪穴建物出土遺物 …… 92
第 134 図　5 次 14、15 号竪穴建物 …… 93
第 135 図　5 次 16 号竪穴建物出土遺物 …… 93
第 136 図　5 次 17 号竪穴建物出土遺物 …… 94
第 137 図　5 次 1B 土坑 …… 94
第 138 図　5 次 1B 土坑出土遺物 …… 94
第 139 図　5 次 2 号土坑 …… 95
第 140 図　5 次 2 号土坑出土遺物 …… 95
第 141 図　5 次 5 号土坑出土遺物 …… 95
第 142 図　5 次 6 土坑 …… 96
第 143 図　5 次 6 号土坑出土遺物 …… 96
第 144 図　5 次 7 土坑 …… 96
第 145 図　5 次 7 号土坑出土遺物 …… 97
第 146 図　5 次 8 土坑 …… 98
第 147 図　5 次 8 号土坑出土遺物 …… 98
第 148 図　5 次 9 土坑 …… 98
第 149 図　5 次 9 号土坑出土遺物 …… 99
第 150 図　5 次 11 土坑 …… 99
第 151 図　5 次 11 号土坑出土遺物 …… 99
第 152 図　5 次 20 土坑 …… 99
第 153 図　5 次 20 土坑出土遺物 …… 100
第 154 図　5 次 23 土坑 …… 100
第 155 図　5 次 24 土坑出土遺物 …… 101
第 156 図　5 次一括遺物 …… 101
第 157 図　6 次調査区遺構配置図 …… 102
第 158 図　6 次 1 号竪穴建物 …… 103
第 159 図　6 次 1 号竪穴建物出土遺物 …… 104
第 160 図　6 次 2 号竪穴建物 …… 105
第 161 図　6 次 2 号竪穴建物出土遺物① …… 106
第 162 図　6 次 2 号竪穴建物出土遺物② …… 107
第 163 図　6 次 3 号竪穴建物 …… 108
第 164 図　6 次 3 号竪穴建物出土遺物 …… 109
第 165 図　6 次 4 号竪穴建物 …… 110
第 166 図　6 次 4 号竪穴建物出土遺物① …… 111
第 167 図　6 次 4 号竪穴建物出土遺物② …… 112
第 168 図　6 次 5 号竪穴建物 …… 113
第 169 図　6 次 5 号竪穴建物出土遺物 …… 114
第 170 図　6 次 6 号竪穴建物 …… 115
第 171 図　6 次 6 号竪穴建物出土遺物 …… 115
第 172 図　6 次 7 号竪穴建物 …… 116
第 173 図　6 次 7 号竪穴建物出土遺物① …… 117
第 174 図　6 次 7 号竪穴建物出土遺物② …… 118
第 175 図　6 次 8 号竪穴建物 …… 119
第 176 図　6 次 8 号竪穴建物出土遺物 …… 120
第 177 図　6 次 9 号竪穴建物出土遺物 …… 120
第 178 図　6 次 10 号竪穴建物 …… 121
第 179 図　6 次 10 号竪穴建物出土遺物 …… 122
第 180 図　6 次 13、14、19、22 号竪穴建物 …… 123
第 181 図　6 次 13 号竪穴建物出土遺物 …… 124
第 182 図　6 次 14 号竪穴建物出土遺物 …… 124
第 183 図　6 次 15 号竪穴建物 …… 125
第 184 図　6 次 15 号竪穴建物出土遺物 …… 126
第 185 図　6 次 18、23、24、25、26 号竪穴建物 …… 127
第 186 図　6 次 18 号竪穴建物出土遺物 …… 128
第 187 図　6 次 23 号竪穴建物出土遺物 …… 128
第 188 図　6 次 24 号竪穴建物出土遺物 …… 128
第 189 図　6 次 25 号竪穴建物出土遺物 …… 129
第 190 図　6 次 1 号掘立柱建物 …… 129
第 191 図　6 次 1 号土坑 …… 130
第 192 図　6 次 2 号土坑 …… 130
第 193 図　6 次一括遺物① …… 130
第 194 図　6 次一括遺物② …… 132
第 195 図　6 次一括遺物③ …… 133
第 196 図　6 次一括遺物④ …… 134
第 197 図　6 次一括遺物⑤ …… 135
第 198 図　7 次調査区遺構配置図 …… 136

第 199 図　7 次 1 号竪穴建物 ……137
第 200 図　7 次 1 号竪穴建物出土遺物① ……138
第 201 図　7 次 1 号竪穴建物出土遺物② ……139
第 202 図　7 次 3、4 号竪穴建物 ……140
第 203 図　7 次 3 号竪穴建物出土遺物 ……140
第 204 図　7 次 6 号竪穴建物出土遺物 ……141
第 205 図　7 次 7 号竪穴建物、32 号土坑……141
第 206 図　7 次 7 号竪穴建物出土遺物① ……142
第 207 図　7 次 7 号竪穴建物出土遺物② ……143
第 208 図　7 次 8 号竪穴建物出土遺物 ……143
第 209 図　7 次 9 号竪穴建物 ……144
第 210 図　7 次 10 号竪穴建物 ……144
第 211 図　7 次 10 号竪穴建物出土遺物 ……145
第 212 図　7 次 11 号竪穴建物出土遺物 ……146
第 213 図　7 次 12 号竪穴建物 ……147
第 214 図　7 次 12 号竪穴建物出土遺物 ……148
第 215 図　7 次 13 号竪穴建物出土遺物 ……148
第 216 図　7 次 14 号竪穴建物 ……149
第 217 図　7 次 14 号竪穴建物出土遺物 ……150
第 218 図　7 次 15、25 号竪穴建物 ……151
第 219 図　7 次 15 号竪穴建物出土遺物 ……151
第 220 図　7 次 16、24 号竪穴建物 ……152
第 221 図　7 次 16 号竪穴建物出土遺物 ……152
第 222 図　7 次 17、81 号竪穴建物 ……153
第 223 図　7 次 17 号竪穴建物出土遺物 ……153
第 224 図　7 次 18 号竪穴建物出土遺物 ……153
第 225 図　7 次 19 号竪穴建物 ……154
第 226 図　7 次 19 号竪穴建物出土遺物 ……155
第 227 図　7 次 20 号竪穴建物 ……155
第 228 図　7 次 20 号竪穴建物出土遺物 ……156
第 229 図　7 次 23 号竪穴建物 ……156
第 230 図　7 次 23 号竪穴建物出土遺物 ……156
第 231 図　7 次 24 号竪穴建物出土遺物 ……157
第 232 図　7 次 25 号竪穴建物出土遺物 ……158
第 233 図　7 次 26、28 号竪穴建物 ……159
第 234 図　7 次 26 号竪穴建物出土遺物 ……159
第 235 図　7 次 27 号竪穴建物 ……160
第 236 図　7 次 27 号竪穴建物出土遺物① ……160
第 237 図　7 次 27 号竪穴建物出土遺物② ……161
第 238 図　7 次 29 号竪穴建物出土遺物 ……162
第 239 図　7 次 30 号竪穴建物 ……163
第 240 図　7 次 1 号土坑 ……163
第 241 図　7 次 1 号土坑出土遺物 ……163
第 242 図　7 次 2 号土坑 ……164
第 243 図　7 次 2 号土坑出土遺物 ……165
第 244 図　7 次 3 号土坑 ……165
第 245 図　7 次 3 号土坑出土遺物 ……165
第 246 図　7 次 4 号土坑 ……166
第 247 図　7 次 4 号土坑出土遺物① ……167
第 248 図　7 次 4 号土坑出土遺物② ……168
第 249 図　7 次 4 号袋状ピット ……169
第 250 図　7 次 4 号袋状ピット出土遺物 ……170
第 251 図　7 次 5 号土坑出土遺物 ……170
第 252 図　7 次 6 号土坑 ……171
第 253 図　7 次 6 号土坑出土遺物 ……172
第 254 図　7 次 7 号土坑 ……172
第 255 図　7 次 7 号土坑出土遺物 ……173
第 256 図　7 次 8 号土坑 ……173
第 257 図　7 次 8 号土坑出土遺物① ……174
第 258 図　7 次 8 号土坑出土遺物② ……175
第 259 図　7 次 9 号土坑 ……176
第 260 図　7 次 9 号土坑出土遺物 ……177
第 261 図　7 次 11 号土坑 ……177
第 262 図　7 次 11 号土坑出土遺物 ……178
第 263 図　7 次 12 号土坑出土遺物 ……178
第 264 図　7 次 13、14、15 号土坑 ……179
第 265 図　7 次 13 号土坑出土遺物 ……179
第 266 図　7 次 14 号土坑出土遺物 ……180
第 267 図　7 次 16 号土坑 ……181
第 268 図　7 次 16 号土坑出土遺物 ……181
第 269 図　7 次 17、18 号土坑 ……182
第 270 図　7 次 17 号土坑出土遺物 ……182
第 271 図　7 次 18 号土坑出土遺物① ……183
第 272 図　7 次 18 号土坑出土遺物② ……184
第 273 図　7 次 18 号土坑出土遺物③ ……185
第 274 図　7 次 19 号土坑 ……186
第 275 図　7 次 19 号土坑出土遺物 ……186
第 276 図　7 次 20 号土坑出土遺物 ……187
第 277 図　7 次 21 号土坑出土遺物 ……187
第 278 図　7 次 22 号土坑 ……188
第 279 図　7 次 22 号土坑出土遺物 ……188
第 280 図　7 次 23 号土坑 ……189
第 281 図　7 次 23 号土坑出土遺物 ……190
第 282 図　7 次 24 号土坑 ……191
第 283 図　7 次 24 号土坑出土遺物 ……191
第 284 図　7 次 25 号土坑 ……191
第 285 図　7 次 25 号土坑出土遺物 ……191
第 286 図　7 次 26 号土坑 ……192
第 287 図　7 次 26 号土坑出土遺物 ……192
第 288 図　7 次 27 号土坑 ……193
第 289 図　7 次 27 号土坑出土遺物① ……194
第 290 図　7 次 27 号土坑出土遺物② ……195
第 291 図　7 次 27 号土坑出土遺物③ ……196
第 292 図　7 次 28 号土坑 ……196
第 293 図　7 次 28 号土坑出土遺物 ……197
第 294 図　7 次 29 号土坑 ……198
第 295 図　7 次 30 号土坑 ……198
第 296 図　7 次 30 号土坑出土遺物 ……198
第 297 図　7 次 31 号土坑 ……199
第 298 図　7 次 34、35 号土坑 ……199

第 299 図　7 次 34 号土坑出土遺物 ……199
第 300 図　7 次調査 35 号土坑出土遺物 ……200
第 301 図　7 次 37 号土坑 ……200
第 302 図　7 次 37 号土坑出土遺物① ……201
第 303 図　7 次 37 号土坑出土遺物② ……202
第 304 図　7 次 38 号土坑 ……203
第 305 図　7 次 39 号土坑 ……203
第 306 図　7 次 39 号土坑出土遺物① ……204
第 307 図　7 次 39 号土坑出土遺物② ……205
第 308 図　7 次 40 号土坑 ……205
第 309 図　7 次 25 号土坑出土遺物 ……206
第 310 図　7 次 41、42 号土坑 ……206
第 311 図　7 次 41 号土坑出土遺物 ……206
第 312 図　7 次 42 号土坑出土遺物 ……206
第 313 図　7 次 43 号土坑出土遺物 ……207
第 314 図　7 次 45 号土坑出土遺物 ……207
第 315 図　7 次 46 号土坑出土遺物① ……208
第 316 図　7 次 46 号土坑出土遺物② ……209
第 317 図　7 次 47 号土坑 ……209
第 318 図　7 次 47 号土坑出土遺物 ……209
第 319 図　7 次 48 号土坑 ……210
第 320 図　7 次 48 号土坑出土遺物 ……210
第 321 図　7 次 49 号土坑 ……210
第 322 図　7 次 49 号土坑出土遺物 ……210
第 323 図　7 次 50 号土坑 ……210
第 324 図　7 次 51 号土坑 ……211
第 325 図　7 次 52 号土坑 ……211
第 326 図　7 次 54 号土坑 ……212
第 327 図　7 次 54 号土坑出土遺物 ……212
第 328 図　7 次 55、58 号土坑 ……213
第 329 図　7 次 55 号土坑出土遺物 ……213
第 330 図　7 次 60 号土坑 ……214
第 331 図　7 次 60 号土坑出土遺物 ……215
第 332 図　7 次 9 号住東南土坑出土遺物 ……216
第 333 図　7 次 2 号溝 ……217
第 334 図　7 次 2 号溝出土遺物① ……218
第 335 図　7 次 2 号溝出土遺物② ……219
第 336 図　7 次一括遺物① ……221
第 337 図　7 次一括遺物② ……222
第 338 図　7 次一括遺物③ ……223
第 339 図　7 次一括遺物④ ……224
第 340 図　7 次一括遺物⑤ ……225
第 341 図　8 次調査区遺構配置図 ……226
第 342 図　8 次溝土層図 ……227
第 343 図　8 次溝 ……228
第 344 図　8 次溝出土遺物① ……229
第 345 図　8 次溝出土遺物② ……230
第 346 図　8 次溝出土遺物③ ……231
第 347 図　8 次溝出土遺物④ ……232
第 348 図　8 次溝出土遺物⑤ ……233
第 349 図　8 次溝出土遺物⑥ ……234
第 350 図　8 次 1 号土坑 ……235
第 351 図　8 次 2 号土坑 ……236
第 352 図　8 次 3 号土坑 ……236
第 353 図　8 次 4、5、6 号土坑 ……236
第 354 図　8 次 4 号土坑出土遺物 ……237
第 355 図　8 次 7 号土坑 ……237
第 356 図　8 次 8 号土坑 ……237
第 357 図　8 次 9 号土坑 ……238
第 358 図　8 次一括遺物 ……238
第 359 図　9 次調査区遺構配置図 ……240
第 360 図　9 次調査区土層図 ……241
第 361 図　9 次 1、4 号竪穴建物 ……242
第 362 図　9 次 2、3、5 号竪穴建物、2、3 号土坑 ……243
第 363 図　9 次 6 号竪穴建物 ……245
第 364 図　9 次 7 号竪穴建物 ……246
第 365 図　9 次 8 号竪穴建物 ……247
第 366 図　9 次巴形銅器出土状態 ……248
第 367 図　9 次 1 号土坑 ……248
第 368 図　9 次 4 号土坑 ……249
第 369 図　9 次 5 号土坑 ……249
第 370 図　9 次 6 号土坑 ……250
第 371 図　9 次 7 号土坑 ……250
第 372 図　9 次 8 号土坑 ……250
第 373 図　9 次 9 号土坑 ……251
第 374 図　9 次 10 号土坑 ……251
第 375 図　9 次 11 号土坑 ……251
第 376 図　9 次 12 号土坑 ……252
第 377 図　9 次 1 号溝 ……253
第 378 図　9 次 2 号溝 ……254
第 379 図　9 次出土遺物① ……255
第 380 図　9 次出土遺物② ……256
第 381 図　9 次出土遺物③ ……257
第 382 図　9 次出土遺物④ ……258
第 383 図　9 次出土遺物⑤ ……259
第 384 図　9 次出土遺物⑥ ……260
第 385 図　9 次出土遺物⑦ ……261
第 386 図　9 次出土遺物⑧ ……262
第 387 図　9 次出土遺物⑨ ……263
第 388 図　9 次出土遺物⑩ ……264
第 389 図　9 次出土遺物⑪ ……265
第 390 図　9 次出土遺物⑫ ……266
第 391 図　全体一括遺物① ……269
第 392 図　全体一括遺物② ……270
第 393 図　雄城台遺跡出土土器編年図 ……287
第 394 図　雄城台遺跡Ⅱ期、Ⅲ期の遺構 ……289
第 395 図　粗製甕 ……293
第 396 図　土器片加工品 ……294
第 397 図　花弁型住居 ……295
第 398 図　8 本主柱住居 ……296

第 399 図　鹿道原遺跡の掘立柱建物……296
第 400 図　東九州の環濠集落……297
第 401 図　木棺墓……298
第 402 図　東九州の社会構造想定模式図……300
第 403 図　大分平野の弥生時代遺跡……306
第 404 図　大野川流域及び久住山麓の弥生時代遺跡 ……307
第 405 図　雄城台の地形と出土の鏡……316
第 406 図　弥生時代における地域概念図……320

表目次

第 1 表　周辺の遺跡一覧表……2
第 2 表～第 5 表　弥生時代遺跡一覧表⑴～⑷…308 ～ 311
第 6 表　大分県内弥生時代出土鏡一覧表……319
第 7 表～第 10 表　遺構一覧表 ……321 ～ 324
第 11 表～第 33 表　遺物一覧表……325 ～ 345

写真図版

図版 1 ～図版 2 …… 第 1 次調査
図版 3 ～図版 6 …… 第 2 次調査
図版 7 ～図版 10 …… 第 3 次調査
図版 11 ～図版 18 …… 第 4 次調査
図版 19 ～図版 25 …… 第 5 次調査
図版 26 ～図版 31 …… 第 6 次調査
図版 32 ～図版 47 …… 第 7 次調査
図版 48 ～図版 52 …… 第 8 次調査
図版 53 ～図版 60 …… 第 9 次調査
図版 61 ～図版 69 …… 出土遺物

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と調査の経過

大分市玉沢にある雄城台と呼ばれる台地は、昭和 41 年に富来隆氏（当時大分大学助教授）によって弥生土器の「土器窯」の出土が報告され、別府大学もトレンチ調査を行うなど、弥生時代の良好な遺跡として知られていた。この場所は「大分県蚕業試験場」の桑畑であったが、生徒数の増加によって昭和 46 年に県立高校が建設される計画が持ち上がり、同年第１次の調査（予備調査）が行われた。

第１次調査　昭和 46 年７月８日から７月 21 日（予備調査）

第２次調査　昭和 47 年７月 17 日から７月 30 日。指導　渡辺澄夫、賀川光夫、小田富士雄　文化課　橋本操六、後藤正二、後藤宗俊、清水宗昭、真野和夫（予備調査）。

以上の予備調査により、遺跡の保存状況が判明。そして、遺構所在地は造成段階で削平しないこととした。校舎については、年次計画に従い記録保存とすることとした。（7 次調査実施要項添付の参考資料より）

第３次調査　昭和 47 年９月。担当は後藤、清水、小倉。普通教室棟 500㎡の内、遺跡所在地 215㎡を調査。

第４次調査　昭和 48 年３月から４月。担当は後藤、清水、渋谷、真野。体育館予定地 1,600㎡の内、遺跡所在地 640㎡を調査。

第５次調査　昭和 48 年５月から６月。担当は後藤、清水、渋谷、橋爪。特別教室棟 800㎡の内、遺跡所在地 347㎡を調査。

第６次調査　昭和 49 年４月から５月。担当は（前半）清水、坂本、（後半）清水、橋爪、藤田。普通教室棟 500㎡の内、遺跡所在地 386㎡を２回に分けて調査。

第７次調査　昭和 49 年 11 月から昭和 50 年１月。担当は清水、藤田、橋爪。

第８次調査　昭和 61 年 12 月２日から 62 年１月 31 日。担当は後藤、清水、高橋信武、西哲弘。

第９次調査　平成６年４月 18 日から７月 29 日。担当は小林昭彦。

第２節　遺跡の立地と環境

（１）地理的環境

「雄城台」は、大分川とその支流の七瀬川に挟まれた宗方の低丘陵が東側に突き出た、西側を除く三方が急斜面をなす台地地形をなしている。七瀬川がつくる沖積平野との比高差は約 53m あり、三角点の標高は 67.2m である。唯一丘陵と繋がる西側も谷が北側から入っており、「雄城台」は独立丘陵の様相を呈している。台地上面は、過去の桑畑の開墾やその後の雄城台高校の立地のため微地形は失われたが、僅かな傾斜や小さな谷が入り込むなど、複雑な景観を呈していたことが予想される。特に９次調査区はそのような谷地形の残った部分にあたる。台地上面は、１区から７区、さらには８区でも遺構の上面が削平されているものがあるとは言え、大きく掘削はされていないと考えられる。

もう少し広い範囲で見ると、由布岳南西麓に源を発する大分川がとその支流である七瀬川が、狭い峡谷状の谷間を抜けて、段丘を作りながらやや広い谷底平野を形成し始める地点が「雄城台」を含む宗方の丘陵を挟む平野部になる。つまり、「雄城台」は大分川河口部に広がる沖積平野と峡谷部の中間地点にあたるともいえる。

なお、雄城台遺跡を取り巻く沖積地の旧微地形の復元については、高橋学「大分川・七瀬川流域平野の地形環境分析」（『玉沢地区条里跡第８次発掘調査報告』大分市教育委員会　2005）において詳述されているので参照願いたい。

（２）歴史的環境

雄城台遺跡周辺では旧石器時代から縄文時代の遺跡はほとんど確認されていない。しかしながら、雄城台遺跡の発掘調査では僅かではあるが縄文時代の土器や石器が確認されているので、台地上で何らかの活動が行われていたことは確かである。

弥生時代になると、雄城台遺跡を取り巻く平野部で早期の遺物が出土するようになる。稙田市遺跡では近年早期後半に位置づけられる「下黒野式」の埋甕などが出土しており、さらに玉沢地区条里跡第７次調査区からは早期前

半の土器も出土するなど、平野部での活発な活動が窺われる。まだ遺構は確認されていないが、小規模な水田が展開していたとしてもおかしくはない。前期中頃には同じく７次調査区で水路の井堰が検出されており、この段階からは水田稲作が確実に行われていることがわかる。この平野部の低湿地を利用した水田は弥生時代後期まで行われる。

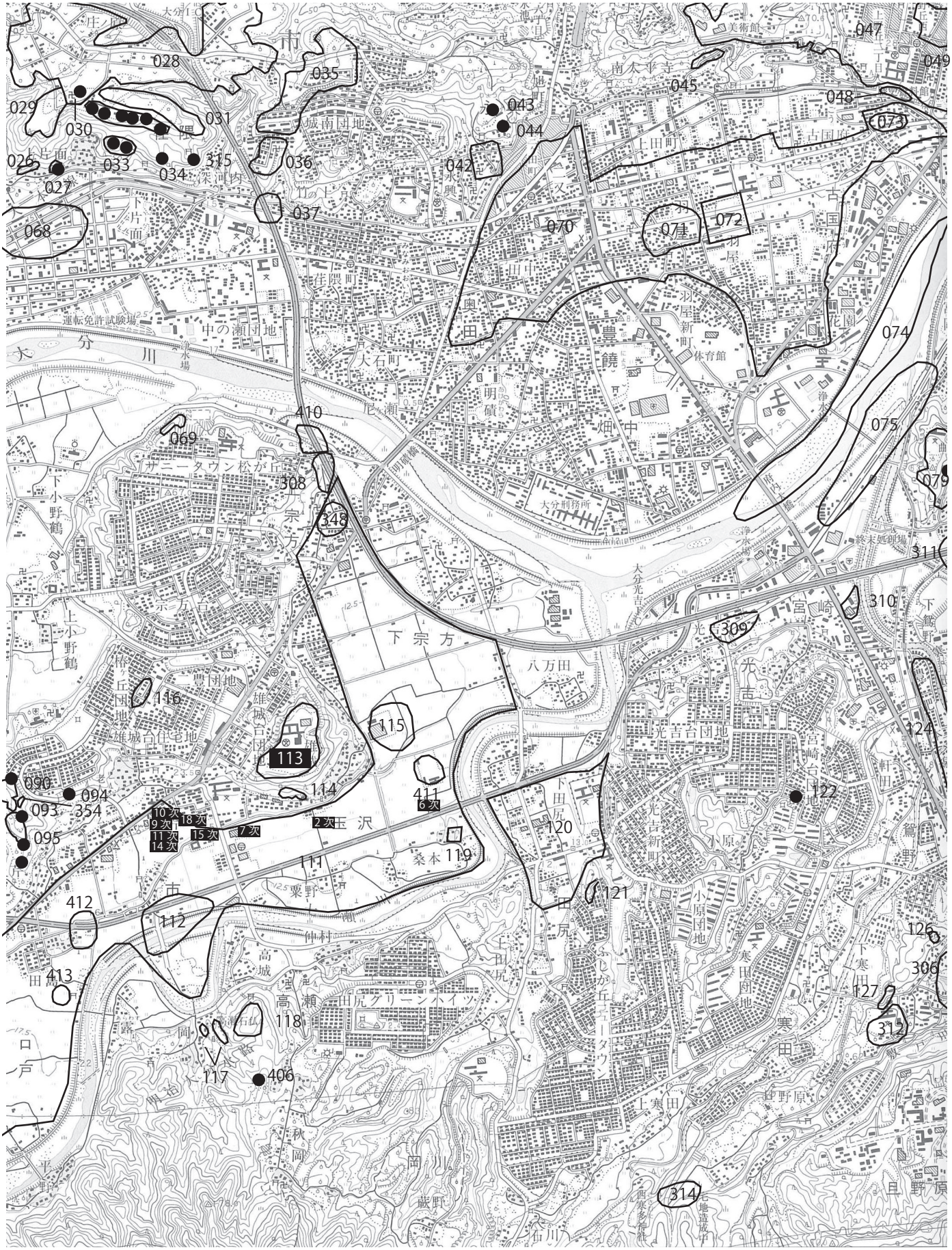
その後、弥生時代終末になると、稙田市遺跡で大規模な水路が築かれる（SD1）。おそらくこの段階で七瀬川の井堰灌漑が行われるようになったと考えられる。この状況は古墳時代中期に新たに掘り直され（SR1）、７世紀まで継続する水路に引き継がれる。稙田市遺跡の下流側に当たる稙田条里遺跡Ｅ区やＦ区で古墳時代後期の水田跡が確認されているのも、この水路による灌漑によって築かれたものであろう。古墳時代前期には玉沢地区条里跡や稙田条里遺跡で確認された竪穴建物は姿を消し、段丘下の扇状地などのやや高い地点に立地するようになる（北の後遺跡や六反田遺跡など）。これも、大規模な灌漑水路による水田の面的な拡大が要因といえよう。一方で、取水口に近い稙田市遺跡で古墳時代中期の集落が確認されているのは、水田化の及ばなかった場所であったことに加え、井堰の管理などの意味もあったのかもしれない。

この大規模な水田を望む北側の丘陵各所には古墳が点在する。中でも、平野部の最も上流側（西側）の丘陵上には中期古墳である御陵古墳（前方後円墳）が築かれている。全長75m以上の規模で、主体部は箱式石棺と想定される。立地から考えても、平野部での大規模な水田経営と密接な関係を有していたことは間違いなかろう。

このように、稙田地区は弥生時代末から古墳時代後期にかけて安定した河川灌漑をおこない、前方後円墳被葬者を頂点とした社会を形成していた。そして、古代になると、稙田地区には条里が施工される。御陵古墳の築かれた丘陵の先端部に取水口を持つ「古井路」による灌漑である。玉沢地区条里跡第９次調査では、SF100とする９世紀以前に遡る畦畔が、現在残る条里地割りと一致する地点で確認されている。この段階で平野部全面に条里が施工されてのかはわからないが、古井路の開削伝承である建久３年（1192）以前に、別の水路による条里水田が作られていたのであろう。古墳時代後期まで大規模な水田が作られていた可能性が高い地区であるので、条里水田の導入も早くに行われていたのかもしれない。

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時　期	内　容
026	上片面横穴墓群	古墳	横穴墓
027	丑殿古墳	古墳	横穴式石室墳
028	庄ノ原遺跡	旧石器ほか	包蔵地
029	庄ノ原片面遺跡	縄文	包蔵地
030	蓬莱山古墳	古墳	前方後円墳
031	田崎遺跡	弥生・古墳	包蔵地
033	万寿山古墳群	古墳	古墳
034	深河内古墳	古墳	古墳
035	城南遺跡	弥生ほか	集落ほか
037	亀甲古墳	古墳	古墳
042	永興遺跡	古代	寺院跡
043	千人塚	古墳	古墳
044	弘法穴古墳	古墳	横穴式石室墳
045	南太平寺横穴墓群	古墳	横穴墓
047	上野遺跡群	弥生ほか	集落ほか
048	岩屋寺横穴墓群	古墳	横穴墓
049	上野館跡	中世	大友氏館跡（上原館）
068	上片面遺跡	縄文	包蔵地
069	小野鶴横穴墓群	古墳	横穴墓
070	古国府遺跡群	古墳～中世	集落・国衙推定地
071	羽屋園遺跡	古墳・古代	集落・国衙推定地
072	金剛宝戒寺跡	古代	寺院
074	大分川河川敷１遺跡	縄文・弥生	包蔵地
075	大分川河川敷２遺跡	縄文・弥生	包蔵地
079	守岡遺跡	弥生・古墳・中世	集落、館跡
090	六部塚古墳	古墳	古墳
093	虎御前古墳	古墳	古墳
094	下迫古墳	古墳	古墳
095	高来山横穴墓群	古墳	横穴墓
111	玉沢地区条里跡	弥生・古代ほか	条里跡
112	稙田市遺跡	弥生・古墳ほか	集落、水路
113	**雄城台遺跡**	**弥生・古墳**	**集落**
114	雄城台下横穴墓群	古墳	横穴墓
115	深町遺跡	弥生	溝
116	椿ヶ丘横穴墓群	古墳	横穴墓
117	高瀬横穴墓群	古墳	横穴墓
118	高城山城跡	中世	山城
119	桑本館跡	中世	館跡
120	下田尻地区条里跡	古墳・古代	条里跡
121	東山田横穴墓群	古墳	横穴墓
122	千人塚古墳	古墳	古墳
124	鴛野遺跡	弥生	集落
126	敷戸磨崖仏	南北朝	磨崖仏
127	大久保横穴墓群	古墳	横穴墓
306	敷戸城津留遺跡	中世	館跡
308	北ノ後遺跡	古墳	集落
309	光吉遺跡	近世	包蔵地
310	宮崎遺跡	近世	包蔵地
311	曲遺跡	弥生・中世・近世	集落・包蔵地
312	下寒田遺跡	縄文～近世	集落・包蔵地
314	旦野原神原遺跡	縄文～古墳	集落・包蔵地
315	深河内２号古墳	古墳	古墳
348	乙院遺跡	中世	館跡
354	高来山第２横穴墓群	古墳	横穴墓
406	高瀬古墳	古墳	古墳
410	馬姓遺跡	近世	包蔵地
411	稙田平石遺跡	弥生	包蔵地
412	ガランジ遺跡	弥生・中世・近世	集落
413	茨川原近世墓地	近世	墓地



玉沢地区条里跡（111）の次数は、調査を行った凡その場所を示す

第１図　周辺遺跡位置図

第２章　調査の成果

第１節　調査の概要

雄城台遺跡の第１次から７次調査にかけては、大分県における埋蔵文化財行政黎明期の発掘調査として、研究史的に重要な位置づけがなされる。この段階では、同じく県立高校の建設に伴って宇佐市の台の原遺跡が調査されており、豊前南部の台の原遺跡と、豊後中部の雄城台遺跡という弥生時代の拠点的な集落遺跡が調査されたことは、大分県の弥生時代を理解する上でも重要な出来事であったといえる。

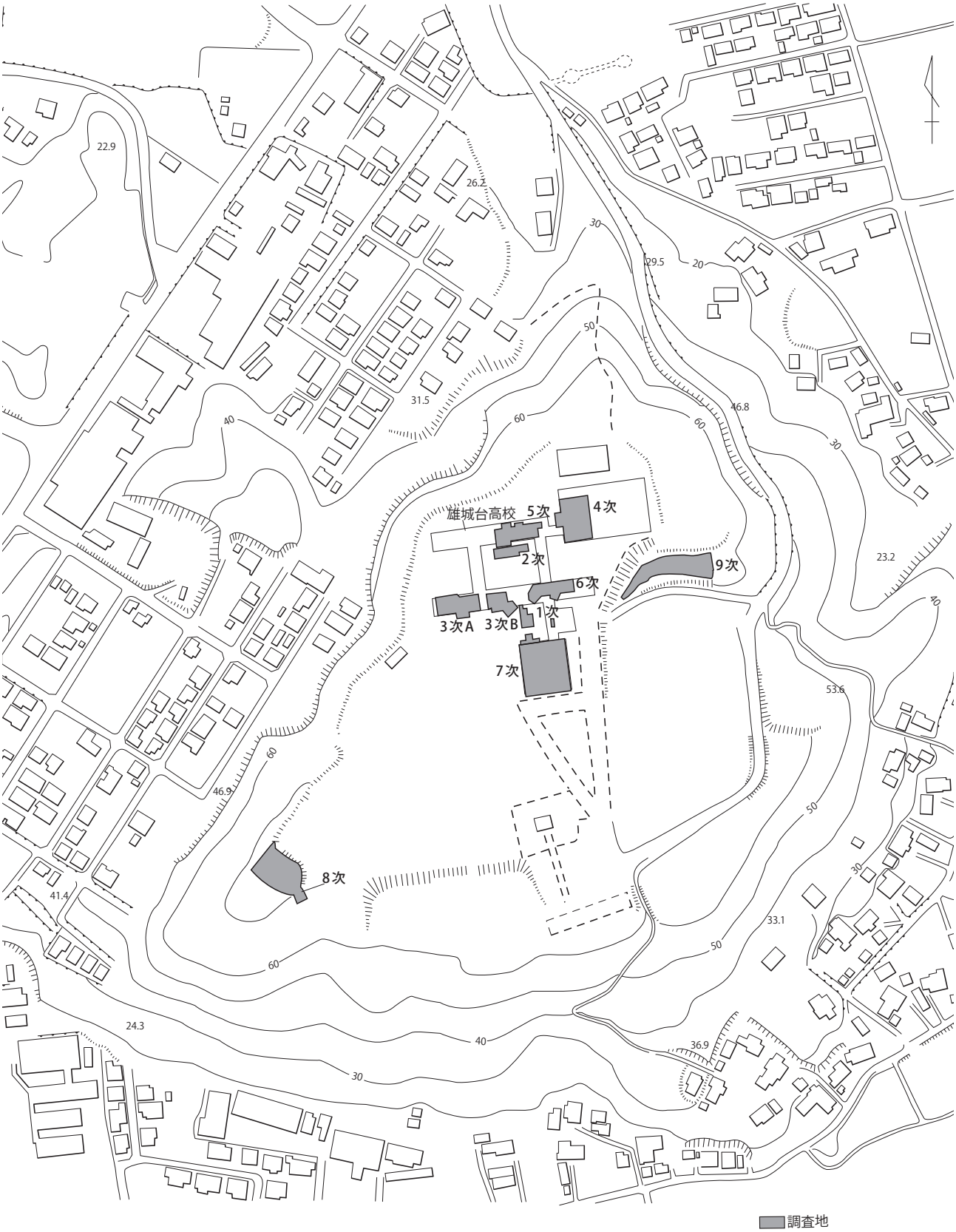
さて、現在の埋蔵文化財行政のレベル（行政的、学術的にも）で当初（第１次から７次）の発掘調査の成果を改めて整理してみると、遺構図中に標高が明示されていないものが多いなどシステマチックでなかったがために不十分な点が確かにあるが、ほとんど初めてといって良い（当時としては）大規模な調査によって、初めて明るみにでた弥生時代の集落と、鏡片や土器などの遺物について、当時の調査員たちが感嘆しながら発掘調査にあたったことが残された図面や写真からありありと感じられる。

おそらく、その後の第８次、９次調査の成果を見てもわかるように、弥生時代の遺跡は台地全面に展開していたと見るべきであろう。そのため、台地のほぼ中央に位置する第１次から７次の調査成果は、弥生時代集落の中央付近の様相を示していると考えて良いだろう。いずれの調査区からも竪穴建物と土坑（多くは貯蔵穴）が検出されているが、特に第７次の東側には竪穴建物が無く、土坑が円を描くように並んでいるように見える。しかしながら、部分的な調査のため、全体の中における位置づけは不明と言わざるをえない。

また、第８次調査では台地の縁辺部に、弥生時代後期後葉から終末にかけての土器が大量に廃棄された溝が確認された。第７次でも同規模の溝が検出されたが、いずれもその延長については調査区内で確認できていない。そのため、雄城台遺跡の弥生時代集落が環濠を持つのか否か、については確証が得られていない。

９次にわたる調査の結果、竪穴建物 104 基、掘立柱建物１基、土坑 105 基などが確認された。

なお、各調査区の遺構説明の中で触れる時期については、第４章第１節で示した編年案による。



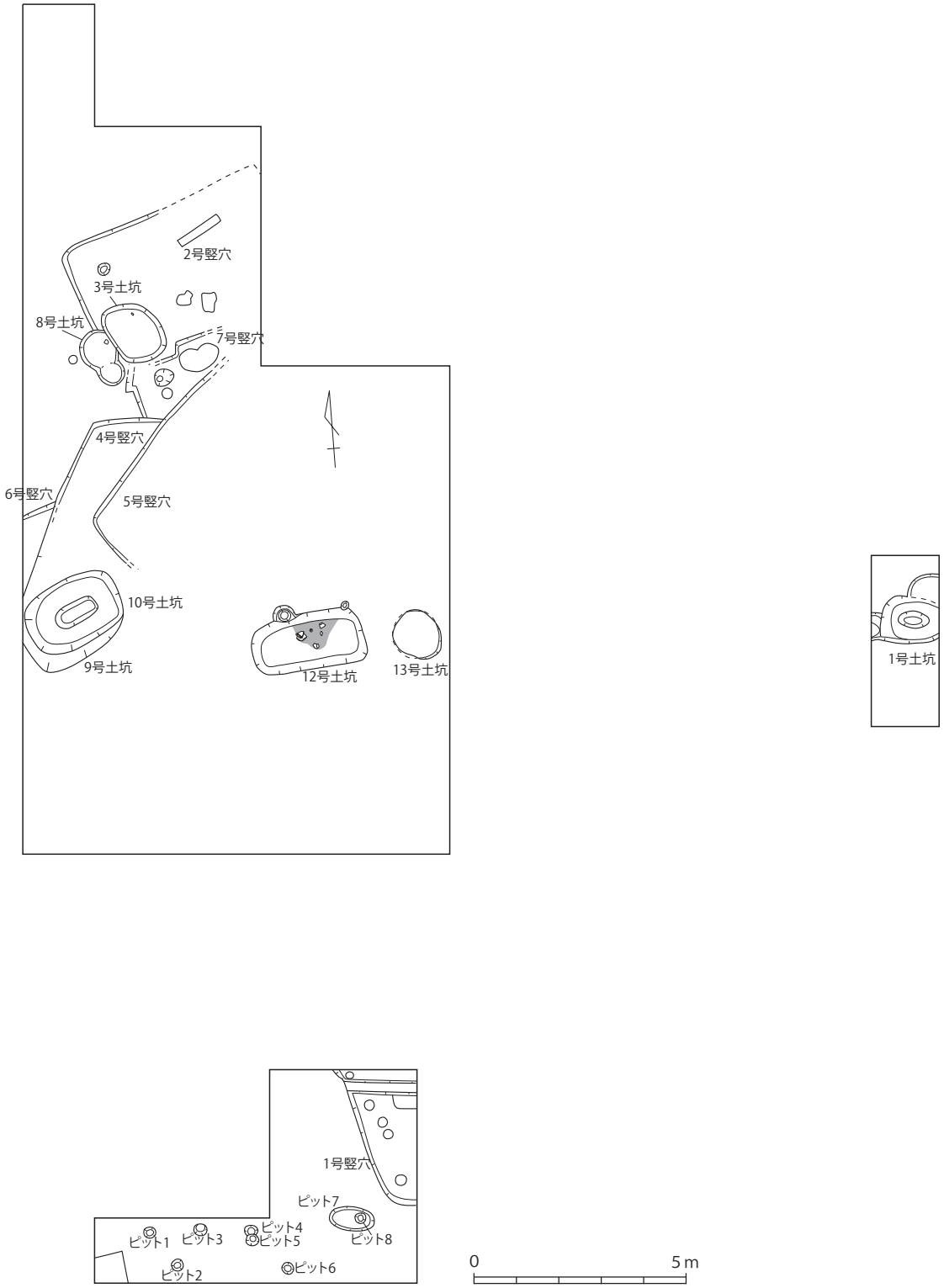
第 2 図　調査区位置図（1/4,000）

第 3 図　全体遺構配置図（1/2,000）

第２節　第１次調査

（１）調査の概要（第４図）

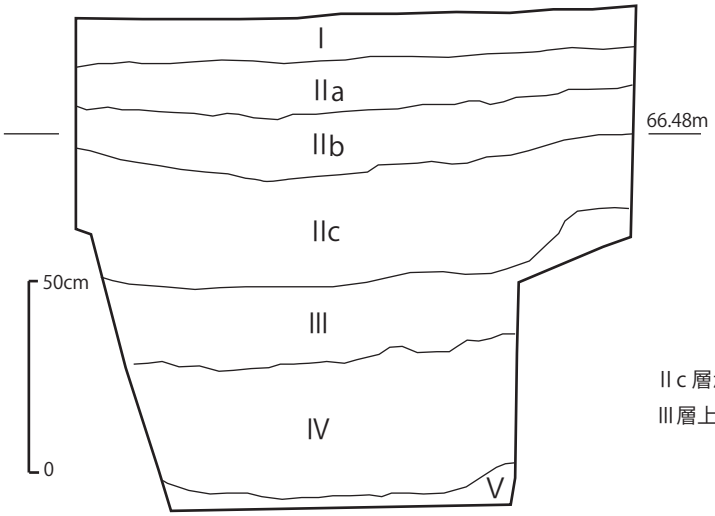
台地のほぼ中央部、約 229㎡を調査した。調査区は北側の規模の大きな調査区と、南側と東側の小さな調査区に分かれている。検出された遺構は竪穴建物６基と土坑６基である。遺構は上部を大きく削平されており、特に南東部は遺構の残りがよくない。



第４図　１次調査区遺構配置図

（２）基本層序（第５図）

調査区内の壁際を掘り下げて、層序を確認した。その結果、Ⅰ層からⅤ層まで確認した。Ⅰ層は表土層（耕作土）で、調査時に除去していた。Ⅱ層はａ、ｂ、ｃの三層に分層できる。Ⅱａ層は砂質の暗褐色土、Ⅱｂ層は明黒褐色土、Ⅱｃ層は黒褐色土、Ⅲ層は粘質の強い褐色土、Ⅳ層は粘質の強い黄褐色土、Ⅴ層は明黄褐色土である。この中で、特にⅡｃ層から弥生時代中、後期の遺物が出土している。



Ⅰ層　表土層
Ⅱａ層　暗褐色土（砂質）
Ⅱｂ層　明黒褐色土
Ⅱｃ層　黒褐色土
Ⅲ層　褐色粘質土
Ⅳ層　黄褐色粘質土
Ⅴ層　明黄褐色土

Ⅱｃ層から弥生時代の土器が出土する。遺構検出面はⅢ層上面で、Ⅳ層以下がいわゆるローム層と考えられる。

第５図　基本層序

（３）遺構と遺物

竪穴建物

１）１号竪穴建物（第６図）

南側の小さな調査区で確認された竪穴建物で、一辺の大部分が検出されたほかは調査区外に広がっている。一辺の長さは3.5（＋α）mである。柱穴は４か所で確認されたが、主柱穴はわからなかった。炉も確認できなかった。北側は一部後世の溝によって削られている。

図化できる遺物は出土しなかったが、竪穴プランが方形を示すと考えられるので、弥生時代後期以降と考えられる。

２）２号竪穴建物（第７図）

北側の大きな調査区の北側で確認された竪穴建物であるが、東側半分は削平を受け、壁が残っていない。南北の大きさは3.1（＋α）mである。柱穴は３か所で確認されたが、主柱穴は確認できなかった。炉も確認できなかった。

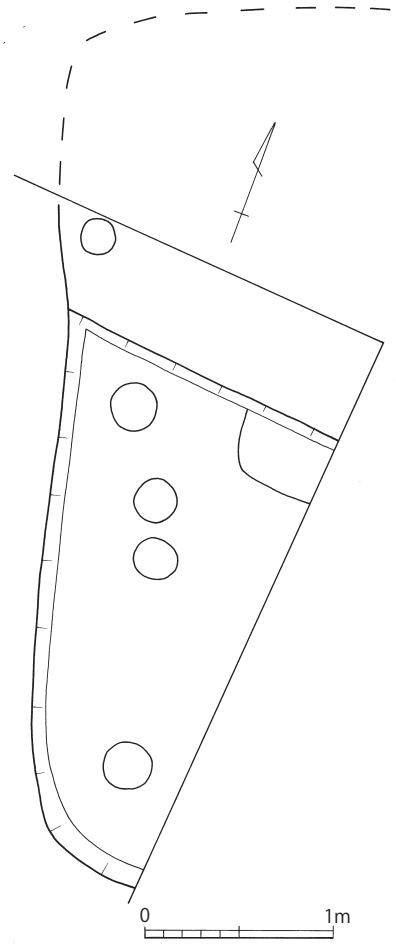
図示できる出土遺物は９点で、第８図１から３は複合口縁をなす壺（安国寺式壺形土器）である。口縁部上半がよく伸び、頸部の突帯がネクタイ状に垂れるなど、弥生時代終末の特徴を示す。４と５は壺の底部であるが、古い時期の混ざり込みである。６と７は甕である。８は口縁部が直立する小型の壺、９は高坏の脚部である。

これらの特徴から、この建物の時期はⅨ期（弥生時代終末）である。

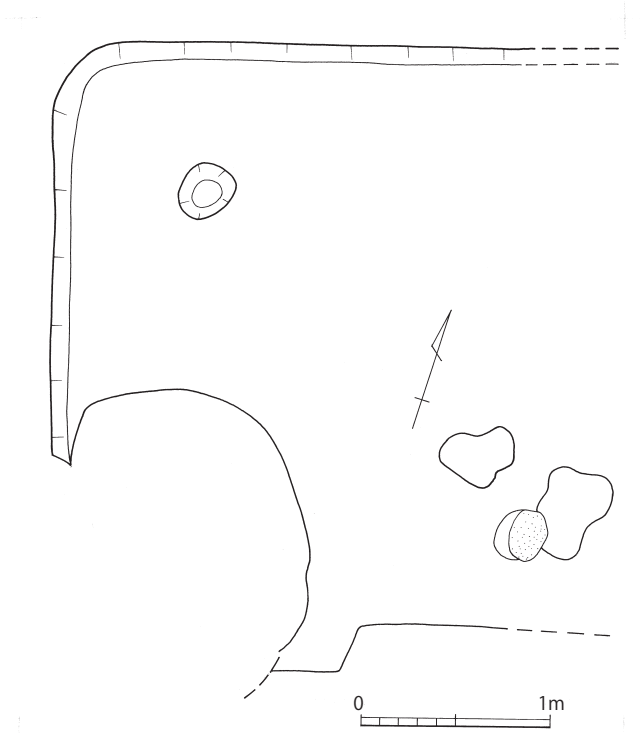
３）４号竪穴建物（第９図）

北側の大きな調査区の中央で確認された竪穴建物であるが、大部分５号竪穴建物に削られていることや、周囲の削平により、北西コーナー部分しか壁が残っていない。柱穴は確認できなかった。炉も確認できなかった。

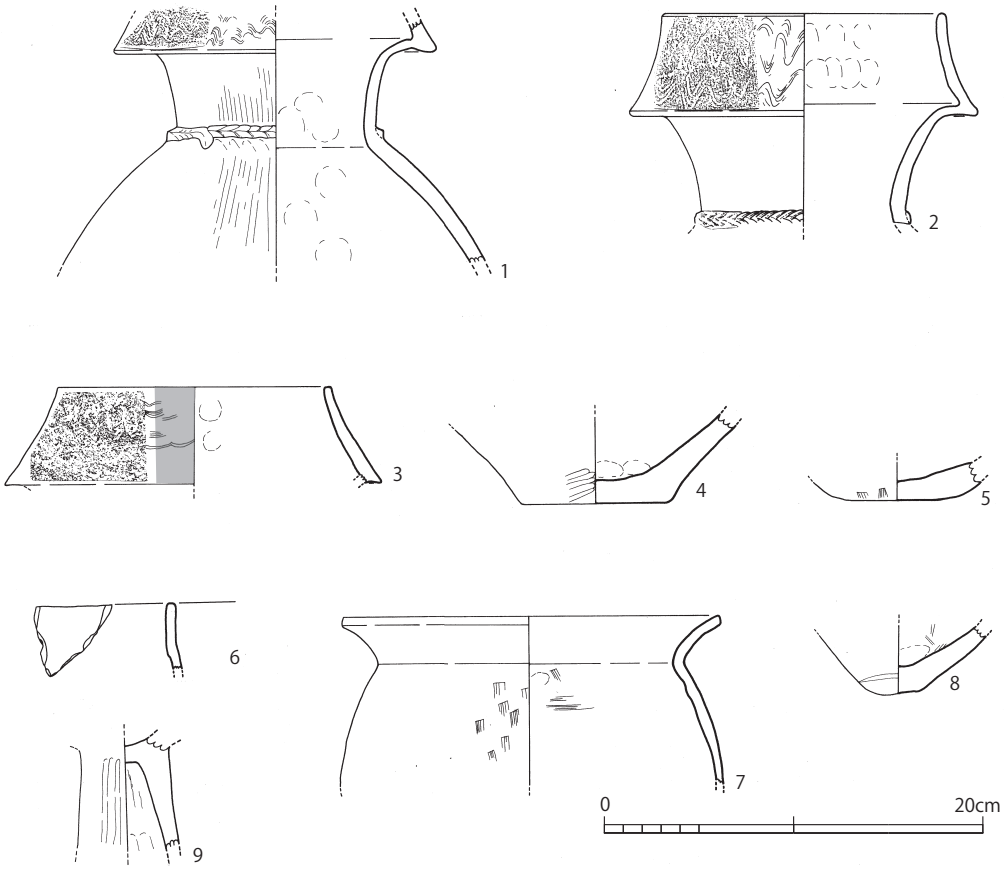
図示できる出土遺物は12点である。第10図10は安国寺式土器壺の肩部突帯で、突帯下部に勾玉状の浮文を並べる。11と12は壺の底部で、



第６図　１次１号竪穴建物



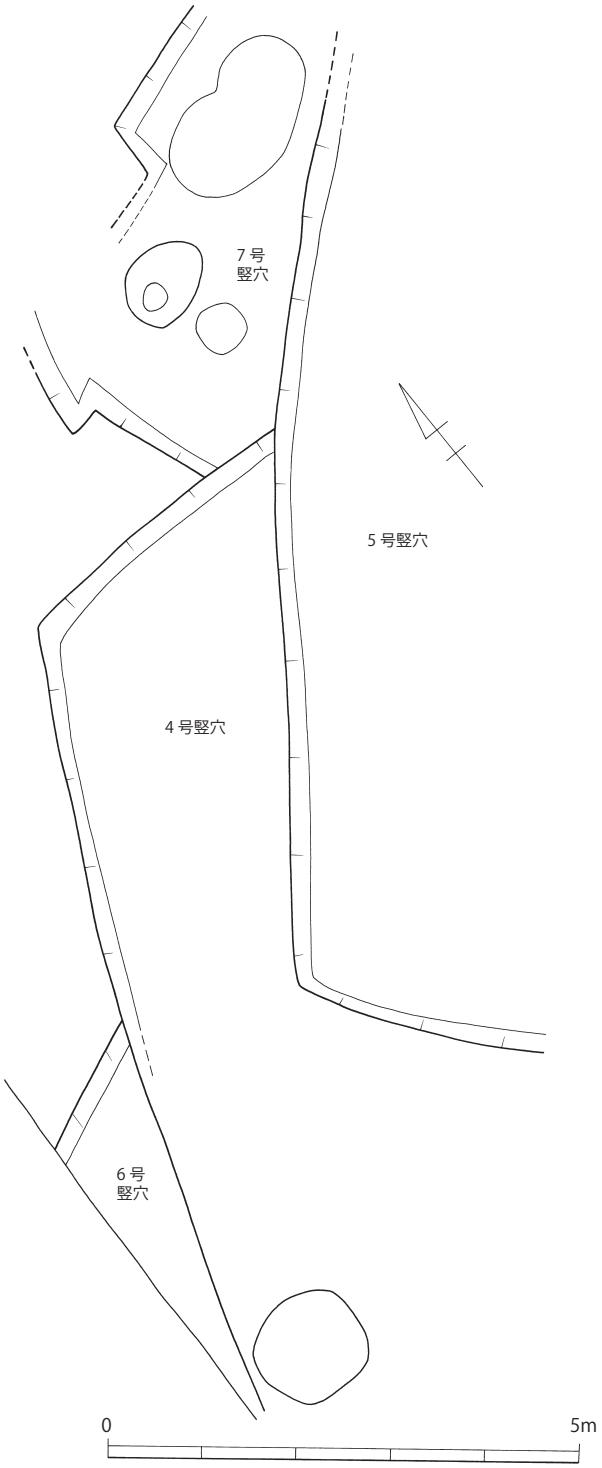
第７図　１次２号竪穴建物



第８図　１次２号竪穴建物出土遺物

平底である。13 から 20 は甕で、16 は下城式土器甕で、口縁部やや下に一条の刻目突帯を廻らせる。17 から 20 は平底の底部。21 は甑と思われる。

竪穴建物の時期は、一部中期のものも混じるが、Ⅵ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



第９図　１次４，５，６，７号竪穴建物

４）５号竪穴建物（第９図）

北側の大きな調査区の中央で確認された竪穴建物であるが、東側から南側にかけて削平を受けており、壁は北側の一辺と南西コーナー付近しか残っていなかった。柱穴は確認できなかった。炉も確認できなかった。

図示できる出土遺物は 17 点である。第 11 図 22 と 23 は安国寺式土器壺の胴部で、断面三角形の突帯が三本廻る。24 と 25 は壺の平底の底部。26 から 31 は甕で、26、27 は大きく外反する口縁部、28 はやや上げ底の底部、29 から 31 は上げ底の底部である。32 と 33 は高坏、第 12 図 34 は支脚と思われるが、底部があり、別な器種かもしれない。35 と 36 は土器片加工品。37 は磨製石鏃、38 は長さが 25cm弱ある台石である。

平底と上げ底の甕底部から、この建物の時期はⅥ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。

５）６号竪穴建物（第９図）

北側の大きな調査区の中央西側で確認された竪穴建物であるが、大部分が調査区外に展開し、周囲も削平を受けていることから壁の一部しか確認できなかった。4 号竪穴建物との切り合い関係も判然としない。炉も確認できなかった。

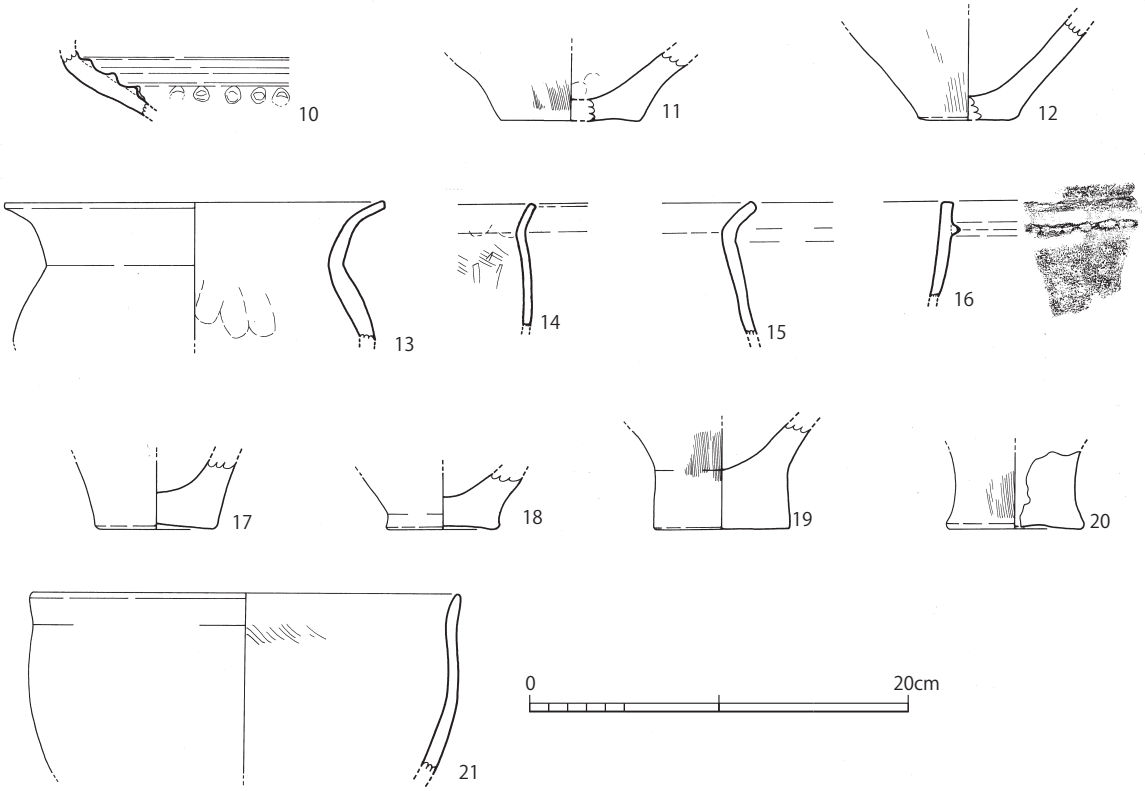
図示できる遺物は出土しなかったが、竪穴プランが直線的なため、弥生時代後期以降と考えられる。

６）７号竪穴建物（第９図）

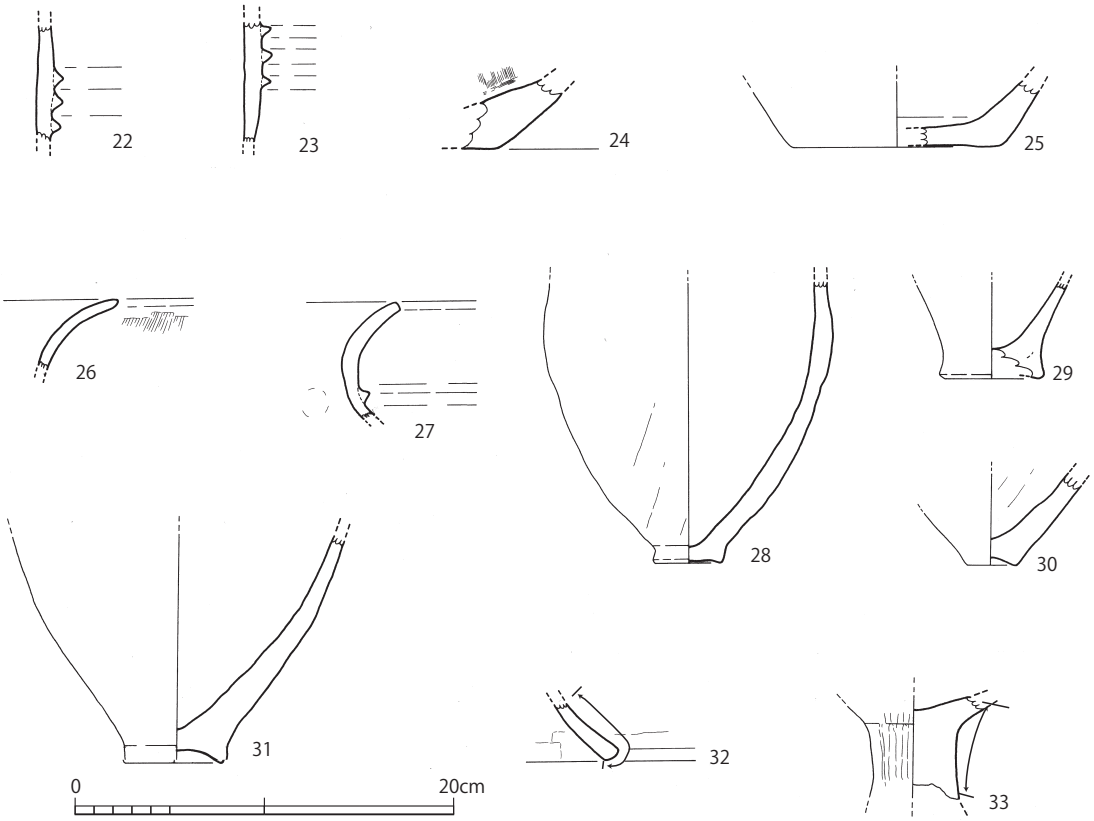
北側の大きな調査区の北側で確認された竪穴建物であるが、4 号と 5 号竪穴建物に切られており、全形は不明である。炉も確認できなかった。2 号竪穴建物との切り合い関係ははっきりしなかったが、出土遺物を見る限りは 2 号竪穴建物が切っていたのであろう。

出土遺物は 12 点で、第 13 図 39 は外面に波状文を施す安国寺式土器の壺、40 は内外面にベンガラを塗布する壺の口縁部、41 は胴部に断面台形の突帯を廻らせる壺、42 は口唇部に刺突文を持つ壺の口縁部で下城式土器の壺。43 は口縁部下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、44 は甕の平底底部。45 はやや小ぶりな口縁部が「く」の字に折れる甕、46 は短い直立気味の口縁部の壺、47 は鉢の脚部か。48 と 49 は高坏。49 は半球形の坏部に大きく開く口縁部が付く。50 は泥岩製の砥石である。

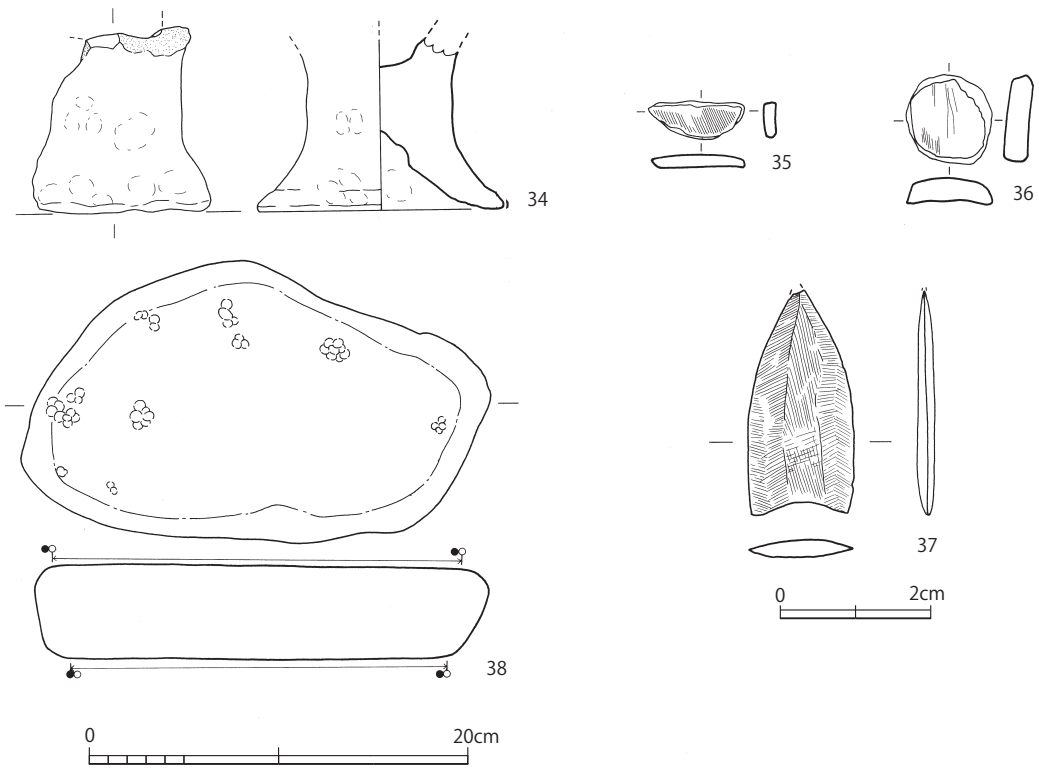
以上から、この竪穴建物の時期はⅦ期（後期前葉）と考えられる。



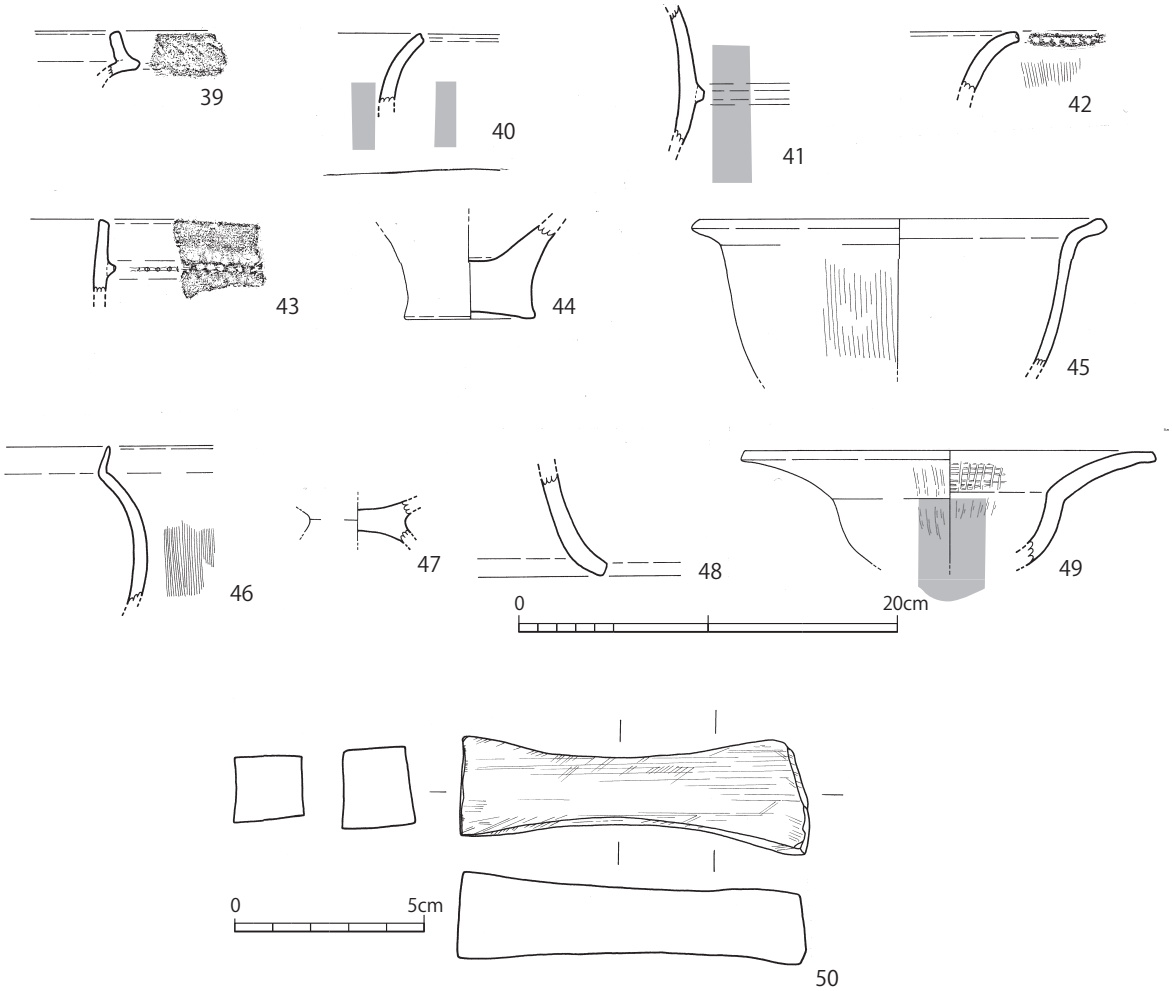
第 10 図　１次４号竪穴建物出土遺物



第 11 図　１次５号竪穴建物出土遺物①



第 12 図　１次５号竪穴建物出土遺物②



第 13 図　１次７号竪穴建物出土遺物

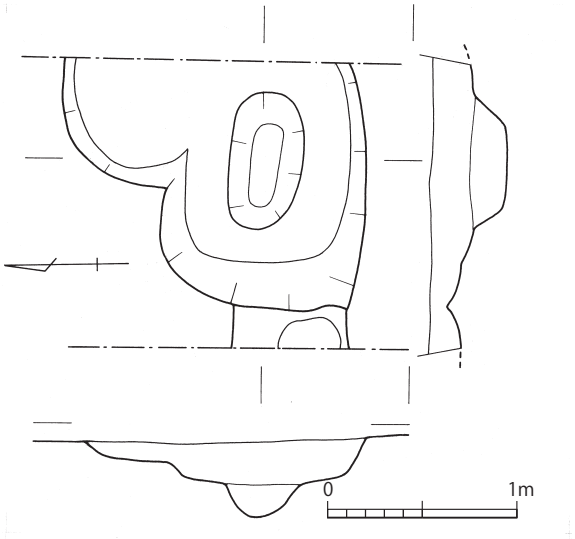
土坑

１）１号土坑（第 14 図）

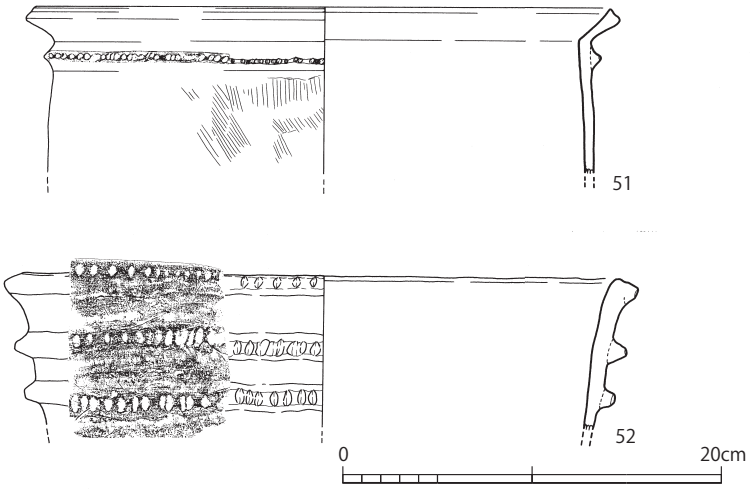
東側に離れた小さな調査区で確認された長楕円形の土坑である。東側は調査区外に伸びるので全形は不明である。長軸 1.3（＋ α）m、短軸 1.1m、深さ 0.2m である。床面には 0.7m × 0.38m、深さ 0.16m のピットがある。また、北側は浅い別の遺構に切られている。

図示できた出土遺物は 2 点である。第 15 図 51 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕で、口縁下に一条の三角突帯が廻る。52 は口唇部とその下に二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器の甕である。

以上から、この土坑の時期はⅡ期（中期初頭～前葉）と考えられる。



第 14 図　１次１号土坑



第 15 図　１次１号土坑出土遺物

２）３号土坑（第 16 図）

北側の大きな調査区の北よりで確認された土坑で、8 号土坑を切り、2 号竪穴建物に切られている。長軸 1.5m、短軸 1.15m、深さ 0.4m の隅丸長方形の土坑である。

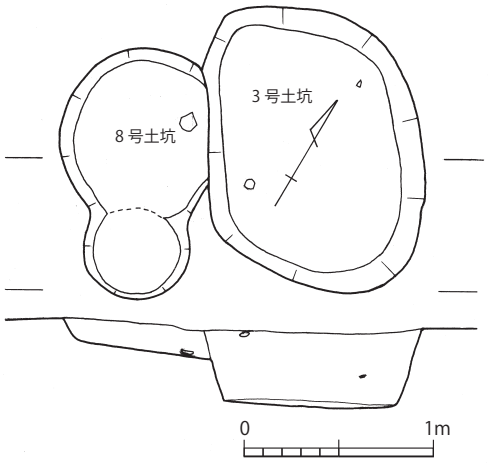
出土遺物は 7 点である。第 17 図 53 は口縁部が鋤先状をなす壺の口縁部、54 は平底の壺底部、55 は断面台形の突帯が廻る壺胴部、56 は口縁端部をやや摘み上げる甕、57 は二条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕である。58 は磨製石剣、59 は茎のない鉄鏃である。

以上から、この土坑の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。

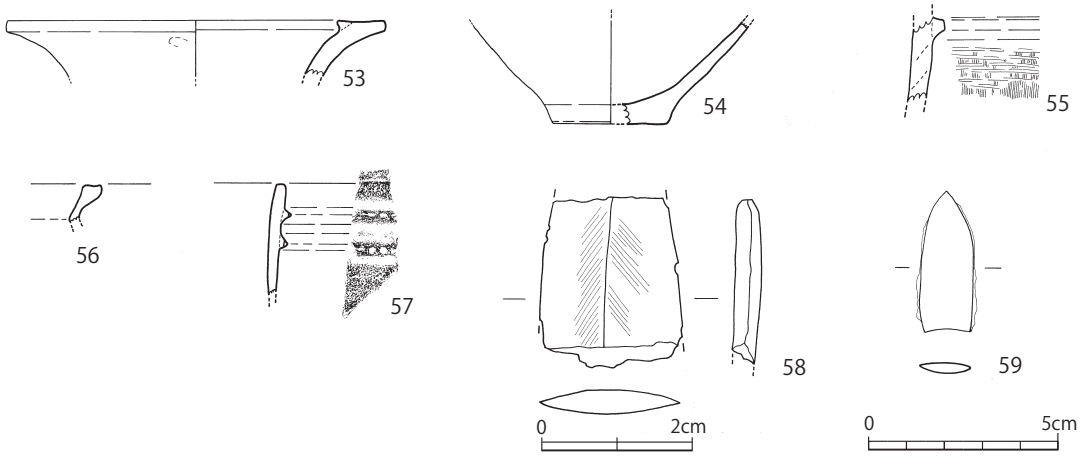
３）９号土坑（第 19 図）

北側の大きな調査区の南よりで確認された土坑で、10 号土坑に重なる形で切っている。

図示できる遺物は 1 点で、第 18 図 60 は頸部に二条の突帯が廻る安国寺式土器壺である。土器の時期はⅦ期（後期中葉）前後に位置づけられる。



第 16 図　１次３，８号土坑



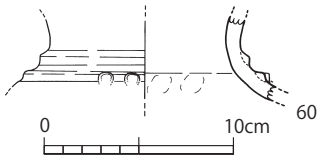
第 17 図　１次３号土坑出土遺物

４）１０号土坑（第 19 図）

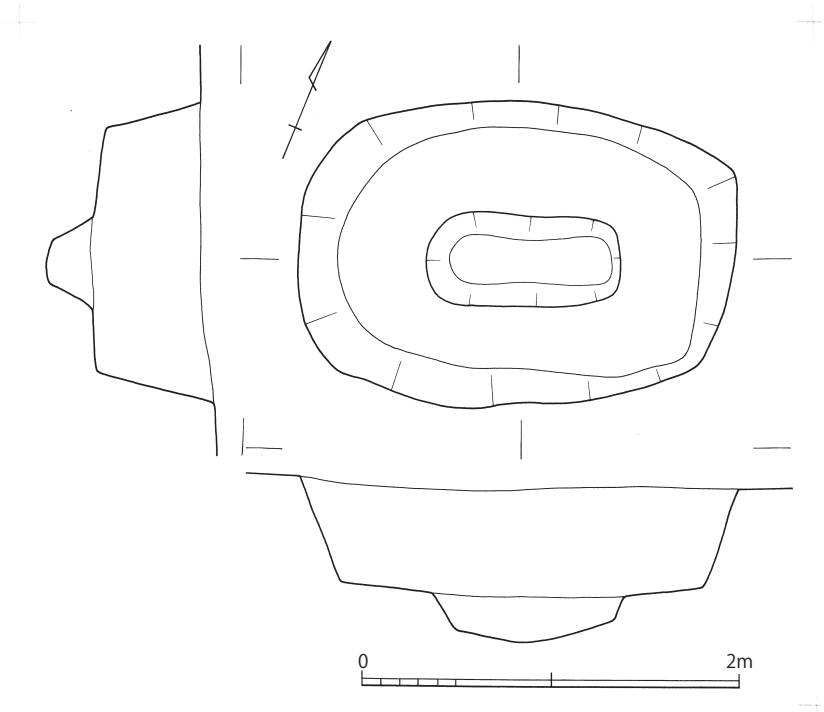
北側の大きな調査区の南寄りの西壁際で確認された土坑で、長軸 2.3m、短軸 1.6m、深さ 0.55m の長楕円を呈する。底面には 1.0m × 0.5m、深さ 0.24m の長楕円形の穴がある。9 号土坑から切られているが、9 号土坑が浅いため、ほぼ全体が残されている。

図示できる出土遺物は 15 点である。第 20 図 61 は頸部に刺突文を持つ一条の突帯を廻らせる壺、62 は断面台形から三角形の突帯を二条廻らせる壺胴部、63 と 64 は平底の壺底部である。65 は口縁端部を摘み上げる東北部九州系の甕、66 は口縁部が逆Ｌ字状に大きく伸びる甕、67 は口縁部が鋤先状をなす大型の甕、68 と 69 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕で、68 は口縁部下と胴部突帯の間を縦の刻目突帯で結ぶ。70 から 72 は甕、73 は鉢。74 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、75 は安山岩製の凹石。

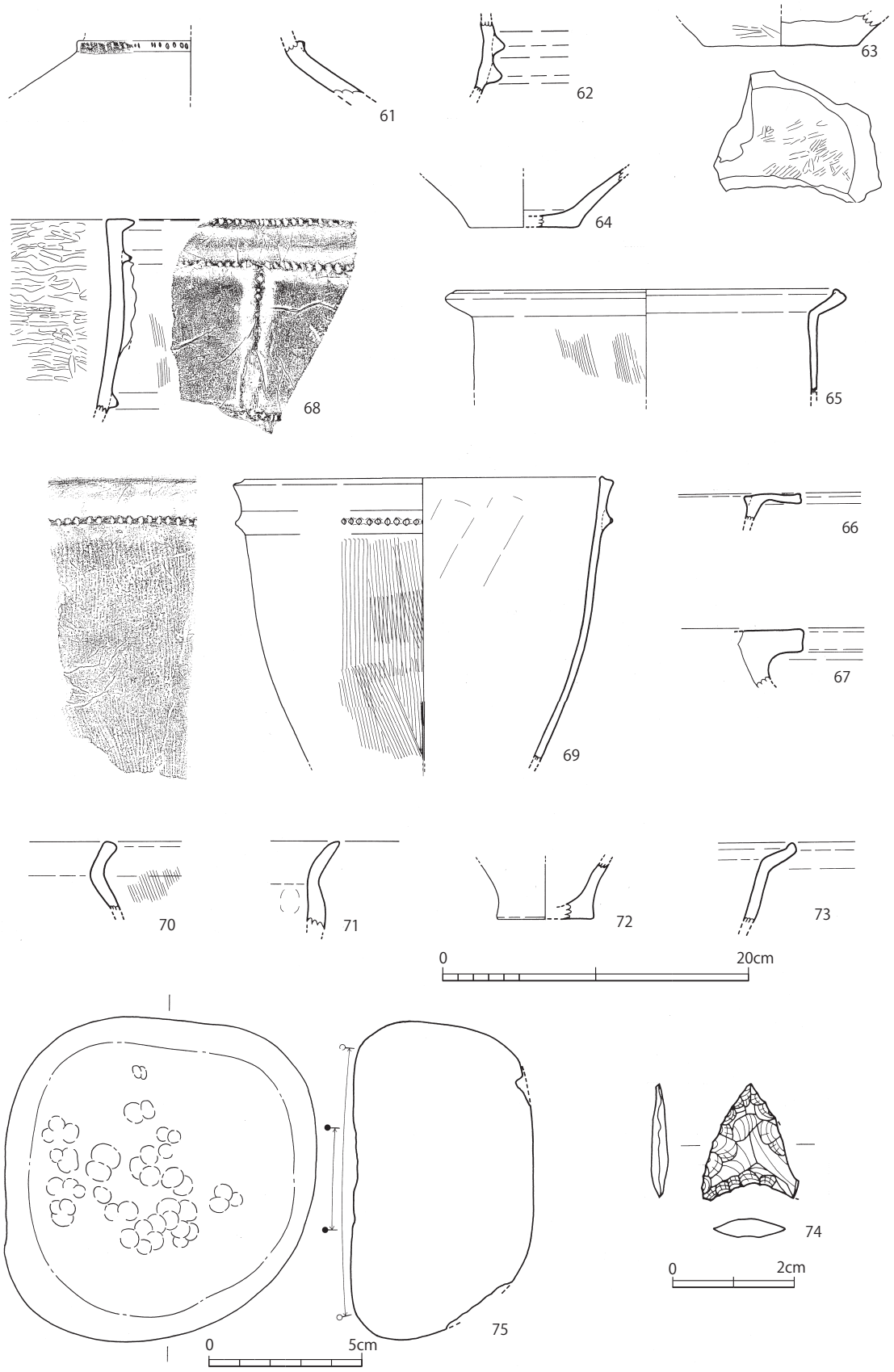
以上から、この土坑の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 18 図　１次９号土坑出土遺物



第 19 図　１次１０号土坑



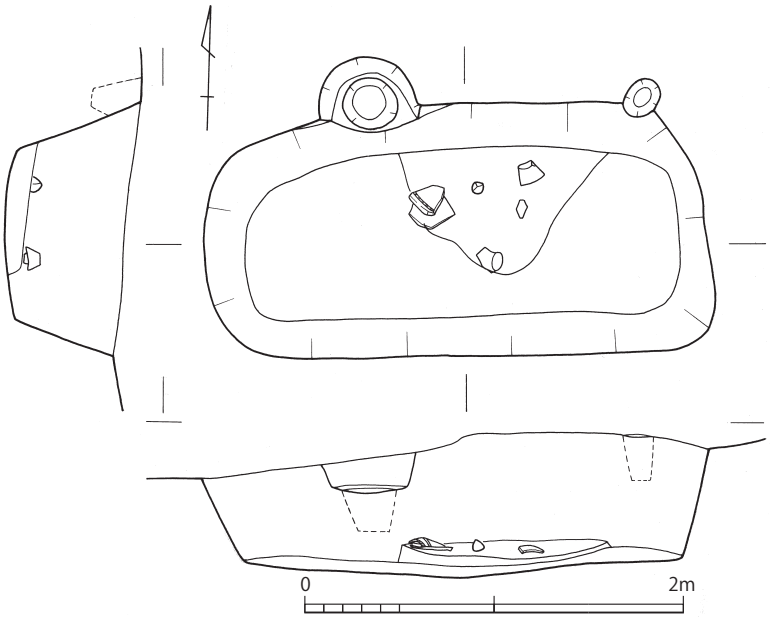
第 20 図　１次１０号土坑出土遺物

５）１２号土坑（第 21 図）

北側の大きな調査区の南寄りのほぼ中央で確認された土坑で、長軸 2.63m、短軸 1.3m、深さ 0.72m の長方形を呈する。北側の中央壁際の床には灰が堆積していた。遺物は主にその灰層の上から出土している。

図示できる遺物は５点である。第 22 図 76 は口縁部が緩やかに外反しながら開く単口縁の壺、77 はやや厚手で、小さく開く甕の口縁部、78 は口縁端部が摘み上げられる甕、79 は底部がわずかに上げ底状を呈する甕底部。80 は安山岩製の敲石である。

以上から、中期の遺物も含むものの、76 の時期を考慮してこの土坑の時期はⅨ期（終末）と考えられる。

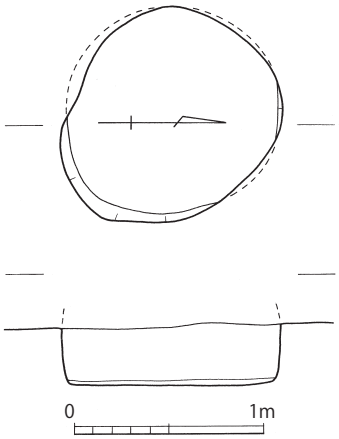


第 21 図　１次１２号土坑

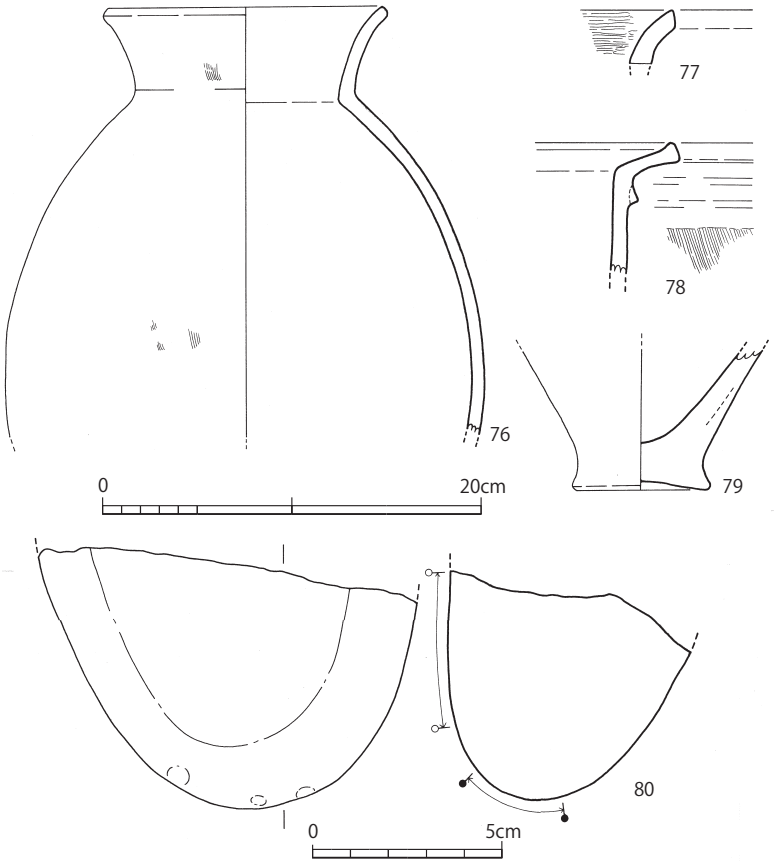
６）１３号土坑（第 23 図）

12 号土坑のすぐ東側にある直径 1.12m、深さ .31m の円形の土坑である。図示できる出土遺物はなかったが、細片では弥生時代中期の土器が出土している。また、堆積土中からは、多くの小礫とともに炭化米が出土している。

おそらく弥生時代中期に属す、断面袋状を呈す円形の貯蔵穴であろう。



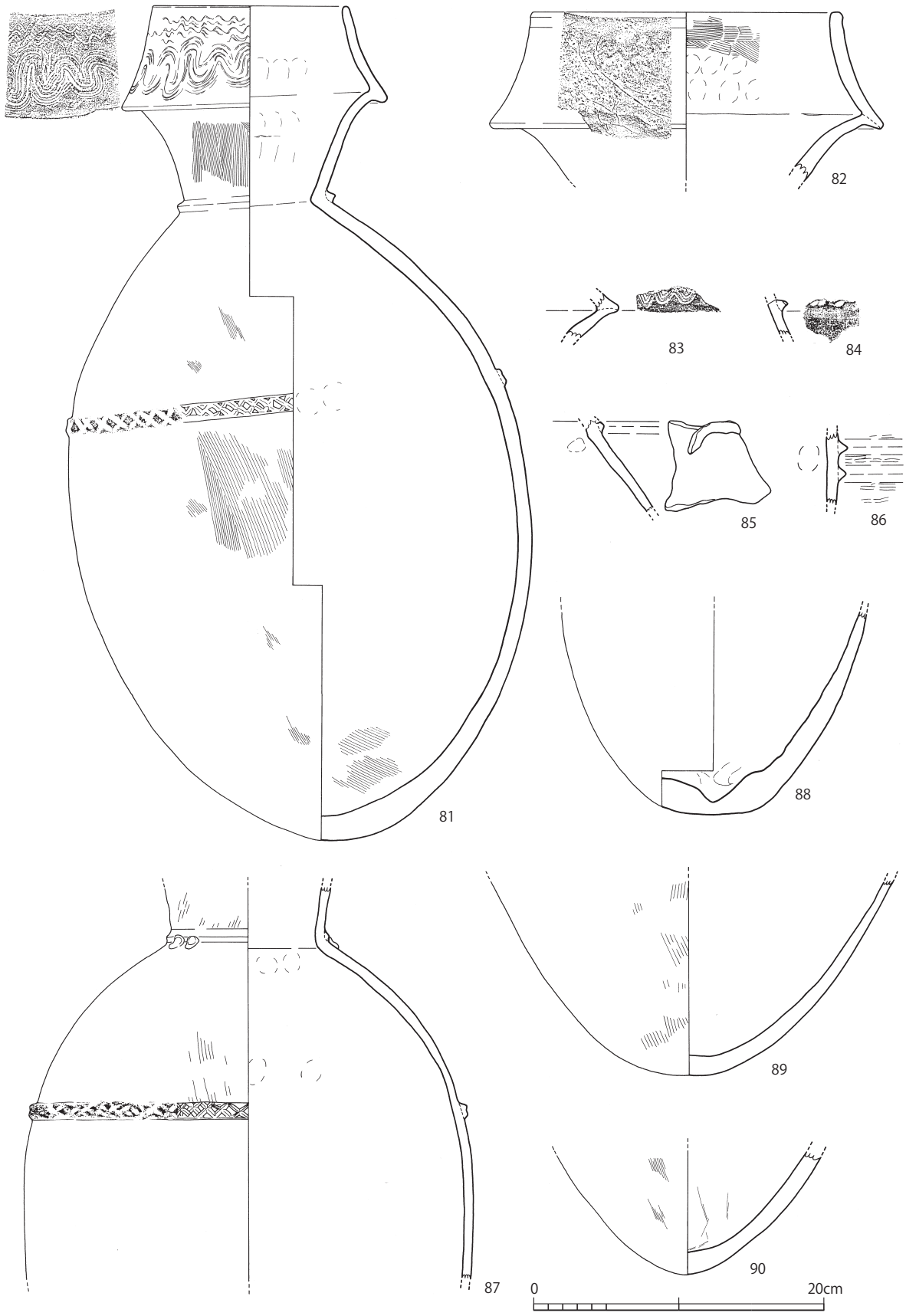
第 23 図　１次１３号土坑



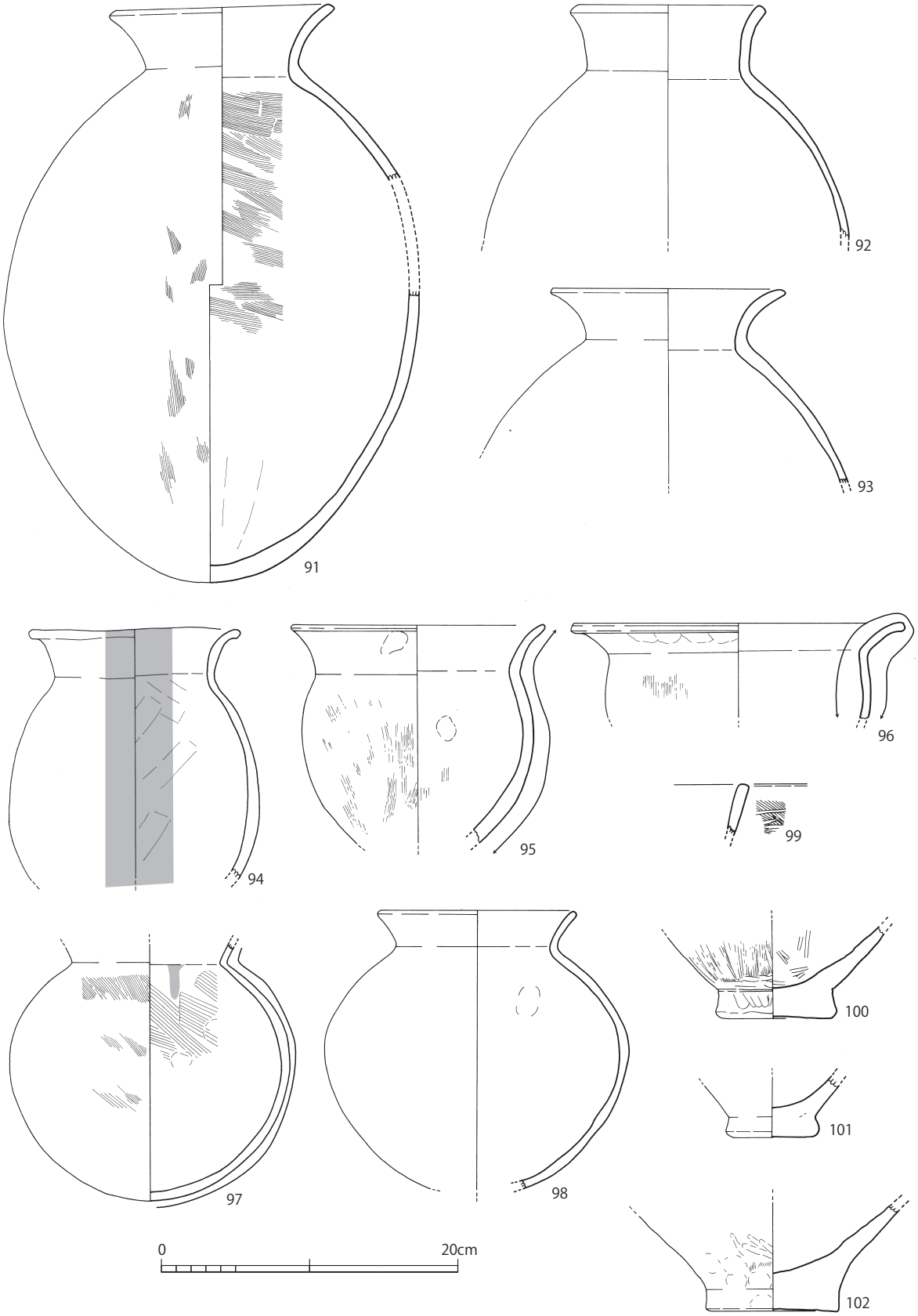
第 22 図　１次１２号土坑出土遺物

（４）その他の遺物

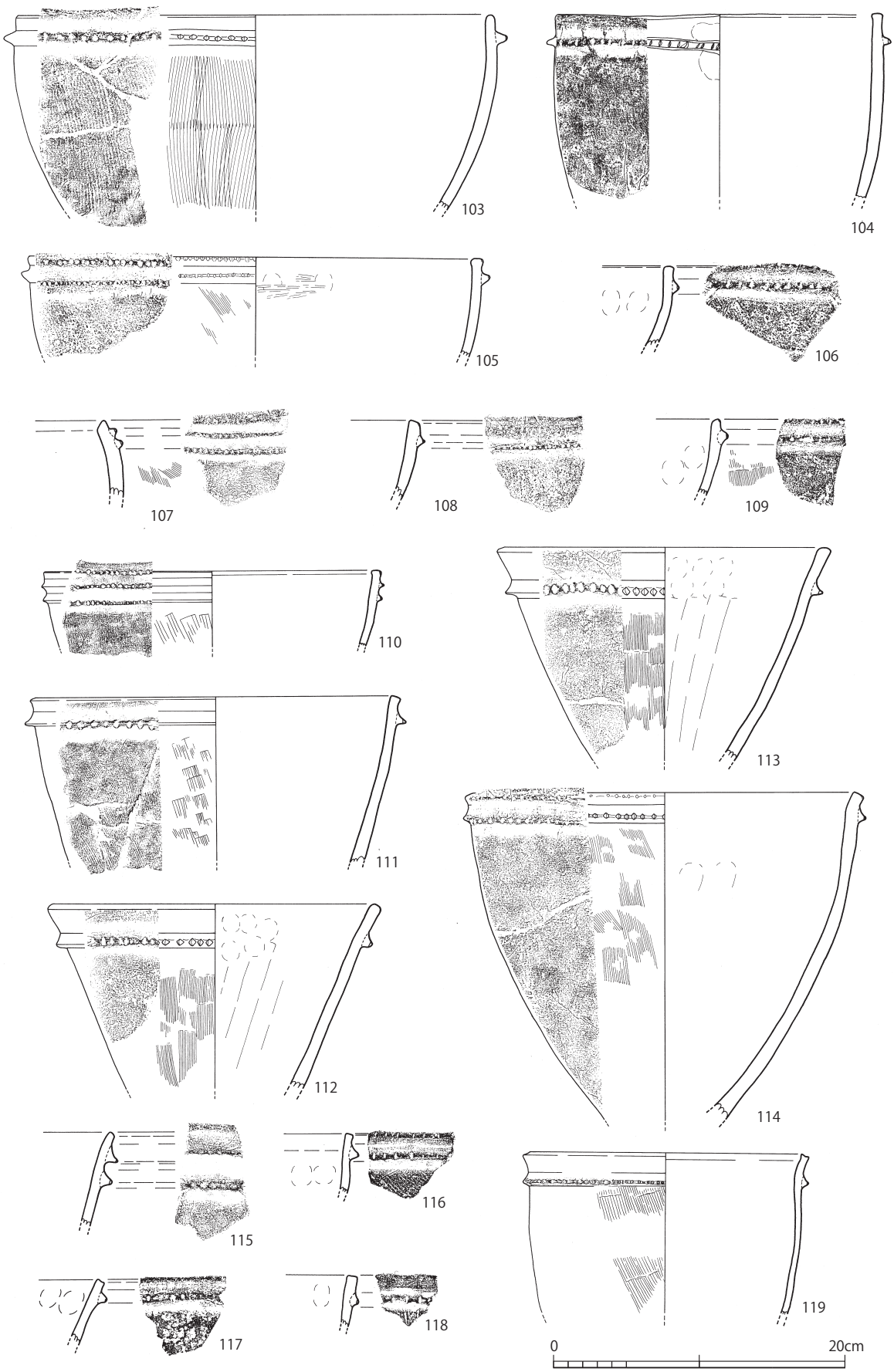
ここでは、１次調査において主に表土や攪乱層中から出土した遺物を説明する。第 24 図 81 から 90 は安国寺式土器壺である。複合口縁部の上半が大きく伸び（81、83）、胴部突帯は断面が扁平な台形で（81、82）、底部は丸底（89、90）であることから、大部分はⅨ期の所産である。第 25 図 91 から 93 は口縁部が緩やかに外反しながら開く壺で、91 が丸底であることから同じくⅨ期の所産か。94 から 98 は小型の壺で、98 以外はベンガラを塗布する。99 は小型の壺の口縁部である。100 から 102 は壺の底部で、いずれも平底をなす。



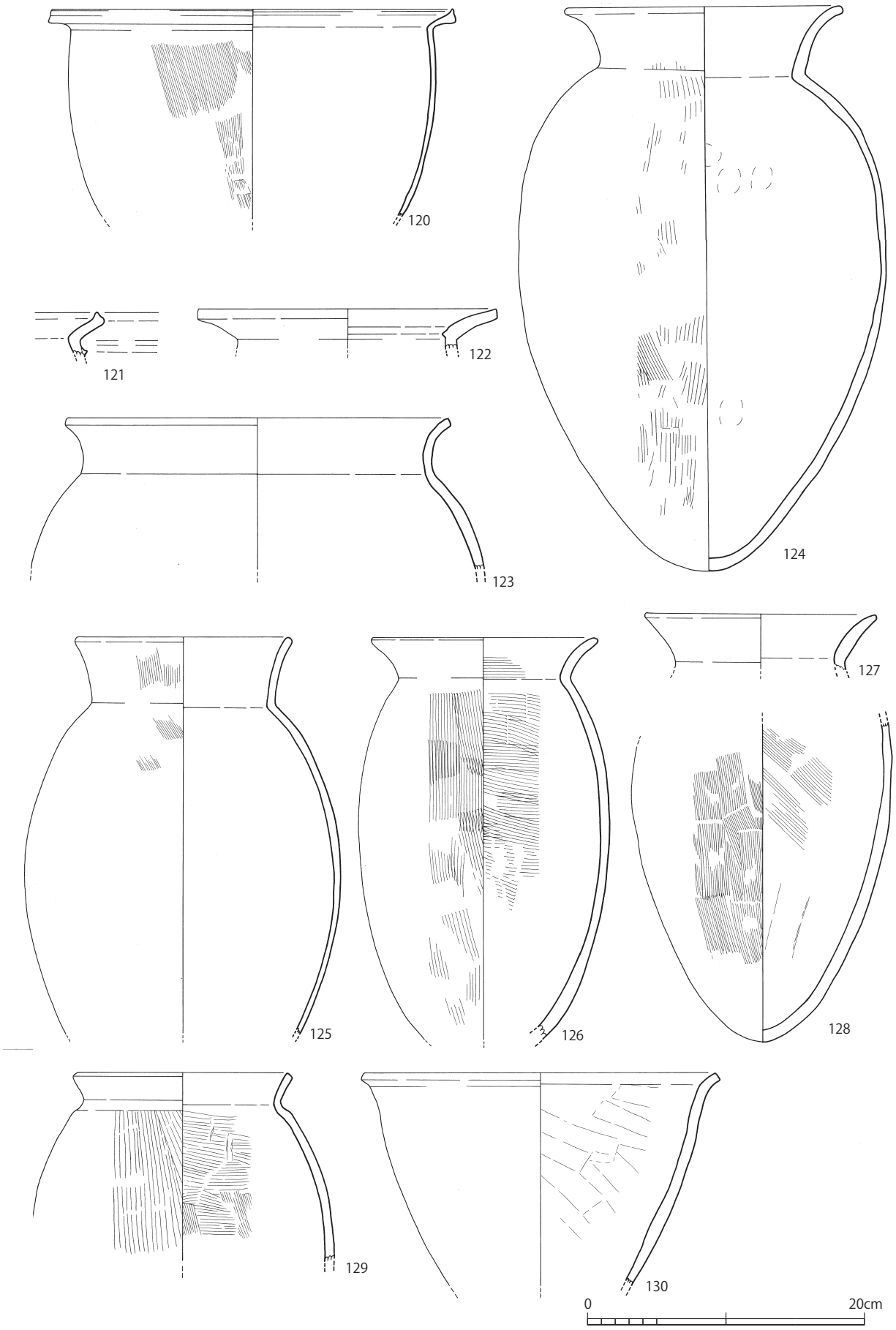
第 24 図　1 次一括遺物①



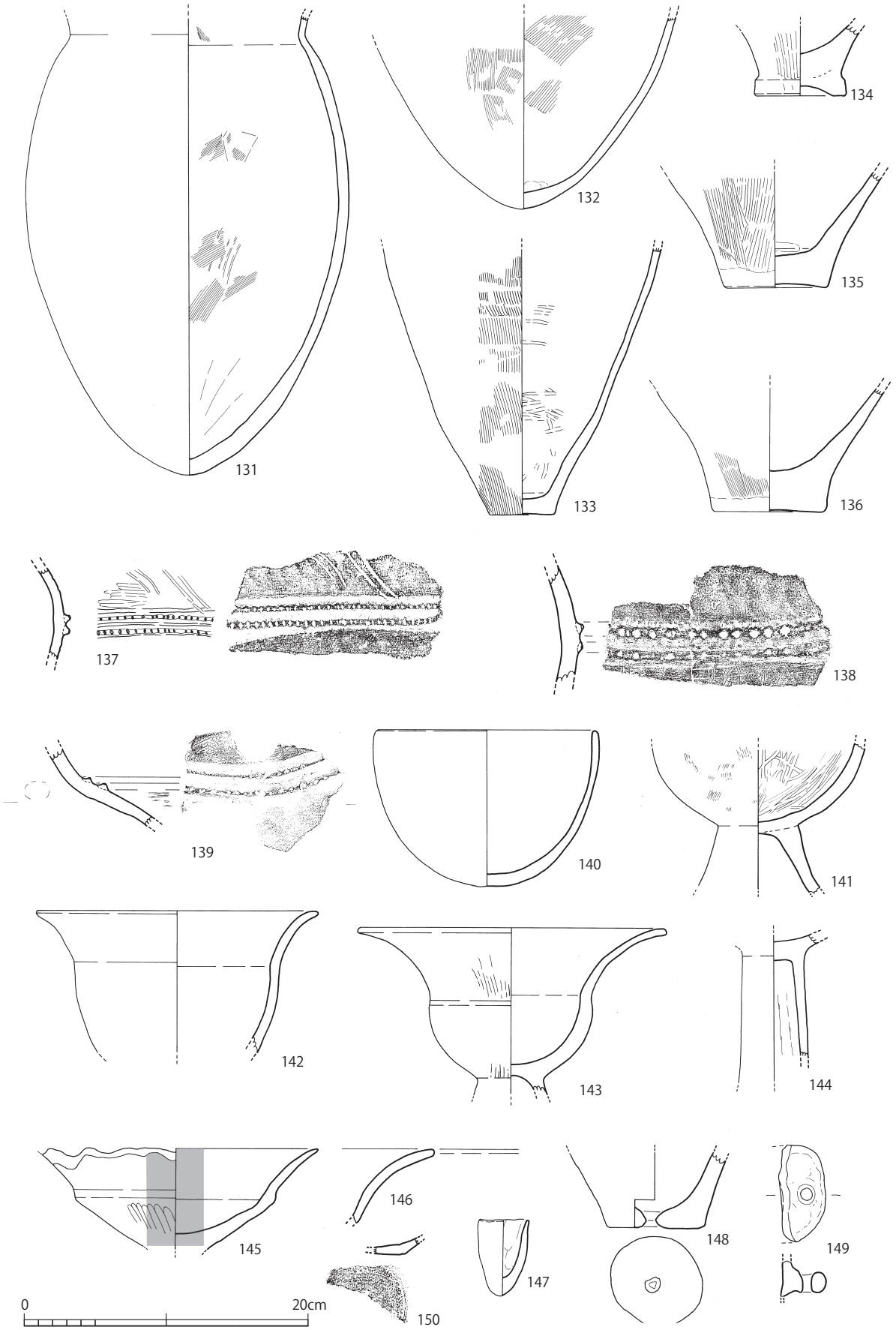
第 25 図　1 次一括遺物②



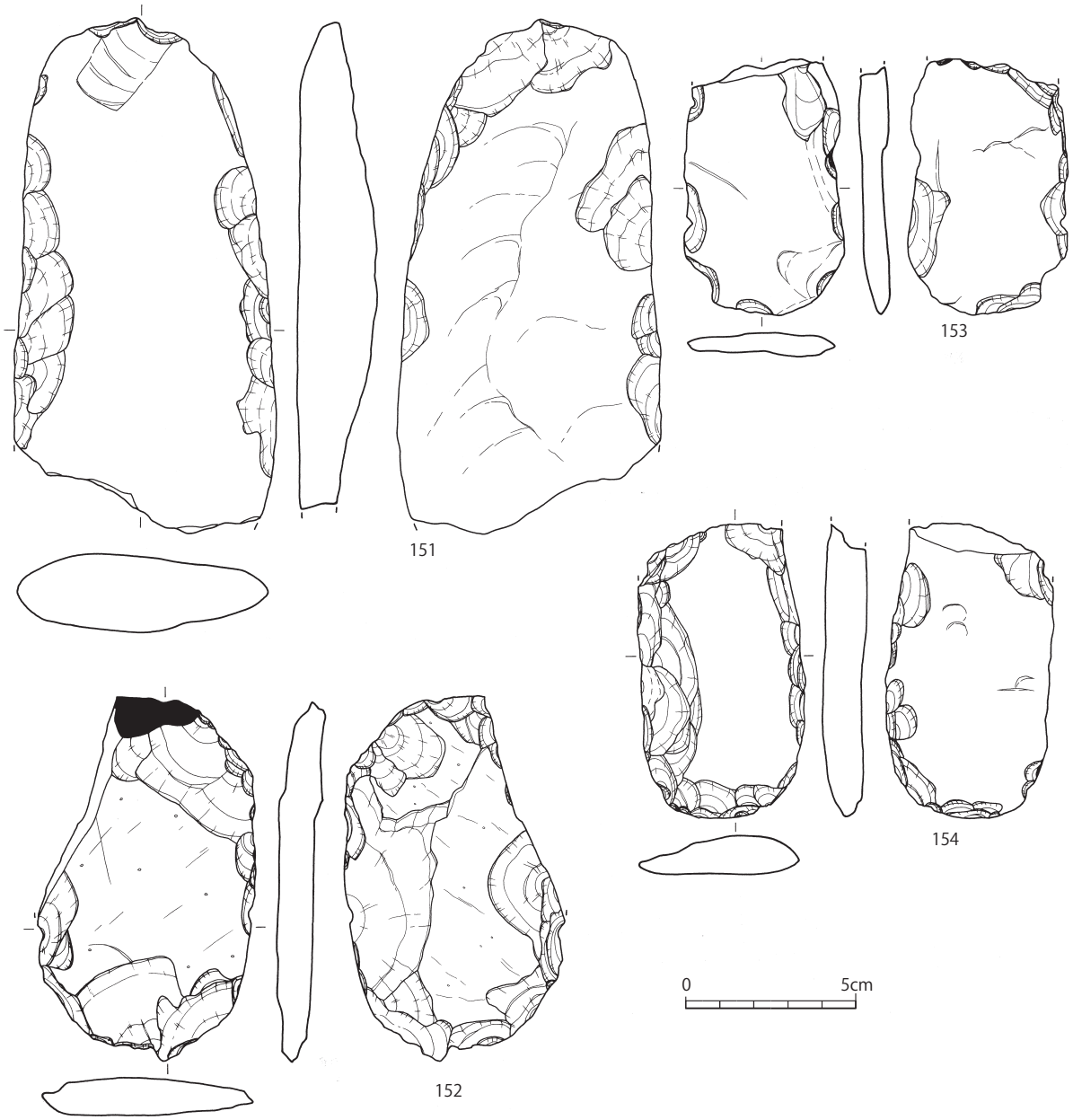
第 26 図　1 次一括遺物③



第 27 図　1 次一括遺物④



第 28 図　1 次一括遺物⑤

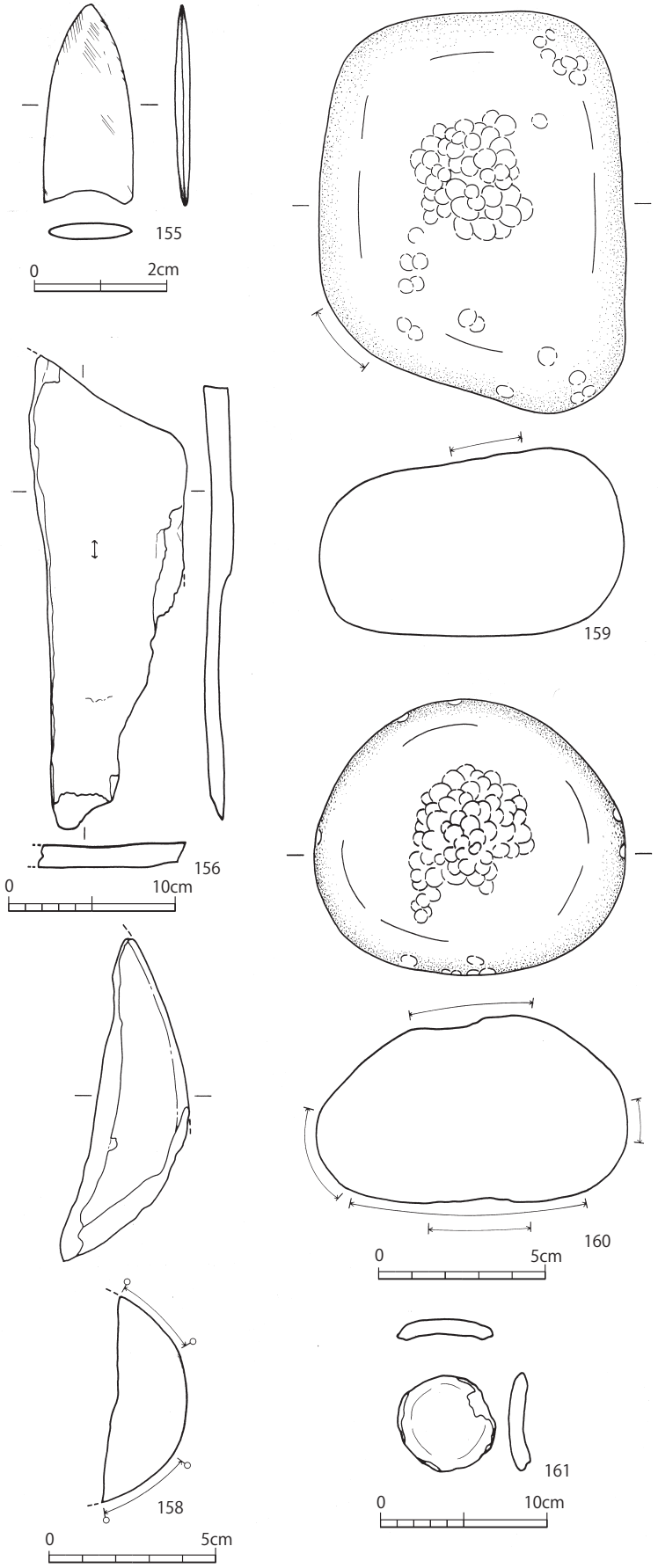


第 29 図　1 次一括遺物⑥

第 26 図 103 から 119 は下城式土器の甕である。口縁部が内湾するもの（103 から 109）、口縁部が緩やかに折れて開くもの（114、119）が古く、直線的に開くものが新しいと考えられるが、遺構共伴資料を見ると必ずしも時期の目安にはならない。しかし、突帯の位置が口縁直下のものが古く、新しいものが下がる傾向があるので、前者が内湾するものに多いことは、やはり時期差を示す可能性がある。

第 27 図 120 から 130 はその他の甕。120 と 121 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕。124 から 126 は口縁部がわずかに外反しながら開くもの、129 は口縁部が「く」字に折れるもの、130 は口縁端部で小さく折れて開くもので、この 130 と 120、121 は中期、その他は後期の所産である。

第 28 図 131 から 136 は甕で、丸底と平底がある。134 は上げ底状を呈する。137 と 139 はⅠ期に属する壺で、肩部と胴部に小さな刻みを入れた突帯を廻らせる。138 はⅣ期のみに見られる系譜不明の壺で、単口縁で胴部に二条一組の刻目突帯を廻らせるものと考えられる。137 に比べ、刻目が大きい。140 は丸底の鉢、141 から 143 は脚付きの鉢、144 から 146 は高坏である。147 は長胴のミニチュア土器、148 は甑、149 は取っ手である。150 は中世の底部糸切り土師器小皿である。



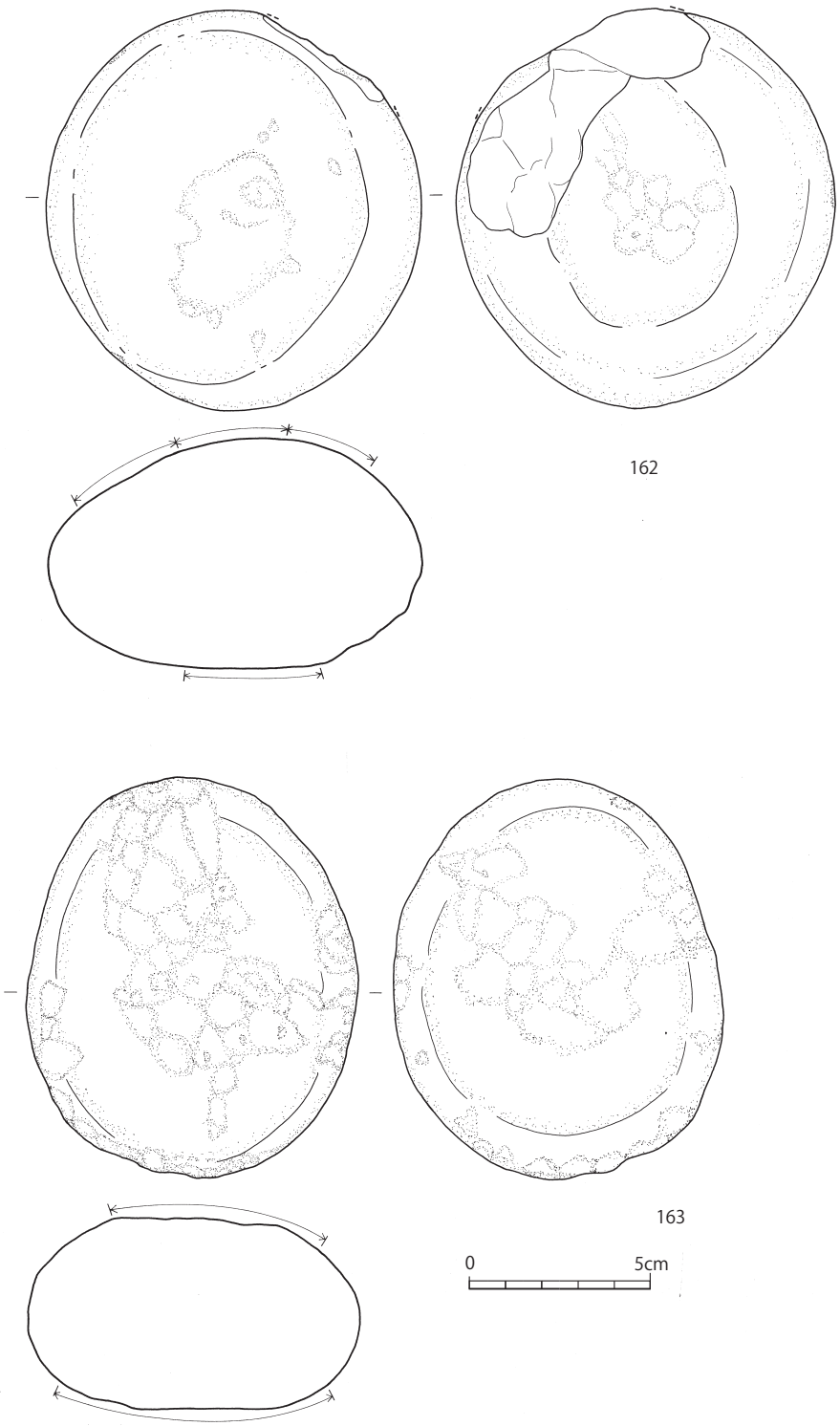
第 30 図　1 次一括遺物⑦

第 29 図 151 から 160 及び第 31 図 162、163 は石器である。155 は蛇紋岩製の磨製石鏃、156 は緑泥片岩製の砥石、159 と 160 は敲石、磨石、第 29 図 151 から 154 は打製石斧である。161 は土器片加工品である。

（5）まとめ

1 次調査は、「試掘調査」という位置づけであったことから、遺構の図面は通常作図するはずの 20 分の 1 縮尺図を幾つかの土坑を除いて作成していない。そのため、遺憾ながら遺構の深さといった重要な情報が欠落してしまっている。

しかしながら、この 1 次調査において台地のほぼ中央部で弥生時代の集落が広がっている可能性が確認できたことは、後の調査を進める上で貴重な成果であった。



第 31 図　1 次一括遺物⑧

第３節　第２次調査

（１）調査の概要（第 32 図）

第１次調査区の北側で、台地の北部約 126㎡を調査した。検出された遺構は竪穴建物３基である。なお、調査時に１号､2 号とした落ち込みは遺構とは認められなかったので、除外している。

（２）遺構と遺物

竪穴建物

1）３号竪穴建物（第 33 図）

調査区中央で確認された竪穴建物で、略南北 5.0m、略東西 5.2m（推定）のほぼ正方形を呈する。５号竪穴建物を切っており、４号竪穴建物との切り合い関係は不明である。上部は削平を受けており、壁はほとんど残っていない。床面には４か所に焼土の堆積があり、ほぼ中央の最も大きな部分が炉であると考えられる。柱穴は東側の２本は確認できたが、西側は確認できていない。おそらく４本柱建物になるであろう。

図示できる出土遺物は 10 点である。第 34 図 164 から 166 は安国寺式土器壺で、164 は頸部に一条の断面三角突帯を巡らす。165 は口縁部上半に波状文を施す。166 は頸部下の二条の突帯に勾玉状浮文が添付される。168 と 169 は下城式土器甕で、168 は二条の刻目突帯を廻らせる。170 は小型の壺か。172 と 173 は打製石鏃で、いずれもサヌカイト製、171 は結晶片岩製の磨製石鏃である。

以上から、この竪穴の時期はⅦ期（後期中葉）からⅧ期（後期後葉）と考えられる。

２）４号竪穴建物（第 35 図）

調査区中央で確認された竪穴建物で、南北 4.5m、東西 4.0m の長方形を呈する。深さのデータがなく、遺憾ながら不明である。床面のほぼ中央に 0.6 m × 0.5m の範囲が焼土化した部分があり、地床炉と考えられる。

図示できる出土遺物は４点である。第 36 図 174 は安国寺式土器壺で､口縁部上半に一条の櫛描波状文がある。175 は口縁部が「く」字形に大きく開く長胴の甕、176 は脚付きの鉢と思われる。177 は鉄製の鉈である。全長は 11.7㎝である。

以上から、この建物の時期はⅦ期（後期中葉）からⅧ期（後期後葉）と考えられる。

第 32 図　２次区遺構配置図

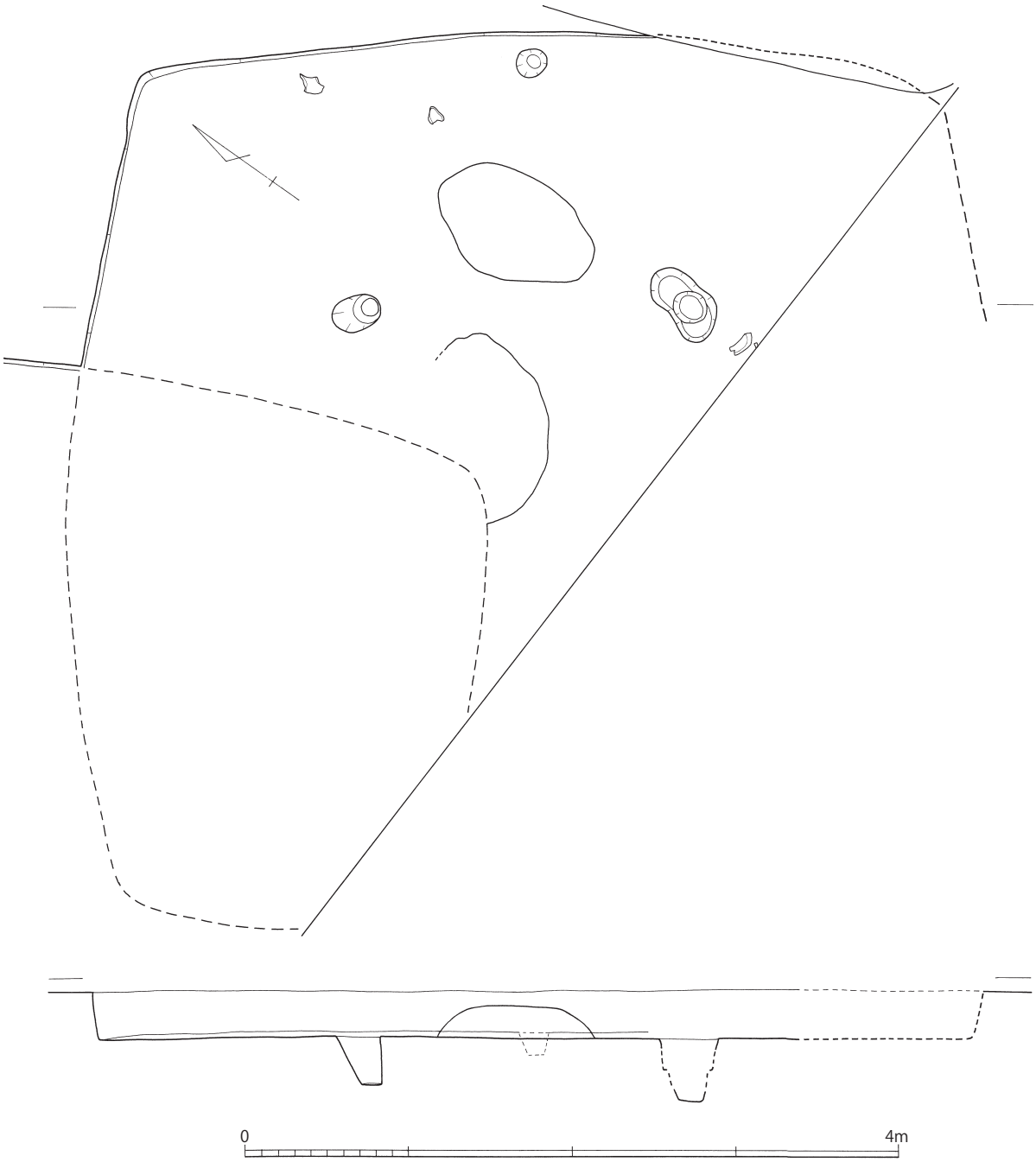
３）５号竪穴建物（第 37 図）

調査区東側で確認された竪穴建物で、略東西方向で 5.7m、南北方向は調査区外に伸びているため不明である。また、南西角部で３号竪穴建物を切っている。床面には３か所焼土が確認できたが、中央やや東寄りのものが炉跡であろう。また、ピットは数か所で確認されたが、明確な主柱穴は指摘できない。さらに、炉と考えられる焼土と壁の間に、直径 1.4m の円形の土坑が確認されているが、この建物との関係は不明である。

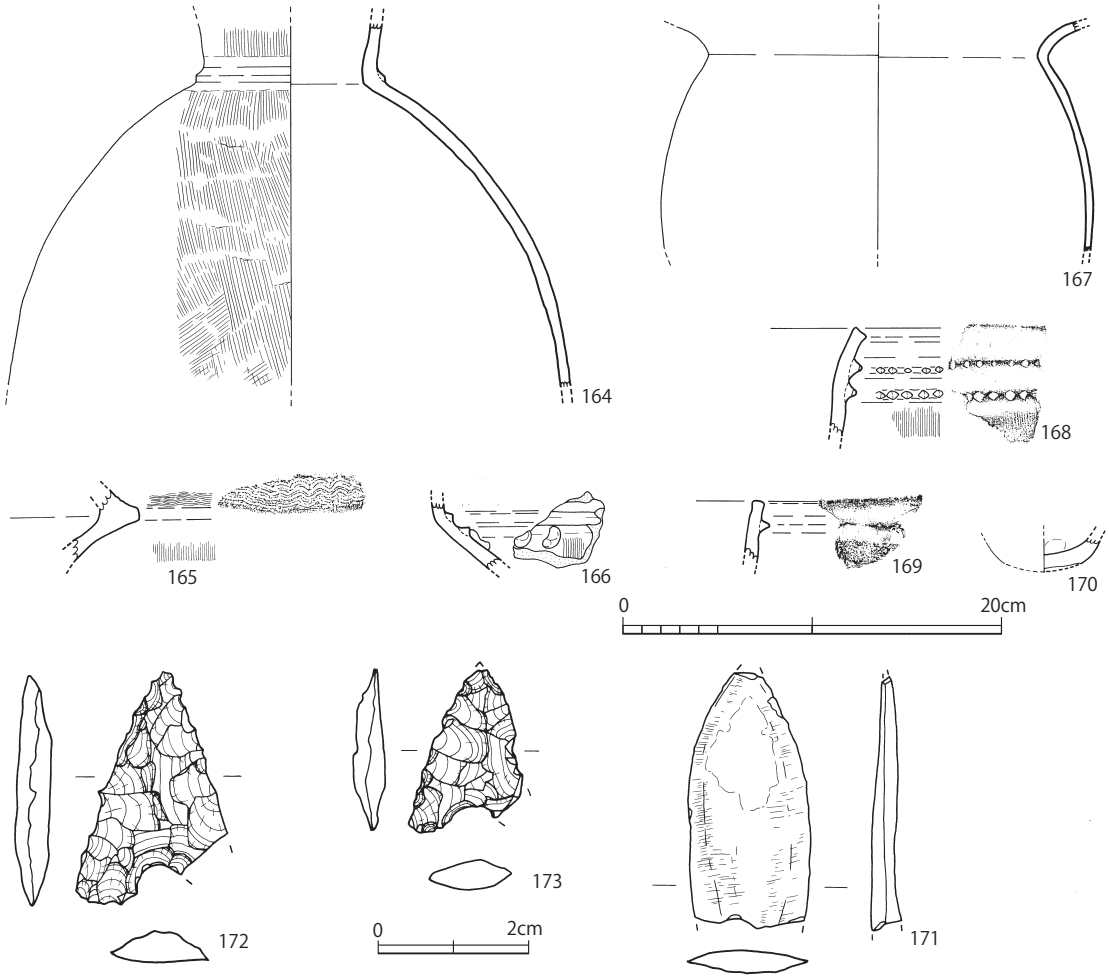
図示できる出土遺物は６点である。第 38 図 178 と 179 は甕で、178 は緩やかに外反しながら開く口縁部で、179 はわずかに上げ底を呈する底部。180 は取っ手付きの鉢で、取っ手は大部分欠けているが、149 のような形になる

だろう。181 は円盤状の底部からやや内湾しながら立ち上がる体部に、外反する口縁部が付く鉢。182 は高坏か。183 は碧玉製の管玉である。

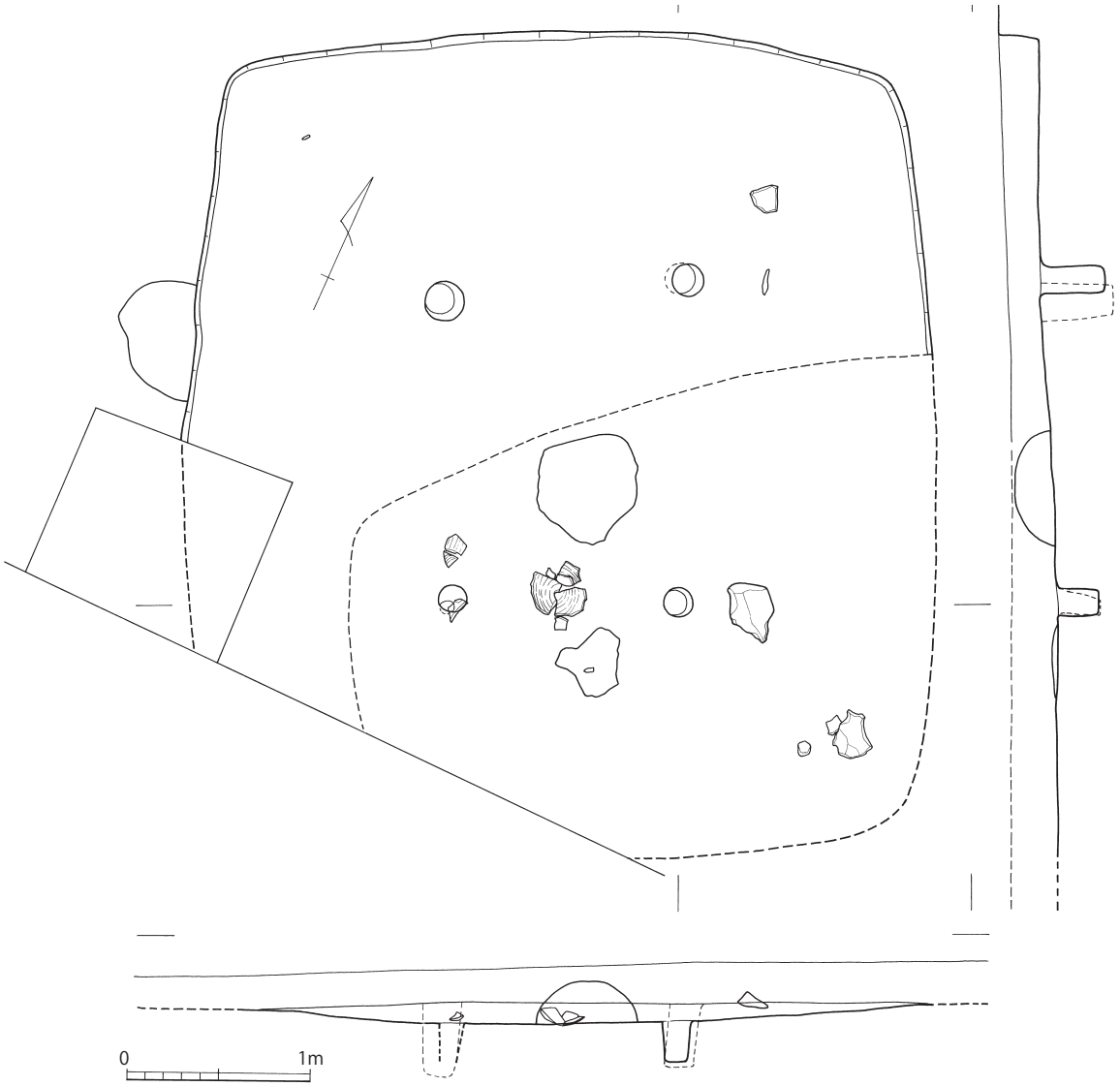
以上からこの建物の時期はⅦ期（後期中葉）と考えられる。



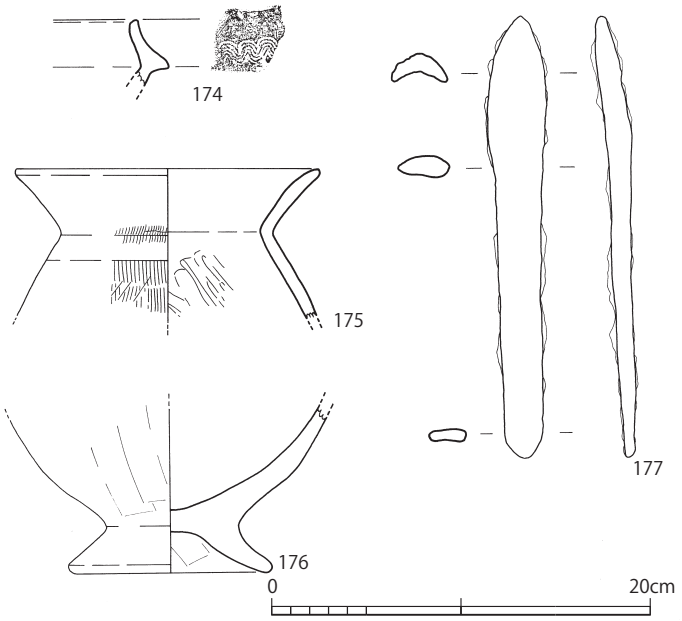
第 33 図　2 次 3 号竪穴建物



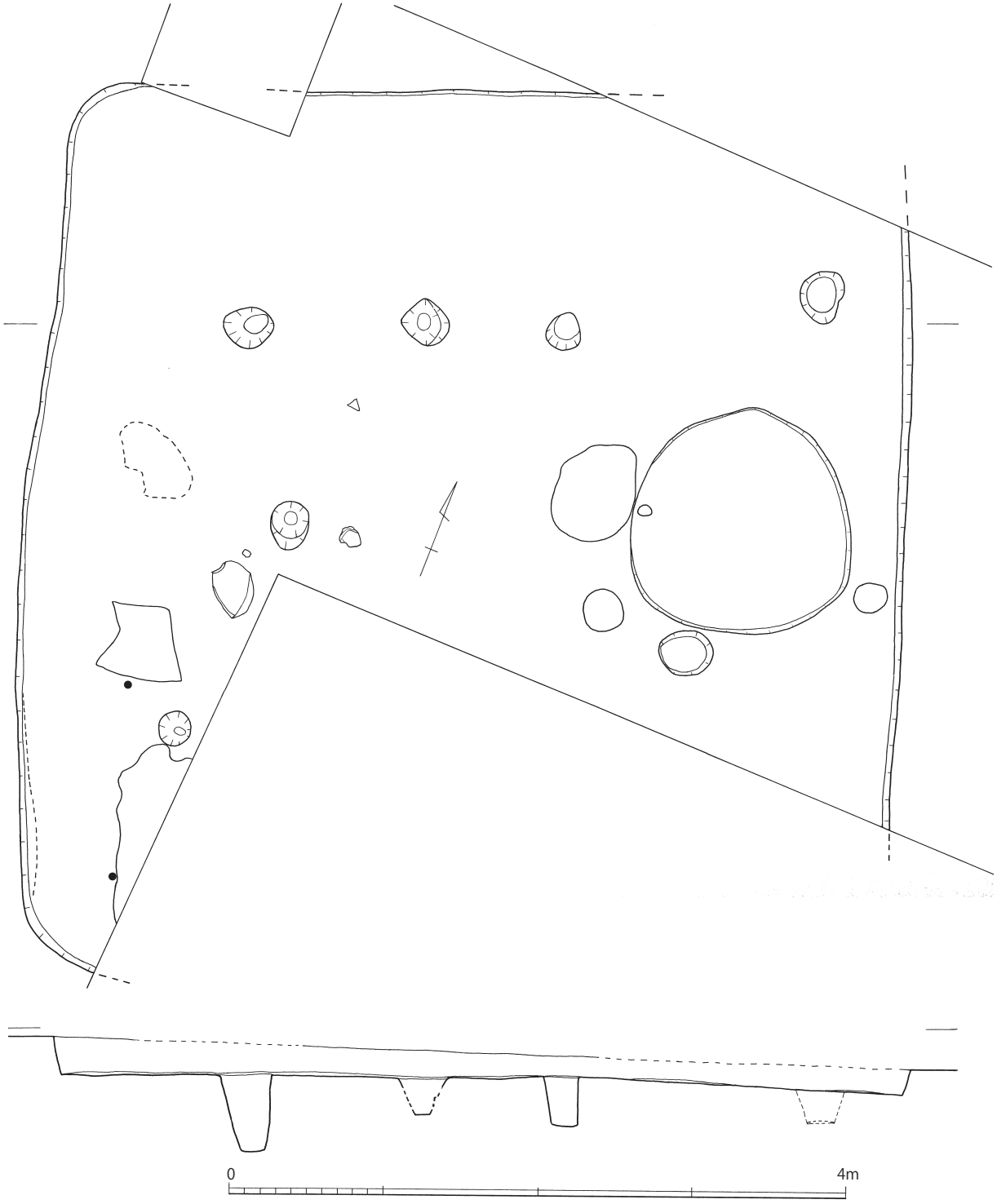
第 34 図　2 次 3 号竪穴建物出土遺物



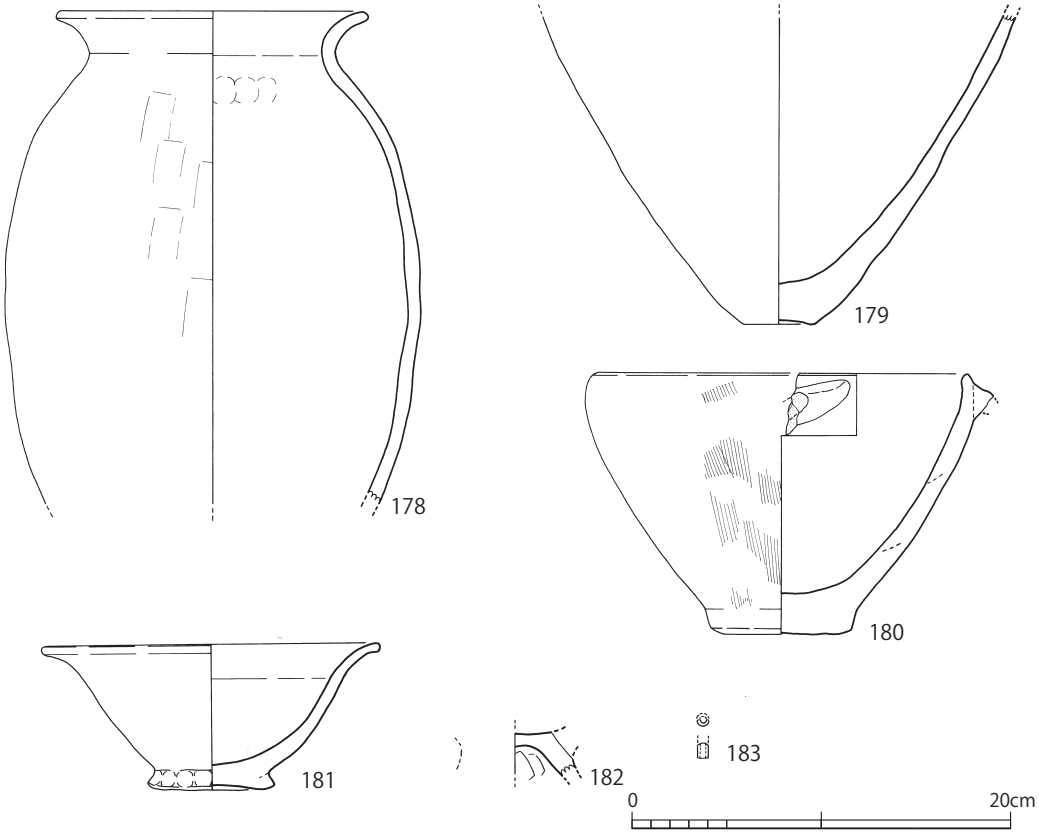
第 35 図　２次４号竪穴建物



第 36 図　２次４号竪穴建物出土遺物



第 37 図　２次５号竪穴建物



第 38 図　２次５号竪穴建物出土遺物

（３）その他の遺物

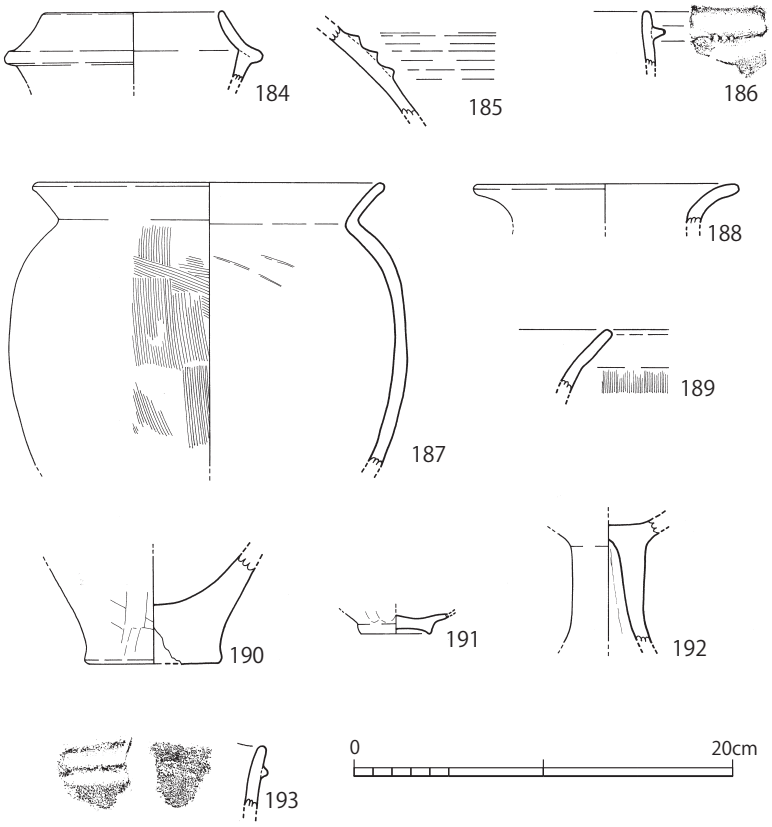
ここでは、調査で１号竪穴建物と２号竪穴建物とした落ち込みから出土したものであるが、最終的に遺構と確認できなかったな土器（184 から 193）と、一括の土器群として取り上げられた資料（194 から 216）、さらに表土などから出土した一括資料（217 から 241）を扱う。

第 39 図 184 と 185 は安国寺式土器壺である。186 は下城式土器甕、187 から 189 は口縁部が「く」字形に開く甕、190 と 191 は甕の底部である。191 は上げ底状を呈する。192 は高坏で、脚部は円柱状に伸びる。193 は無刻目突帯を廻らせる縄文時代晩期の鉢。

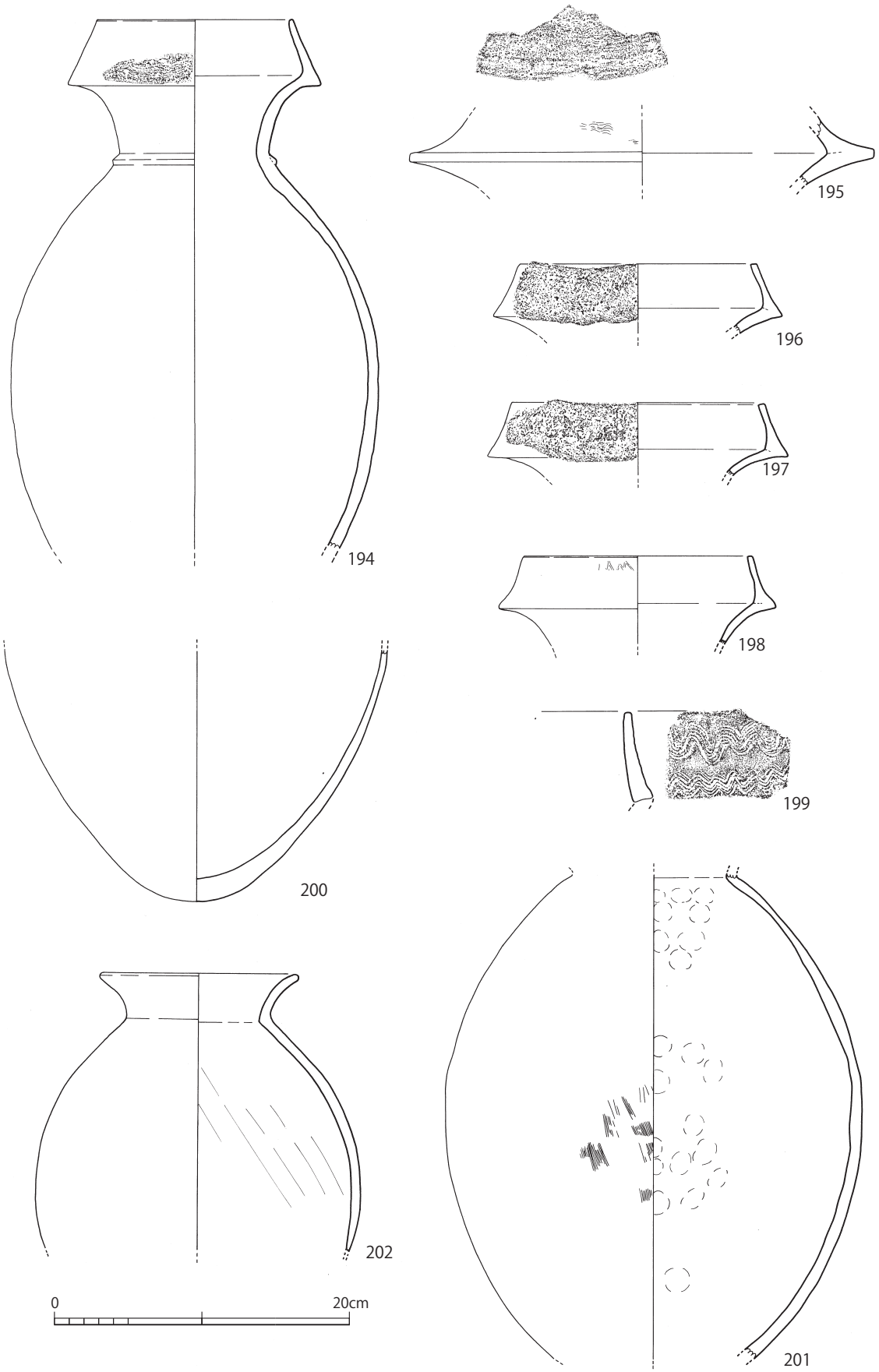
第 40 図 194 から 200 は安国寺式土器壺である。口縁部上半は比較的長く伸びる。底部（200）は丸底である。201 も丸底になろう。202 は単口縁の壺。203 から 212 は甕である。203 は逆 L 字形の口縁部を持つものでベンガラを塗布する。204 から 210 は口縁部がやや外反しながら開くもので、210 が球形を呈する以外は長胴である。211 は下城式土器甕、212 はやや平底気味の甕底部である。213 は外面から口縁部内側までベンガラを塗布する小型の壺、214 は頸部に穿孔のある小型の壺、215 は裾部で大きく広がる高坏である。216 は結晶片岩製の磨製石鏃である。

第 42 図 217 から 221 は安国寺式土器壺である。217 と 218 は口縁部上半の伸びが著しくはない。220 と 221 は扁平な刻目突帯を頸部に廻らせる。222 から 227 は甕。222 は下城式土器、223 と 224 は東北部九州系の甕である。228 と 229 は鉢、230 も口縁部を緩やかに開く鉢か。231 は脚付きの鉢、232 と 233 は高坏である。234 は土器片加工品、235 は扁平な摘みを持つ須恵器坏蓋である。

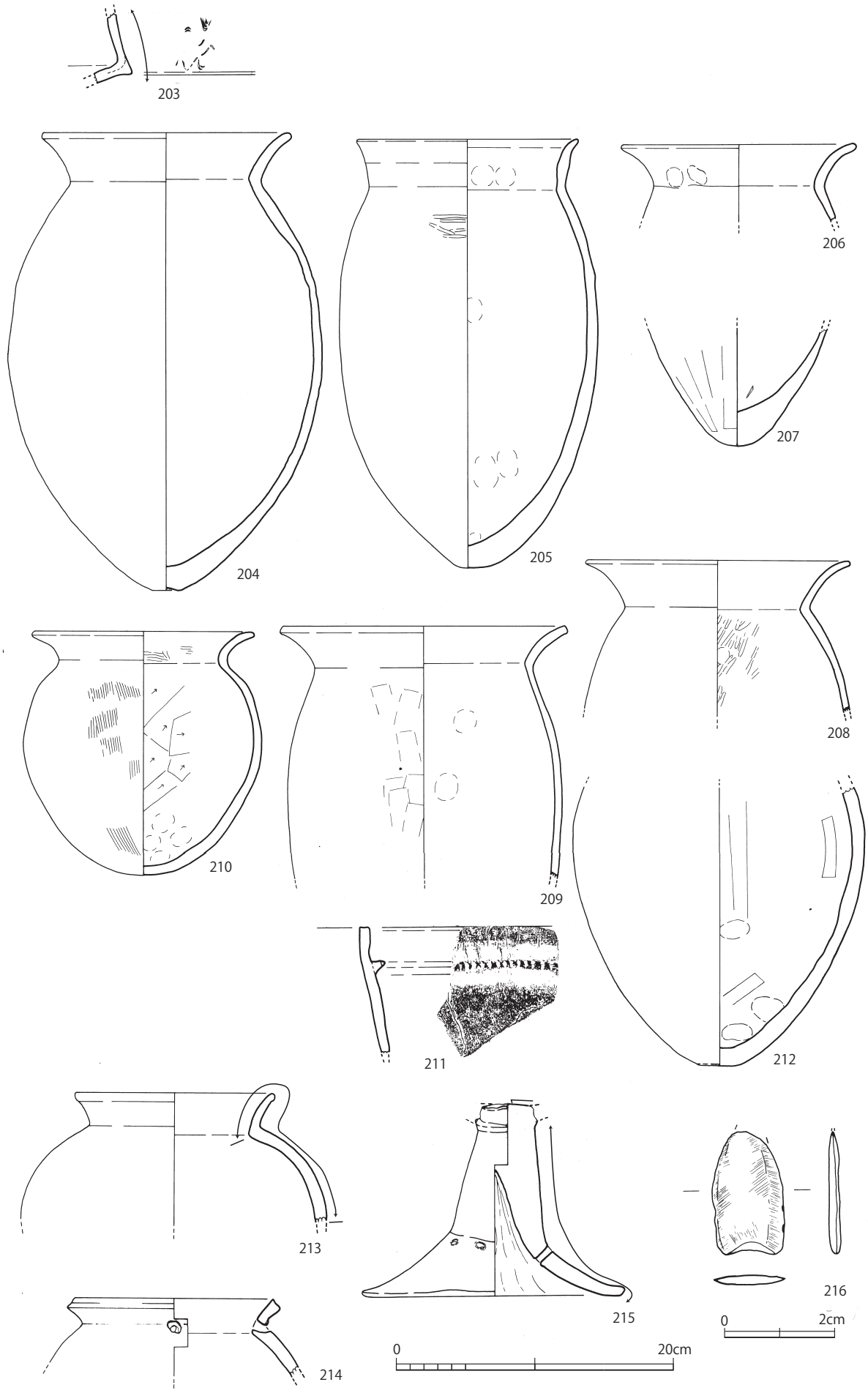
第 43 図 236 から 241 は石器である。236 は安山岩製の打製石斧、237 は緑色結晶片岩製の磨製石斧、238 は結晶片岩製の磨製石鏃、239 と 240 は碧玉製の管玉、241 は安山岩製の磨石である。



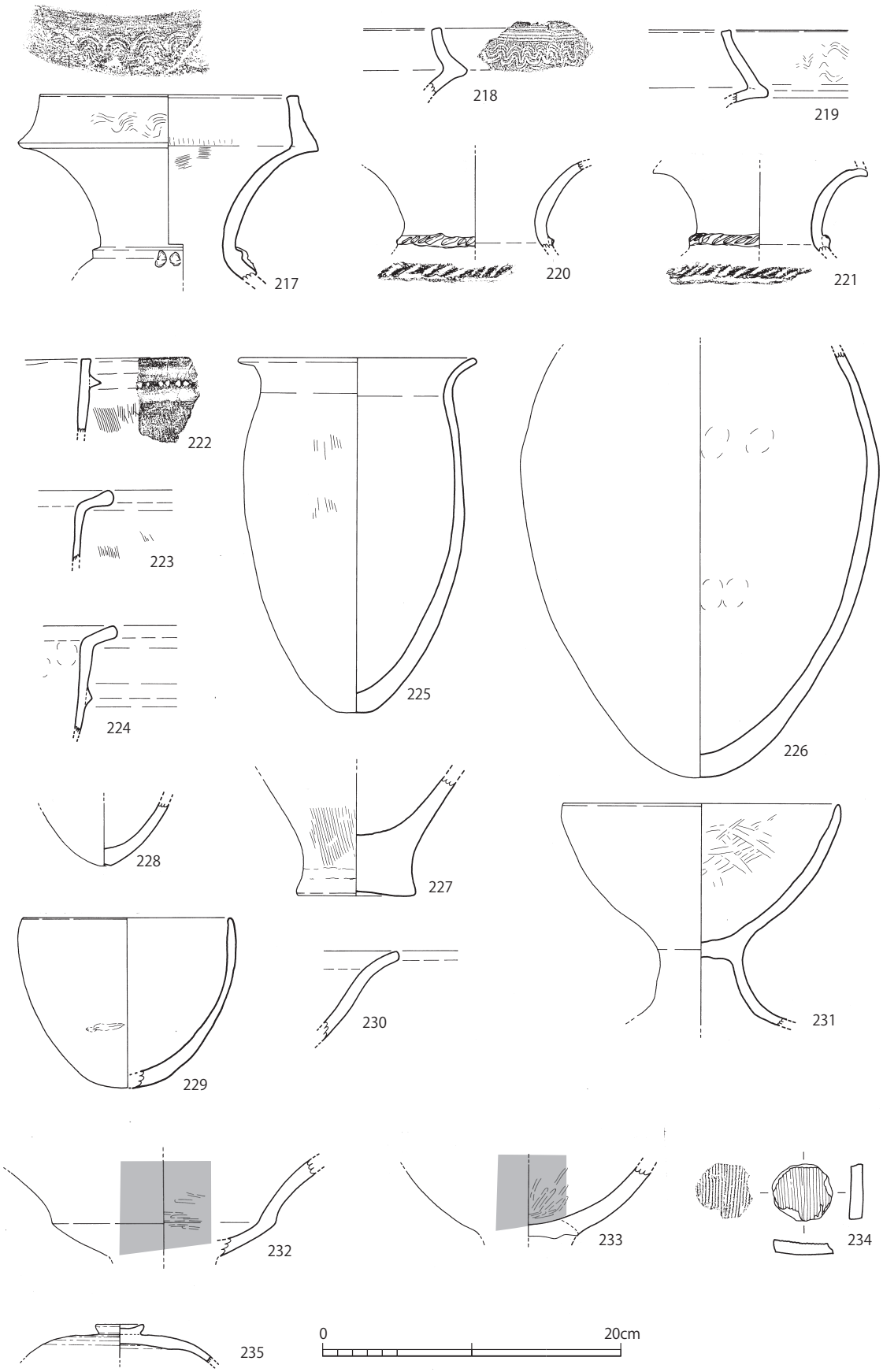
第 39 図　２次１，２号竪穴建物出土遺物



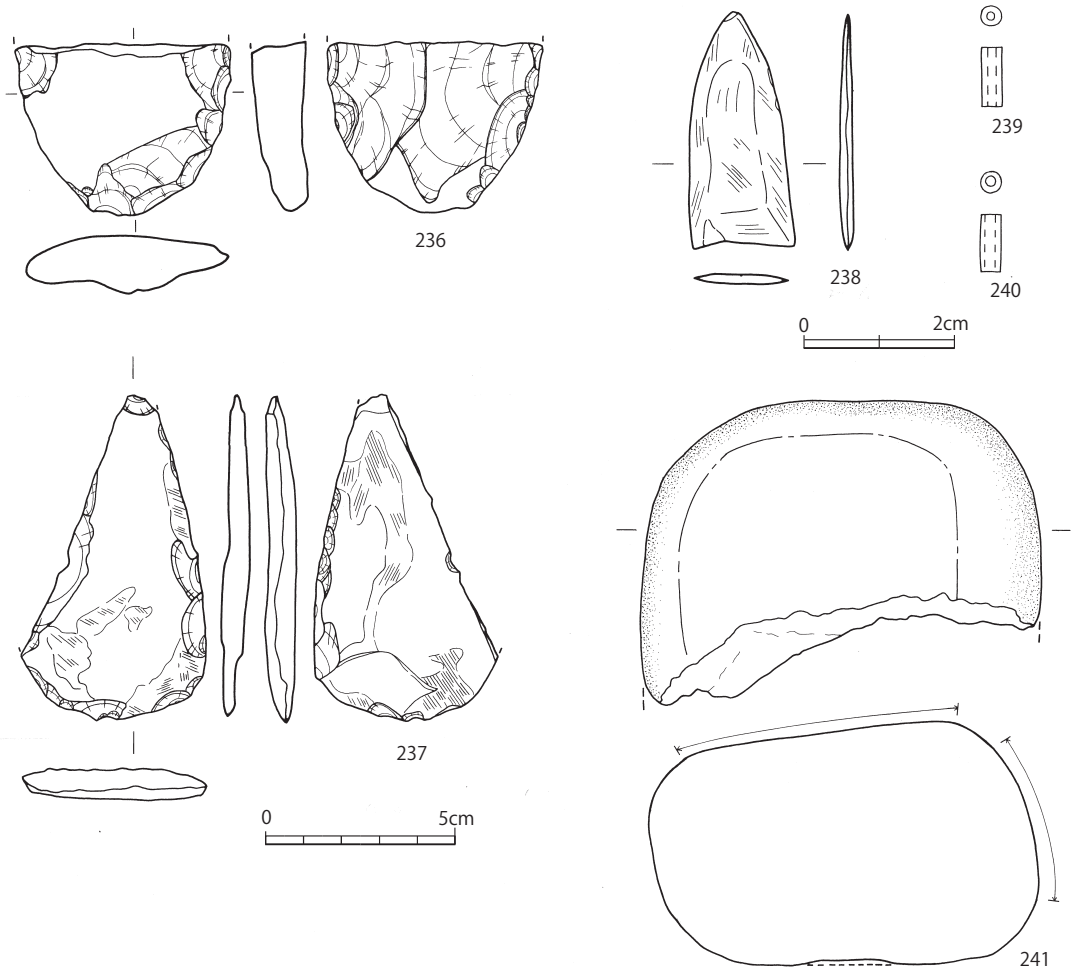
第 40 図　２次土器群遺物①



第 41 図　２次土器群遺物②



第 42 図　２次一括遺物①



第 43 図　２次一括遺物②

（４）まとめ

１次調査同様予備調査という位置づけであったため、記録された情報が少なく、復元が十分に果たせなかったが、竪穴建物を３基確認できた。なお、報告では１号と２号が欠番となっているが、調査時には遺構と考えられていたものの、最終的には浅い落ち込みと判明したものである。

第４節　第３次調査

（１）調査の概要

台地の中央部やや西側、約 215㎡を調査した。調査区は西側の調査区（3 次Ａ区）と、東側の調査区（3 次Ｂ区）に分かれている。検出された遺構は竪穴建物のみで、Ａ区で７基、Ｂ区で５基である。以下ではＡ区の遺構を A1 号、Ｂ区の遺構を B2 号などと記す。

（２）遺構と遺物

竪穴建物

１）Ａ１号竪穴建物（第 45 図）

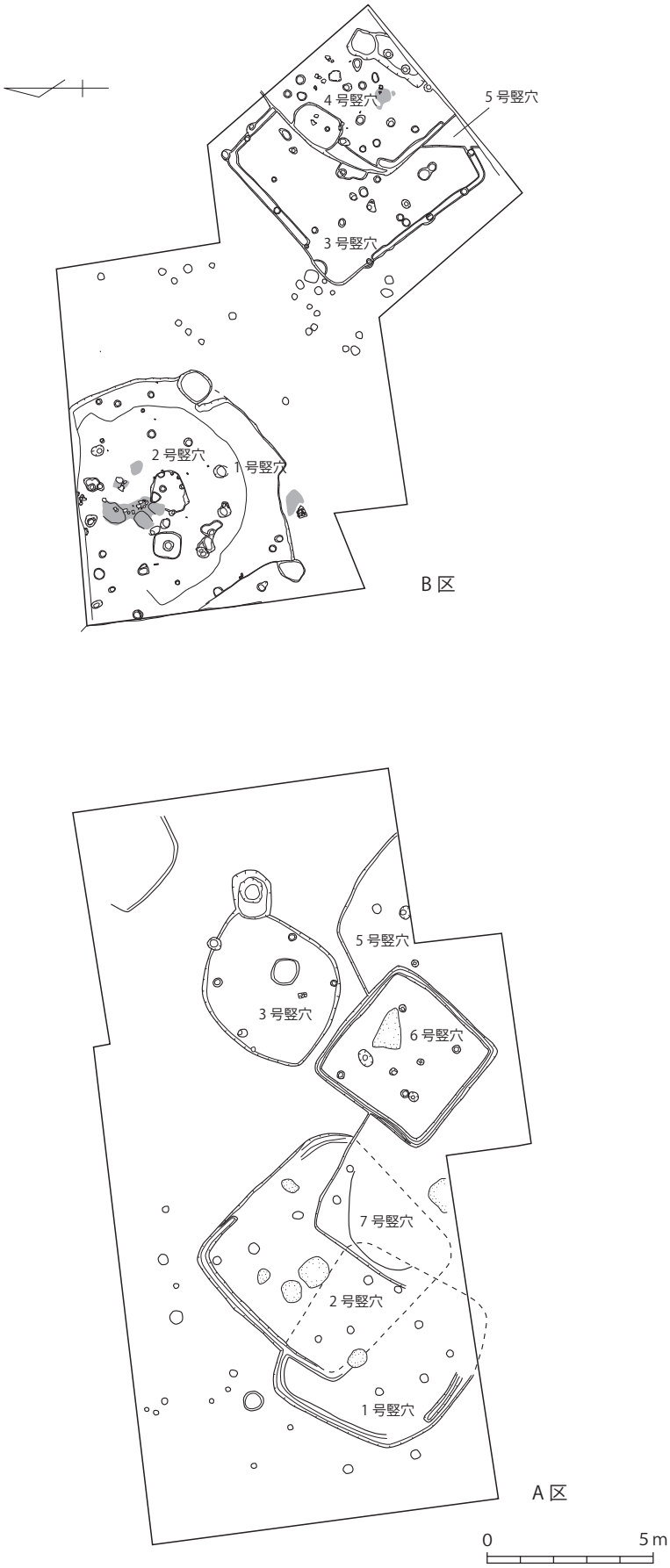
Ａ２号竪穴建物に切られており、全形はうかがい知れないが、幅 15 ㎝、深さ 10㎝ほどの壁溝によって、一辺 5.8m 程度に復元が可能である。南側は削平を受け残っていないが、壁溝は多角形あるいは隅丸方形の形状を呈す。柱穴は数カ所で確認されたが、主柱穴は不明である。炉跡も確認されなかった。

図示できる出土遺物は 10 点である。第 46 図 242 は口縁部下に刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、243 は小型の壺または鉢の口縁部か。244 は丸底を呈する鉢、245 から 247 は高坏である。248 と 249 は同型、同大の鉄製品であるが、刃は付けられておらず､鉄素材であろうか。250 はチャート製の打製石鏃、251 は蛇紋岩製の石錘と考えられる。

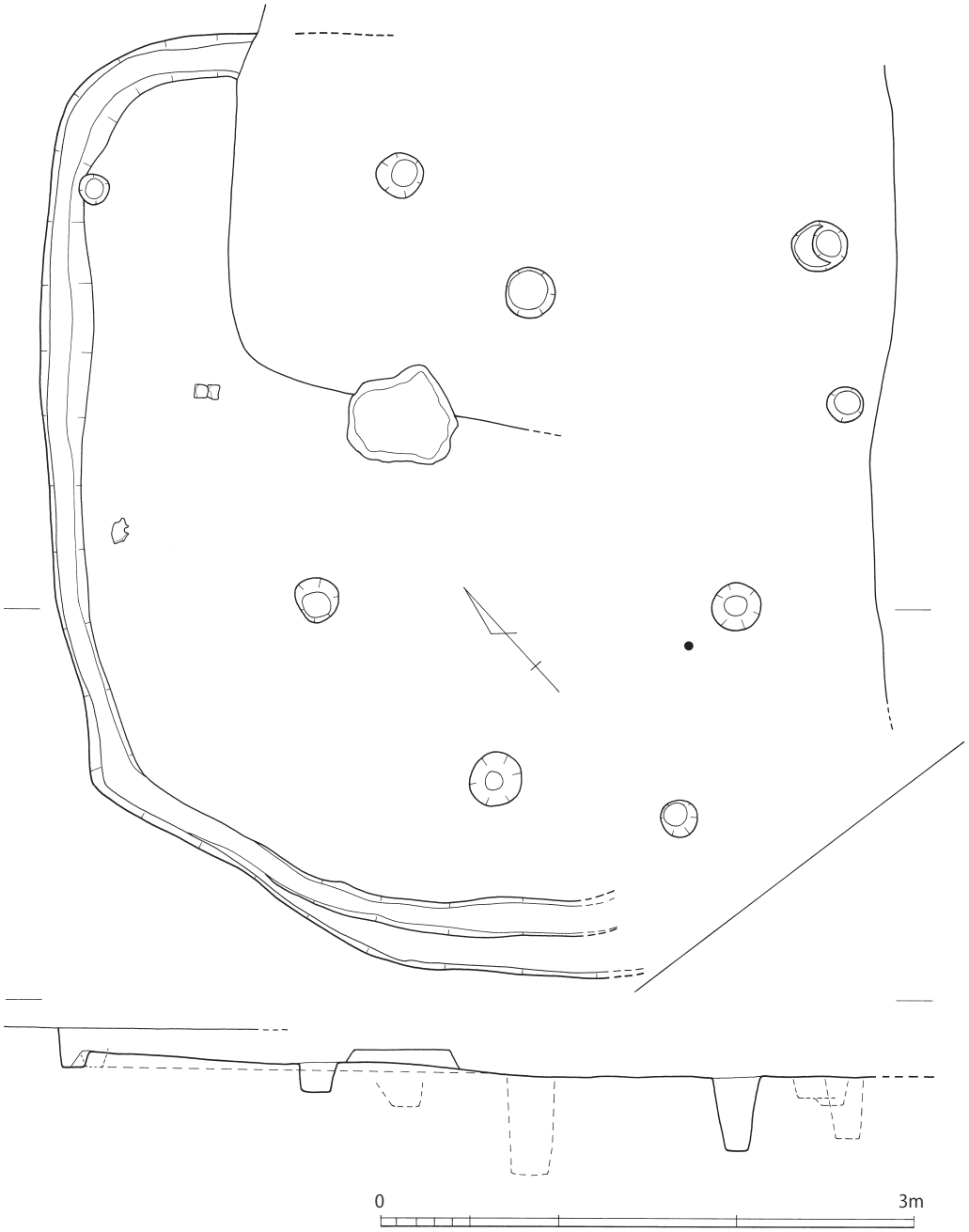
以上より、この建物の時期は高坏の形状からⅧ期（後期後葉）からⅨ期（終末）であると考えられる。

２）Ａ２号竪穴建物（第 47 図）

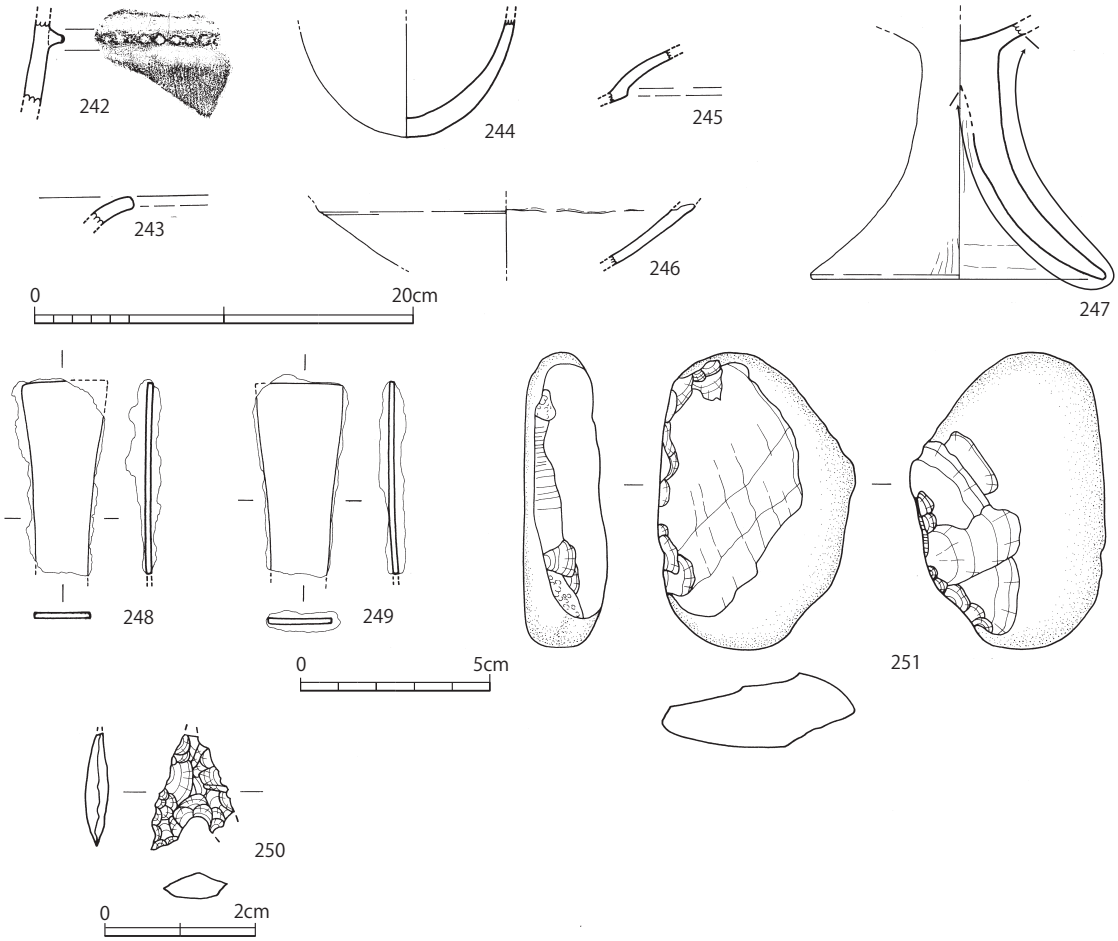
１号竪穴建物を切り、Ａ７号竪穴建物によって切られている一辺 5.8m の正方形を呈する竪穴建物である。幅 15㎝、深さ 5㎝ほどの壁溝が廻る。柱穴は数カ所で確認されたが、主柱穴は不明である。床面には 4 か所で焼土が確認されたが、中央のものが地床炉であろう。



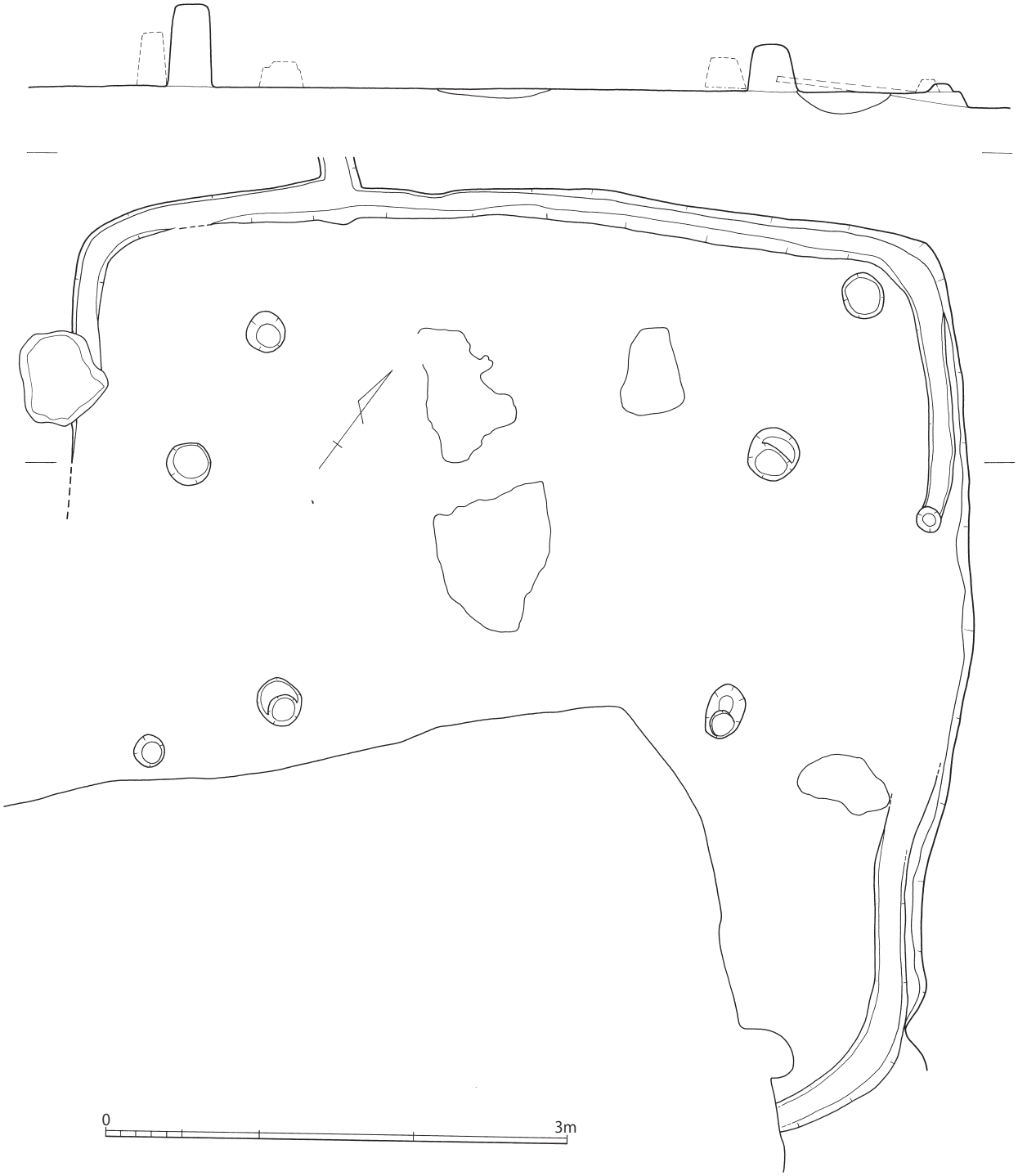
第 44 図　3 次調査区遺構配置図（1/200）



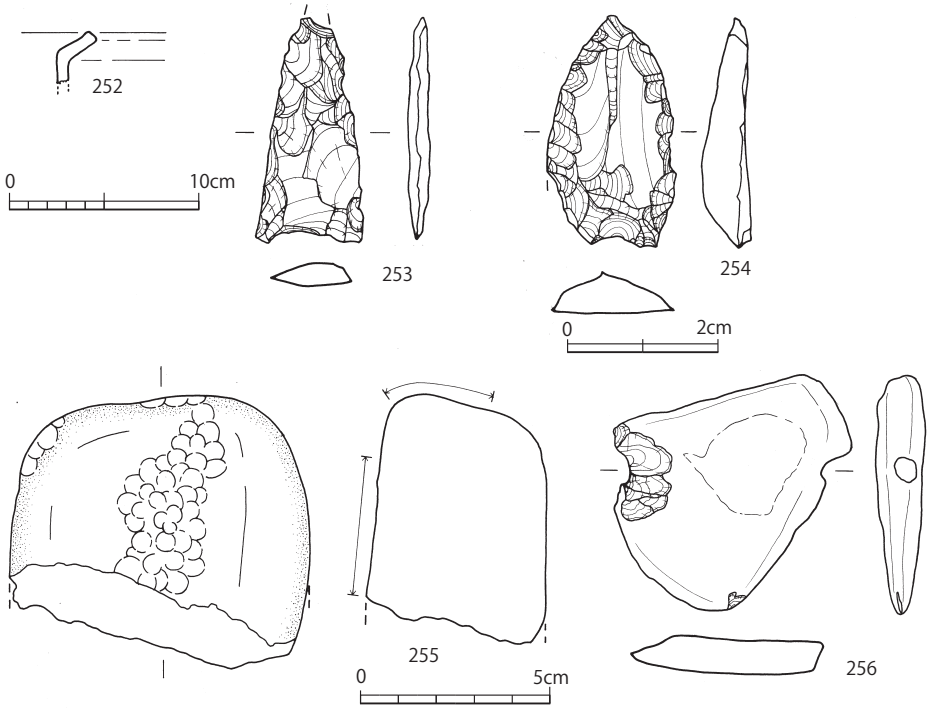
第 45 図　3 次 A1 号竪穴建物



第 46 図　3 次 A1 号竪穴建物出土遺物



第 47 図　3 次 A 2 号竪穴建物



第 48 図　３次Ａ２号竪穴建物出土遺物

図示できる遺物は５点である。第 48 図 252 は口縁端部を摘み上げる甕。253 と 254 は打製石鏃で、253 はサヌカイト製、254 は姫島産黒曜石製である。255 は安山岩製の敲石、256 は泥岩製の石錘である。

以上からこの建物の時期を想定するのは難しいが、Ⅷ期（後期後葉）からⅨ期（終末）の第１号竪穴建物を切っているので、Ⅸ期以降と考えられる。

３）A3 号竪穴建物（第 49 図）

調査区中央よりやや東側で確認された竪穴建物で、やや押しつぶされた形の隅丸方形を呈する。長軸方向は 5.1m、短軸方向は 4.0m で、深さは 0.15m である。中央やや南側に 0.9m × 0.8m（深さ不明）の楕円形の土坑があり、内部は炭化物が充填していた。主柱穴になり得る柱穴は確認されなかった。

図示できる出土遺物は 10 点である。第 50 図 257 は頸部に断面三角形の突帯を廻らせる壺、258 は口縁部を張り出して刻目を入れ、その下部に二条の刻目突帯を廻らせ、さらに縦方向に刻目突帯をつなぐ下城式土器。259 と 260 は口縁部が「く」字形に折れ開く甕、261 は平底の甕底部、262 は高坏か鉢の脚。263 は結晶片岩製の磨製石鏃、264 は金山産サヌカイトの打製石鏃、265 は泥岩製の砥石、266 は砂岩製の砥石である。

以上から、この竪穴建物の時期はⅥ期（後期前葉）と考えられる。

４）A4 号竪穴建物（第 51 図）

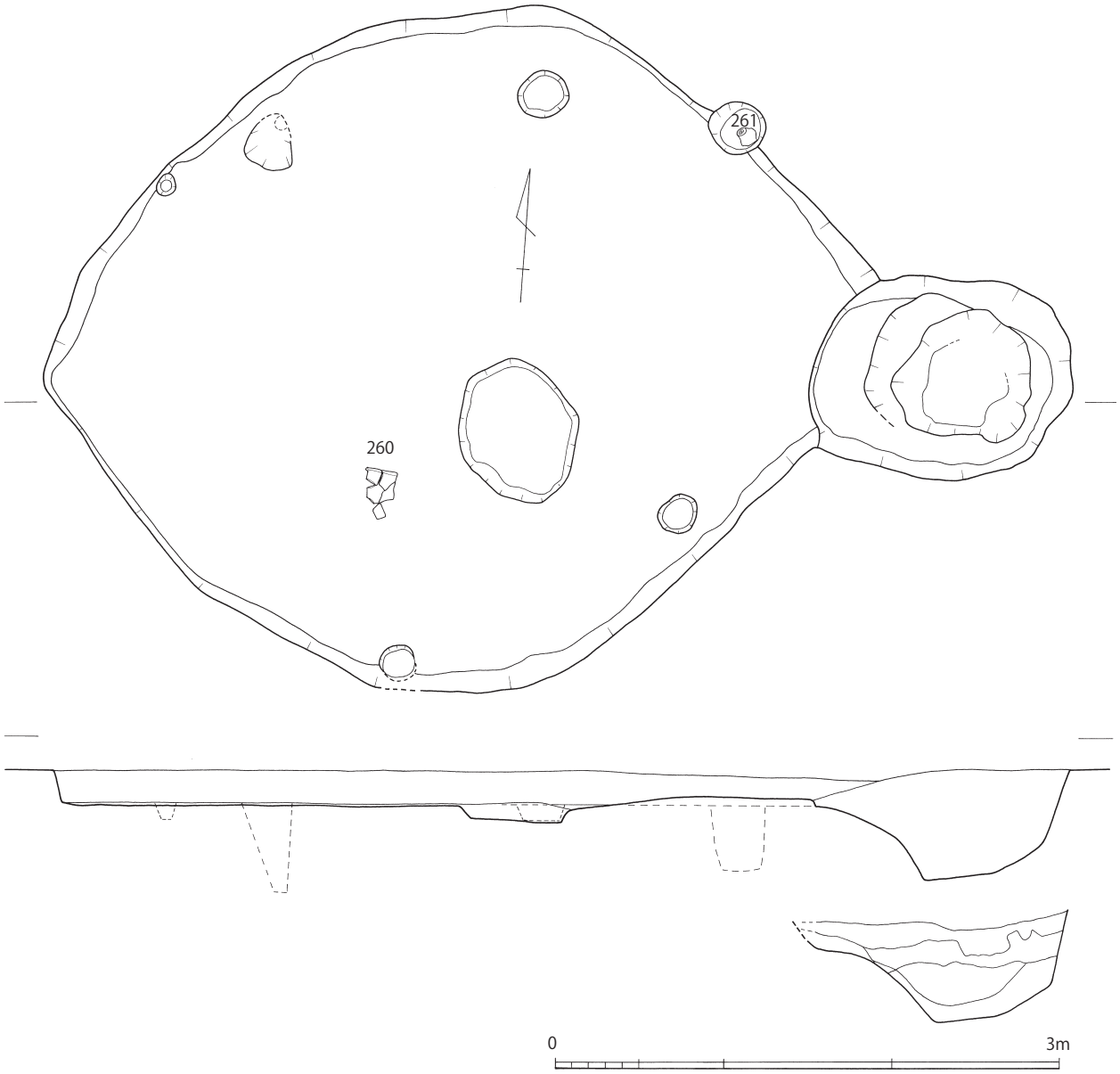
調査区の北東角部で一部が確認された竪穴建物で、隅丸の方形を呈すると考えられる。規模は不明である。床面からは焼土や柱穴は確認されなかったが、石皿が置かれていたため建物跡とした。

５）A5 号竪穴建物（第 52 図）

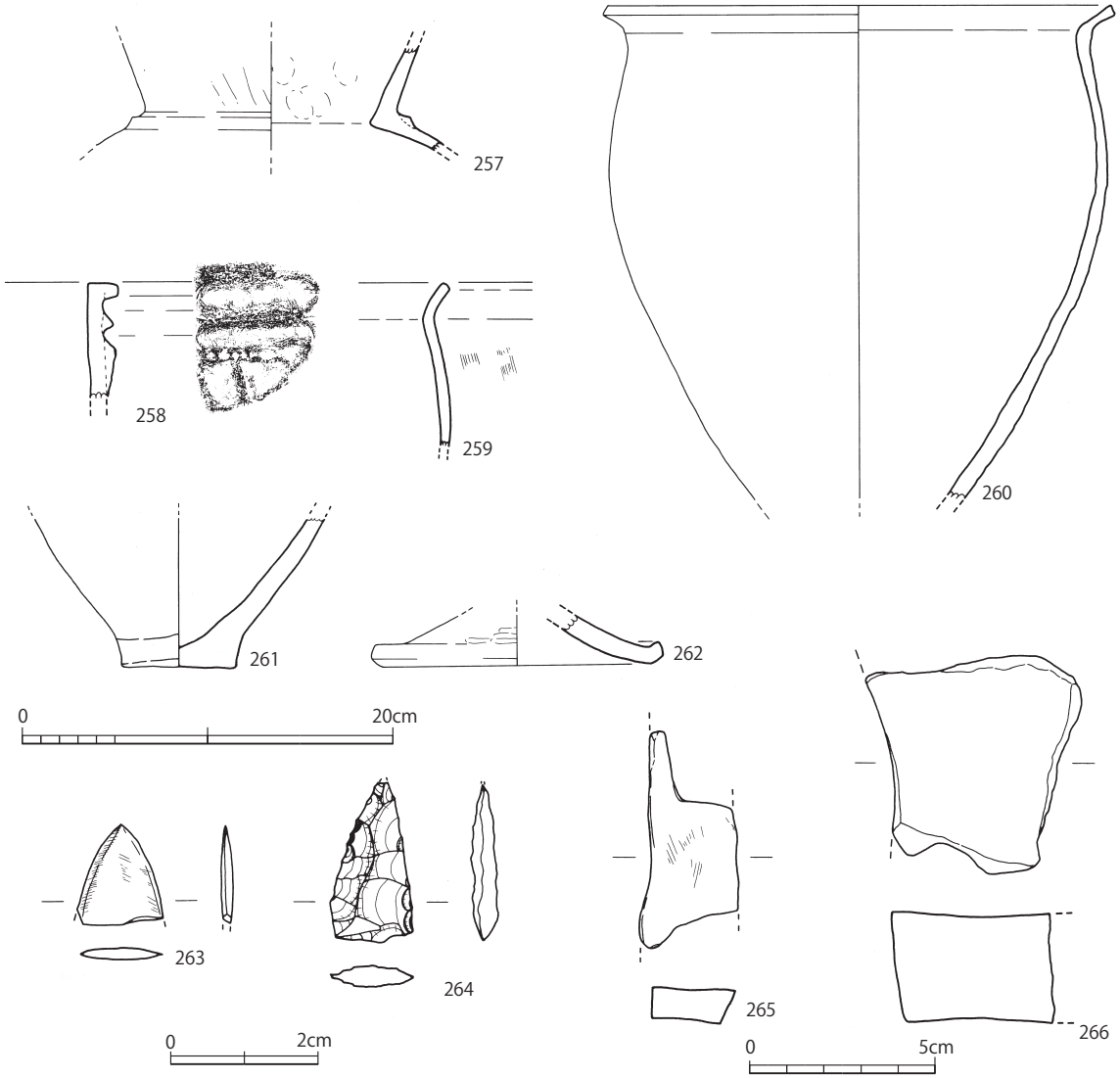
調査区の南寄りで確認された竪穴建物で、Ａ６号竪穴建物に切られている。上部もかなり削平を受けており、床は一部しか残っていない。多角形を呈する竪穴建物の可能性もある。柱穴、炉跡は確認されなかった。

図示できる遺物は５点である。第 53 図 267 は複合口縁をなす安国寺式土器壺で、口縁外面は無文である。268 と 269 は外反しながら大きく開く壺で、269 には口縁部内面に「ハ」字状の押圧文があり、口唇部には刺突文を施す。270 は泥岩製の石鏃、271 は同じく泥岩製の石包丁である。

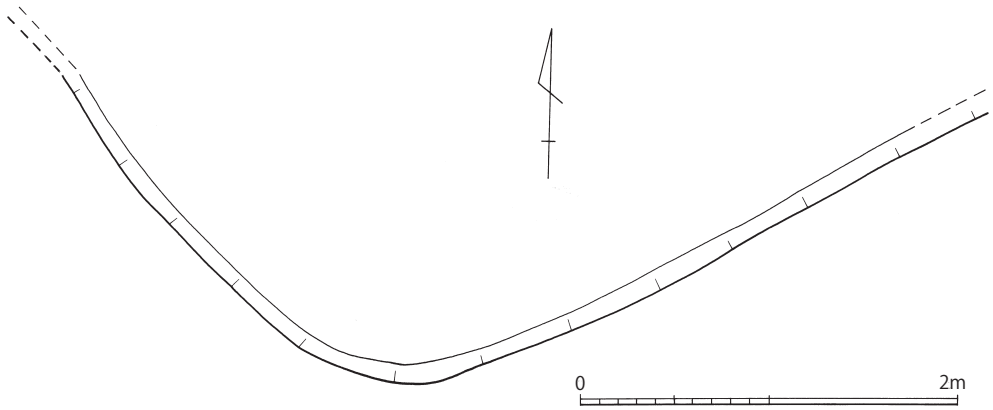
以上より、この建物の時期はⅥ期（後期前葉）からⅦ期（後期中葉）と考えられる。



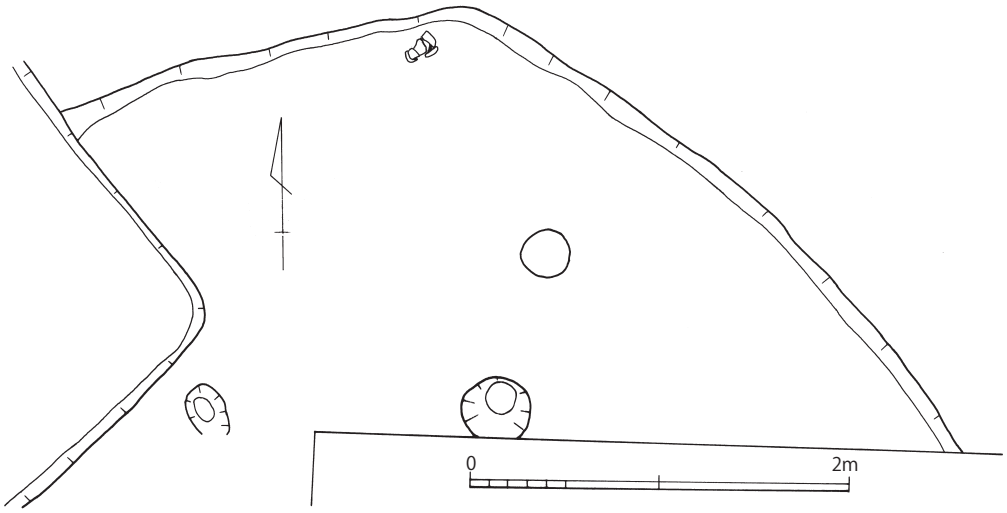
第 49 図　3 次 A 3 号竪穴建物



第 50 図　3 次 A 3 号竪穴建物出土遺物



第 51 図　3 次 A 4 号竪穴建物

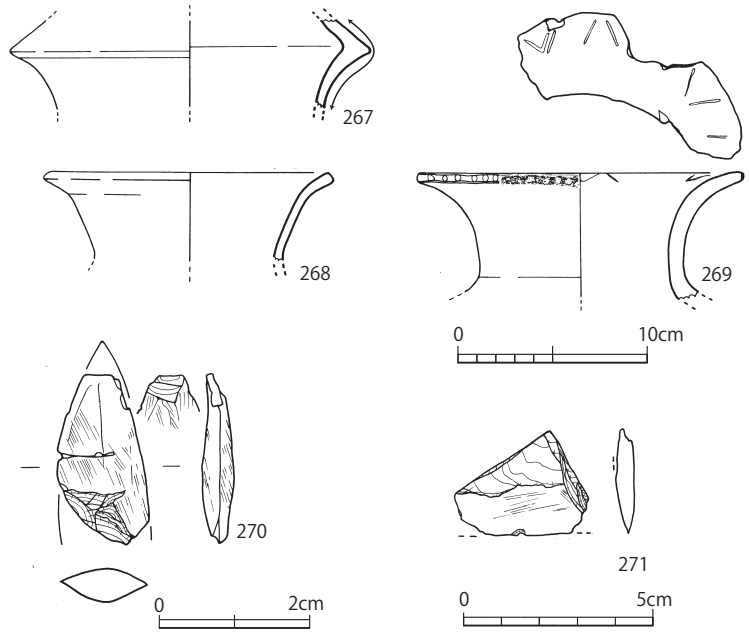


第 52 図　3 次Ａ５号竪穴建物

６）A6 号竪穴建物（第 54 図）

Ａ５号竪穴建物とＡ７号竪穴建物を切って作られた竪穴建物で、一辺 4.1m のほぼ正方形を呈する。残存する深さは 0.15m である。壁際には幅 0.1m から 0.2m、深さ 0.05m ほどの壁溝が全周する。主柱穴は４本で、炉は東側の柱穴間にある地床炉である。また、南側の柱穴間には東西 1.9m、南北 0.9m、深さ 0.1m ほどの不定形の土坑があり、内部から土器や砥石が出土している。

図示できる出土遺物は４点である。第 55 図 272 は頸部に断面三角形の突帯を廻らせる単口縁の壺、273 は内湾する体部を持つ脚付きの鉢。274 は土製勾玉で、全長は 7.0㎝である。275 は黒曜石製の打製石鏃である。



第 53 図　3 次Ａ５号竪穴建物出土遺物

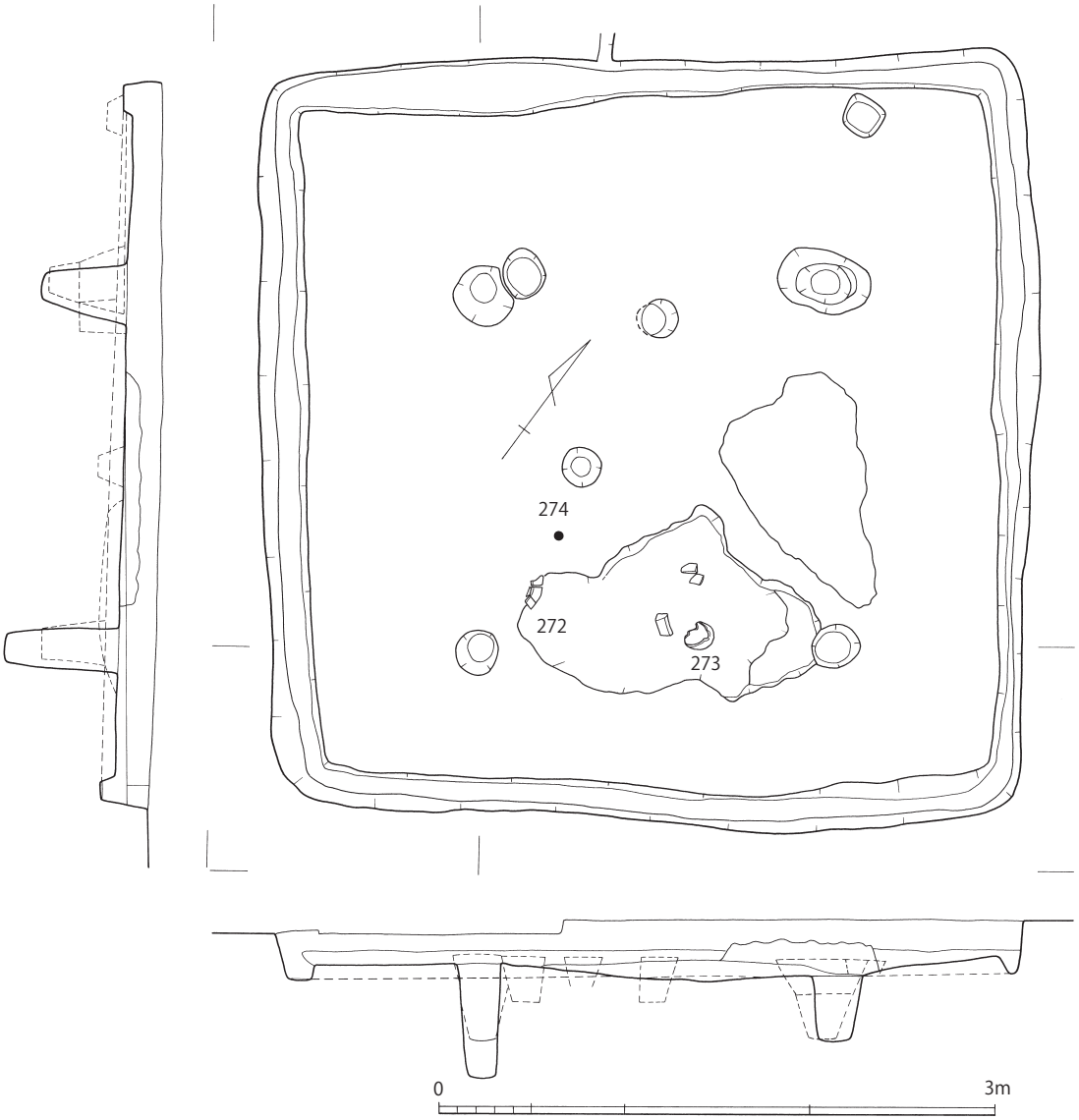
以上からこの建物の時期はⅦ期（後期中葉）からⅧ期（後期後葉）と考えられる。

７）A7 号竪穴建物（第 56 図）

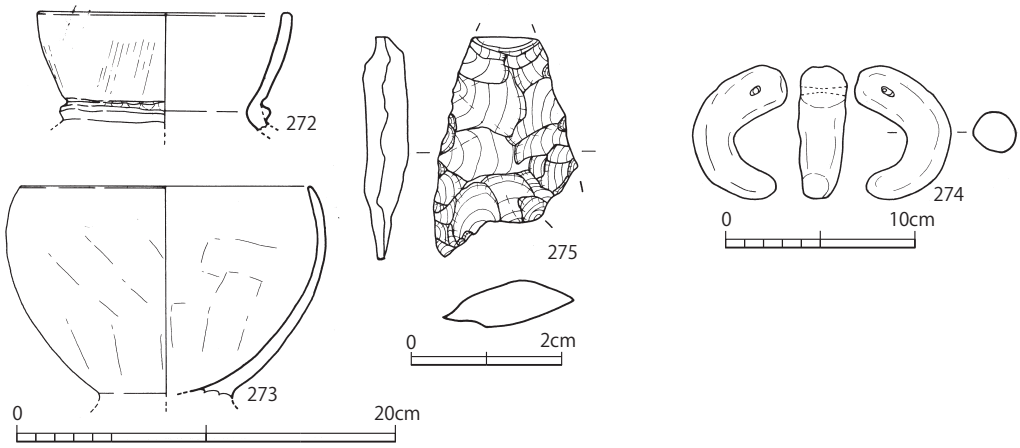
Ａ２号竪穴建物を切り、６号竪穴建物から切られている竪穴建物であるが、南側は削平を受けており、全形は窺い知れない。床面の中央は円形に数㎝低くなっており、竪穴建物の重なりも考えられるが、明確ではなかった。床面ほぼ中央と考えられる部分には焼土が認められた。主柱穴となるような柱穴は確認できなかった。

図示できる出土遺物は４点である。第 57 図 276 はやや太い突帯を二条廻らせる壺、277 は口唇部に刻目突帯を廻らせる甕。278 は「く」字形に折れる口縁部の甕、279 は混入品の中世の土師質土器坏で、底面は糸切り離しのあと撫でている。

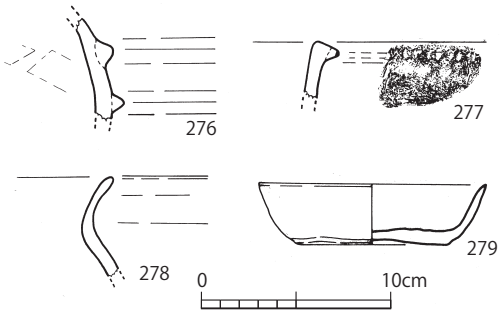
時期の確定は難しいが、278 から後期と考えられる。



第 54 図　3 次 A 6 号竪穴建物



第 55 図　3 次 A 6 号竪穴建物出土遺物



第 57 図　3 次 A 7 号竪穴建物 出土遺物

８）B1 号竪穴建物（第 58 図）

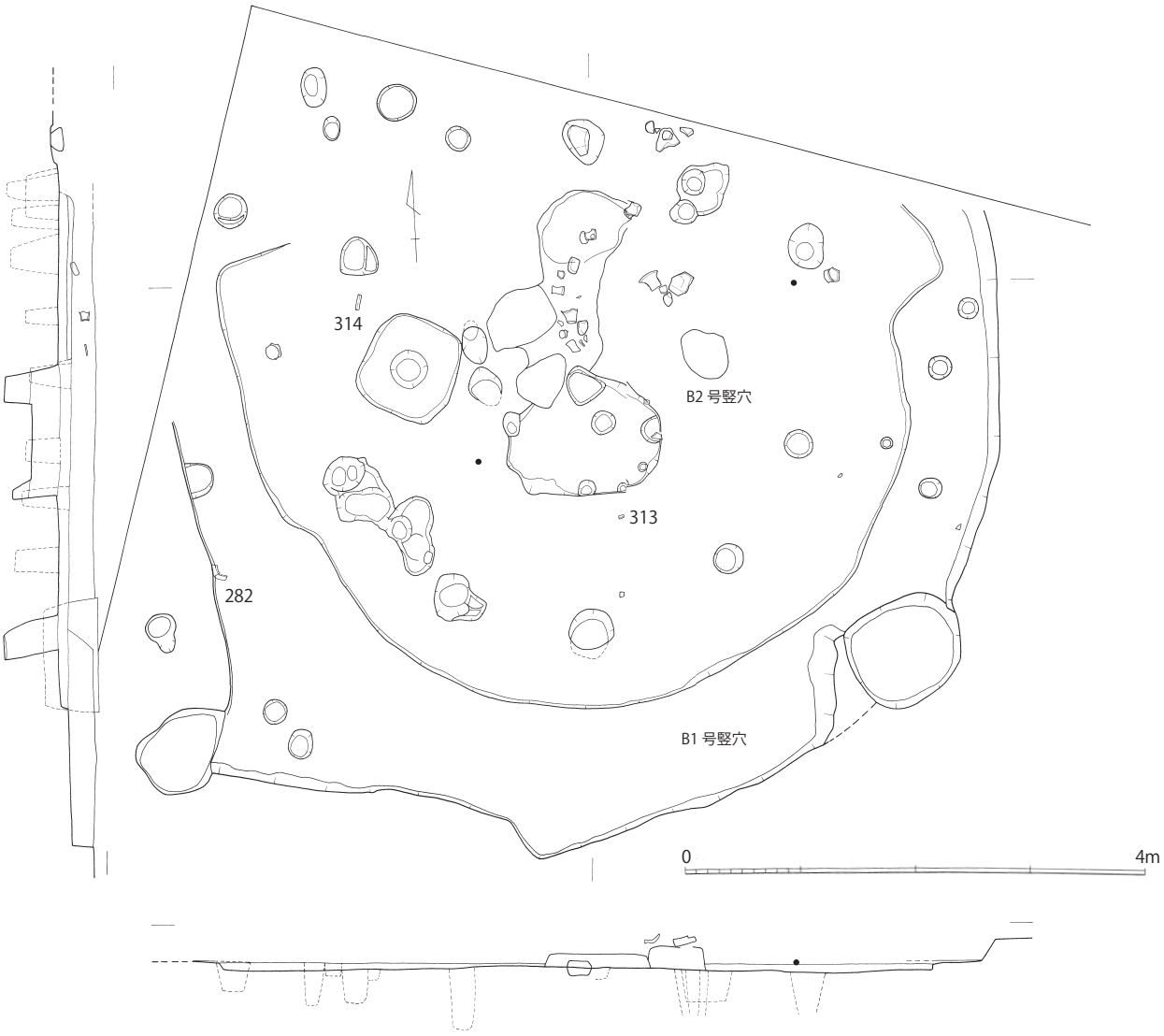
B2 号竪穴建物の外側にほぼ相似形に広がる竪穴建物で、北側は一部調査区外になるため、正確な形状は不明であるが、概ね直径約 6.9m の円形になるもと考えられる。残存する深さは 0.2m ほどである。

昭和 47 年の調査時には、ここで示しているように B2 号竪穴建物と別遺構と考えていたが、B2 号竪穴建物とした竪穴の主柱穴配置が、やや壁際に寄りすぎていること、B1 号竪穴建物の主柱穴が無いこと、などから B1 号竪穴建物と B2 号竪穴建物は同一遺構の可能性が高いと考えている。そう考えられるとすると、B1 号竪穴建物とした部分は一段高いベッド状施設であるのか、あるいは 2 段掘りの竪穴建物になるということになる。

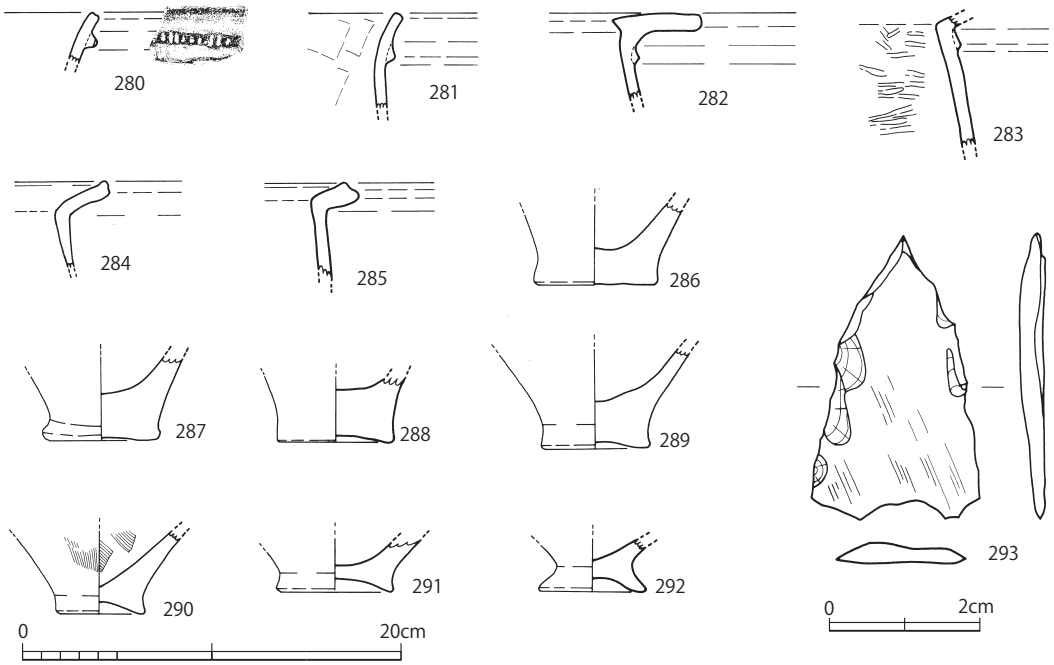
図示できる遺物は 14 点である。第 59 図 280 は口縁部下に一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、281 は緩やかに外反する口縁部に無刻目突帯を廻らせるもので、縄文時代晩期の深鉢。282 は逆 L 字形の口縁部を持つ甕で、一条の突帯を廻らせる。283 は 282 と同型の甕で、口縁下に突帯を一条廻らせる。284 と 285 は口縁端部を小さく摘み上げる甕、286 から 291 は甕の底部。平底からやや上げ底まである。292 は鉢の脚部か。293 は緑色結晶片岩製の磨製石鏃未成品である。

以上から、この竪穴建物の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。

第 56 図　3 次 A 7 号竪穴建物



第 58 図　３次Ｂ１，Ｂ２号竪穴建物



第 59 図　３次Ｂ１号竪穴建物出土遺物

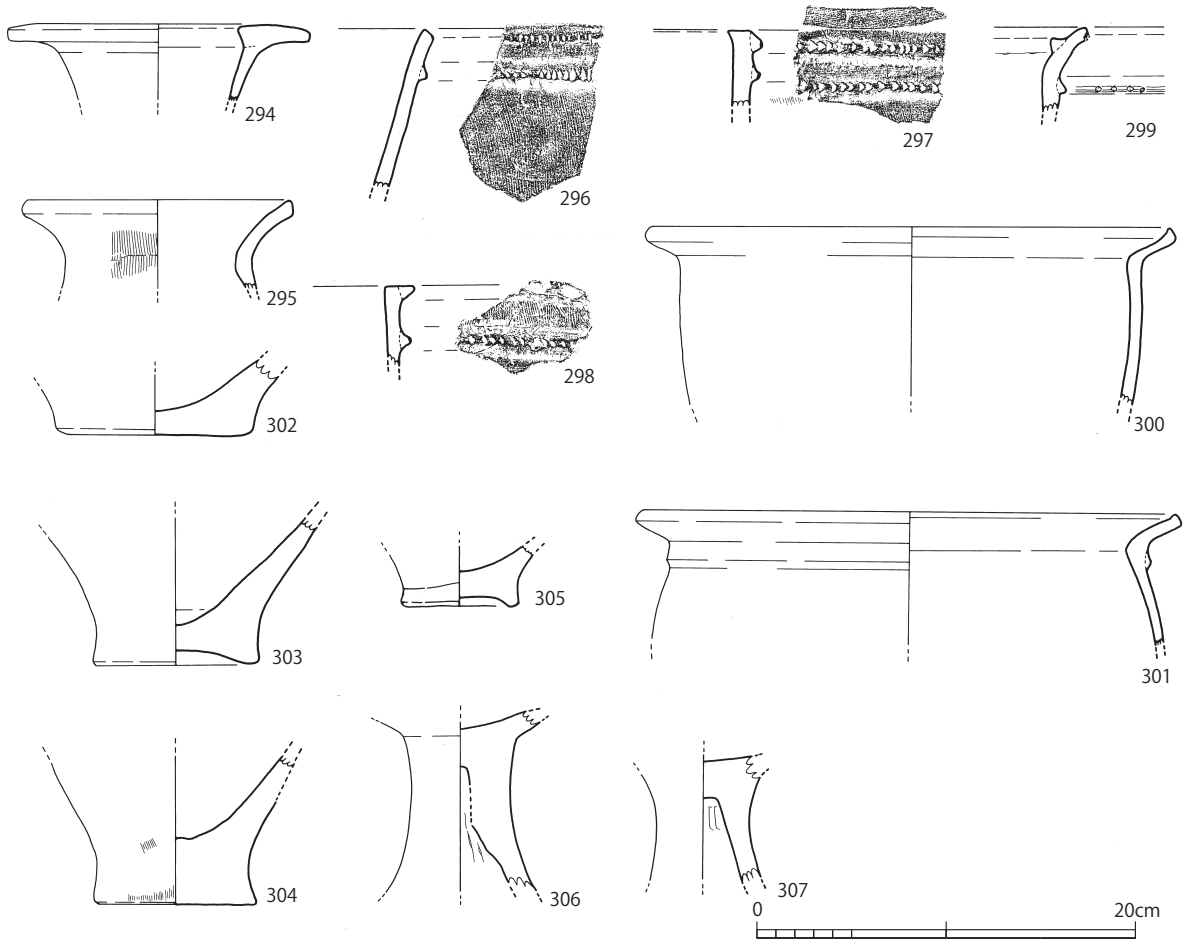
９）B2 号竪穴建物（第 58 図）

B1 号竪穴建物に重なるように検出された建物で、直径は約 5.6m になる円形である。B1 号竪穴建物のところで述べたように、本来は B1 号竪穴建物と同一の遺構の可能性が高い。北側は一部調査区外になることから、主柱穴が全て確認できていないが、現状で 8 本が円形に展開するので、本来は 10 本の柱を有するものとなろう。床面のほぼ中央に南北 1.9m、東西 0.5m の焼土の広がりがあり、地床炉と考えられる。炉の南側には 1.3m × 1.0m のやや楕円形を呈する土坑がある。深さは 0.2m ほどである。

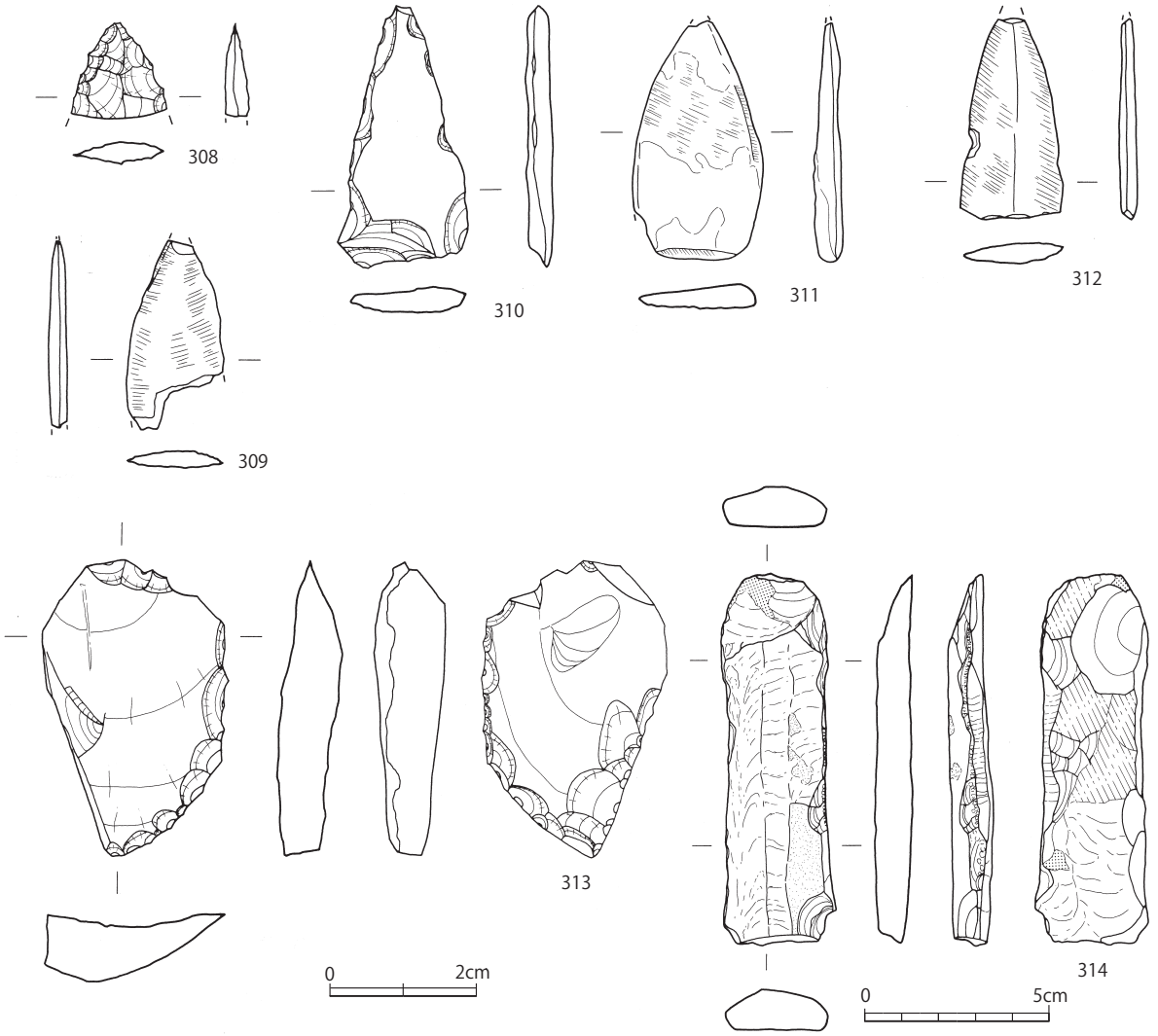
図示できる遺物は 21 点ある。第 60 図 294 と 295 は壺で、294 は鋤先状をなす口縁部。296 から 298 は下城式土器甕で、296 は一条の刻目突帯を、297 と 298 は口唇部にも刻目突帯を廻らせる。299 は緩やかに外反する口縁部下に刻目突帯を廻らせ、内面には無刻目突帯を張り付けて鋤先状に作る。甕と考えるが、類例に乏しい。300 と 301 は口縁端部を摘み上げる東北部九州系の甕。302 から 305 は甕の底部である。平底からやや上げ底状のものまである。306 と 307 は高坏で、脚部は柱状に伸びる。

第 61 図 308 から 314 は石器で、308 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、309 から 312 は結晶片岩製の磨製石鏃である。313 は姫島産黒曜石のスクレーパー、314 は粘板岩製の磨製石鏃未製品か。

以上から、この建物の時期はⅢ期（中期中頃）と考えられる。



第 60 図　３次Ｂ２号竪穴建物出土遺物①



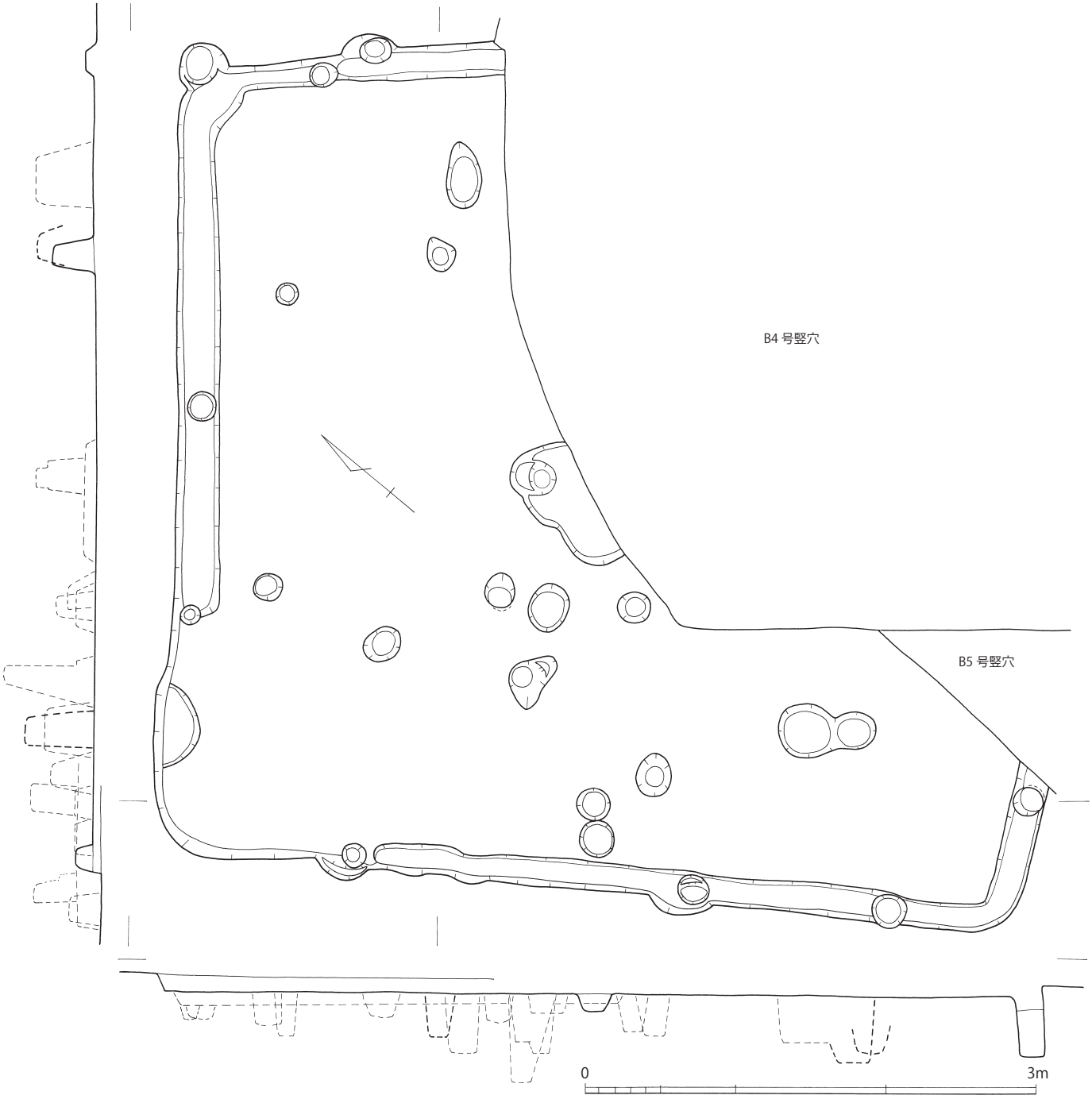
第 61 図　3 次 B 2 号竪穴建物出土遺物②

10）B3 号竪穴建物（第 62 図）

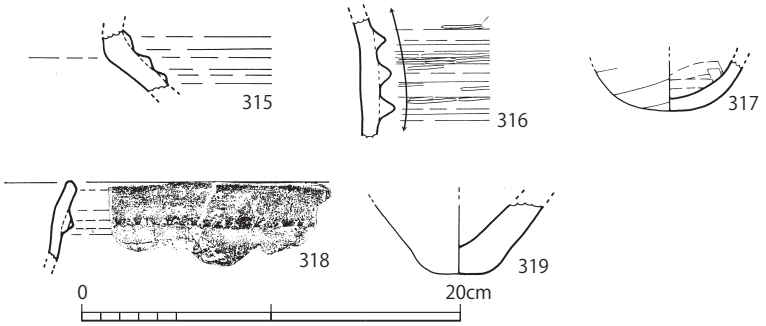
調査区の南東で確認された略南北 5.9m、略東西 5.6m のやや長方形を呈する竪穴建物である。残存する深さは 0.15m ほどである。B4 号と B5 号竪穴建物に切られている。壁際には北西角部を除いて、幅 0.15m から 0.25m、深さ 0.05m ほどの壁溝が廻る。主柱穴は 4 本と考えられるが、確定はできなかった。床面中央には B4 号竪穴建物に切られた土坑（長軸 0.9m）があるが、焼土は確認できなかった。

図示できる遺物は 5 点で、第 63 図 315 と 316 は安国寺式土器壺の頸部突帯と胴部突帯である。317 は丸底の小型壺である。318 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、319 は小さな平底をなす甕底部である。

以上より、この建物の時期はⅥ期（後期前葉）からⅥ期（後期中葉）と考えられる。



第 62 図　3 次 B 3 号竪穴建物



第 63 図　3 次 B ３号竪穴建物出土遺物

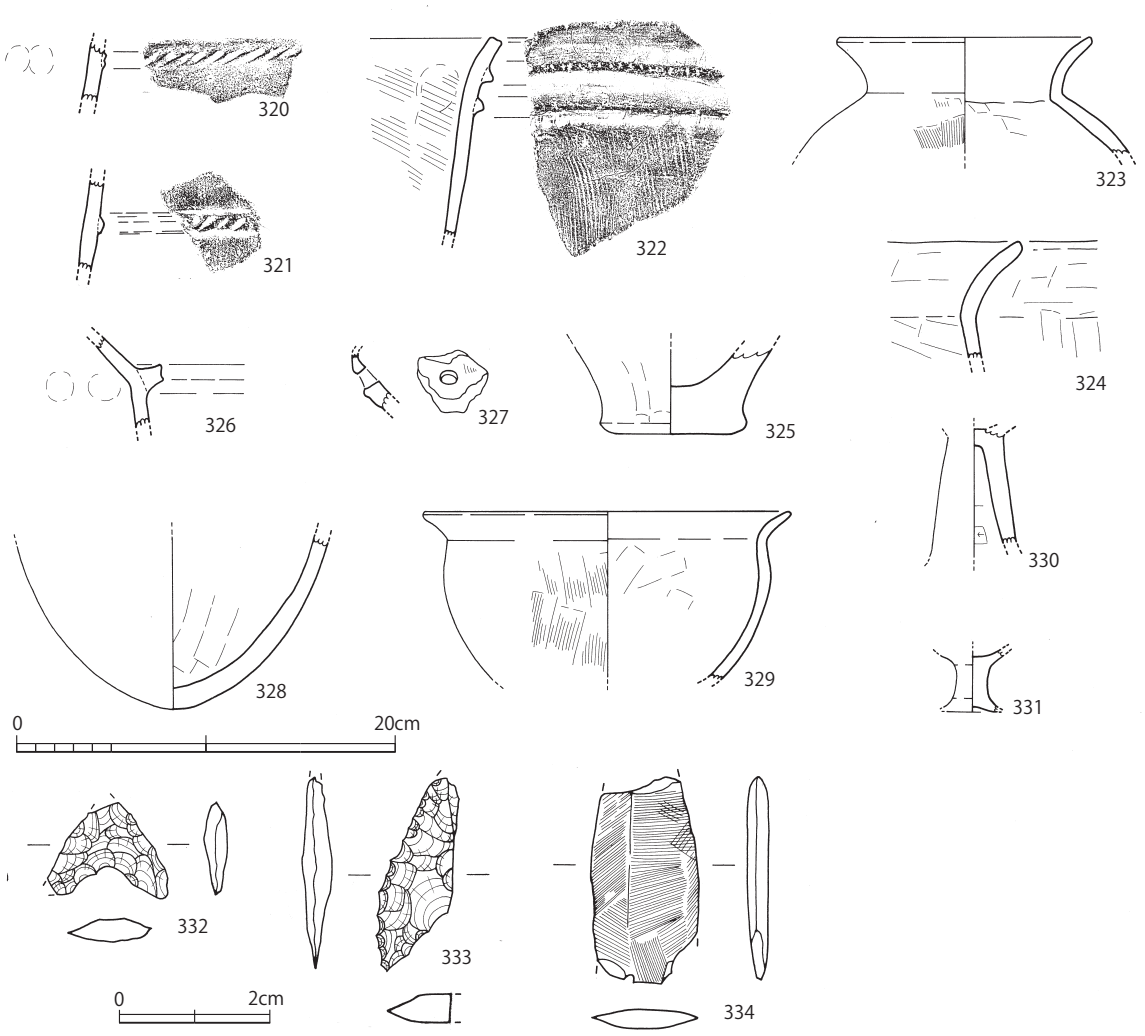
11）B4 号竪穴建物（第 64 図）

B3 号竪穴建物を切って作られた方形を基調とする竪穴建物である。南側と東側が調査区外になるため大きさは不明である。西側の壁際には一部壁溝が残っている。中央やや南寄りには焼土があり、地床炉と考えられる。また、南側には幅 0.8m ほどの長方形を呈する土坑があり、その北端の円形に窪んだところには炭化物が多く認められた。ピットも多数検出できたが、主柱穴は不明である。

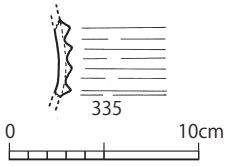
第 64 図　3 次 B ４号竪穴建物

図示できる出土遺物は 15 点である。第 65 図 320 と 321 は安国寺式土器壺の胴部に廻る扁平突帯。いずれも斜行の押圧文を施す。322 は口縁部が緩やかに開く下城式土器甕で、口縁下に二条の刻目突帯を廻らせる。323 と 324 は「く」字形に開く甕の口縁部、325 は外側に少し踏ん張る形の甕底部、326 は複合口縁壺で、屈曲部は突帯状に強く突出する。327 は頸部に穿孔がある小型壺。328 は丸底の甕底部、329 は鉢で、脚が付くかもしれない。330 は脚部が柱状になる高坏、331 はミニチュア土器の高坏か。332 と 333 は姫島産黒曜石製の打製石鏃、334 は粘板岩製の磨製石鏃である。

以上より、この竪穴建物の時期はⅨ期（弥生終末）と考えられる。



第 65 図　3 次 B ４号竪穴建物出土遺物



第 66 図　3 次 B ５号竪穴建物出土遺物

12）B5 号竪穴建物

B3 号竪穴建物を切り、B4 号竪穴建物に切られた竪穴建物で、壁の一部が残るのみある。南側は調査区外になることからも全形がうかがい知れない。確認された範囲ではピットや焼土はなかった。

図示できる出土遺物は 1 点のみである。第 66 図 335 は壺の胴部で、断面三角形の突帯が 4 条廻る。この資料が建物の時期を示すとすれば、Ⅳ期（中期後葉～末）からⅤ期（後期初頭）が考えられる。

（３）その他の遺物

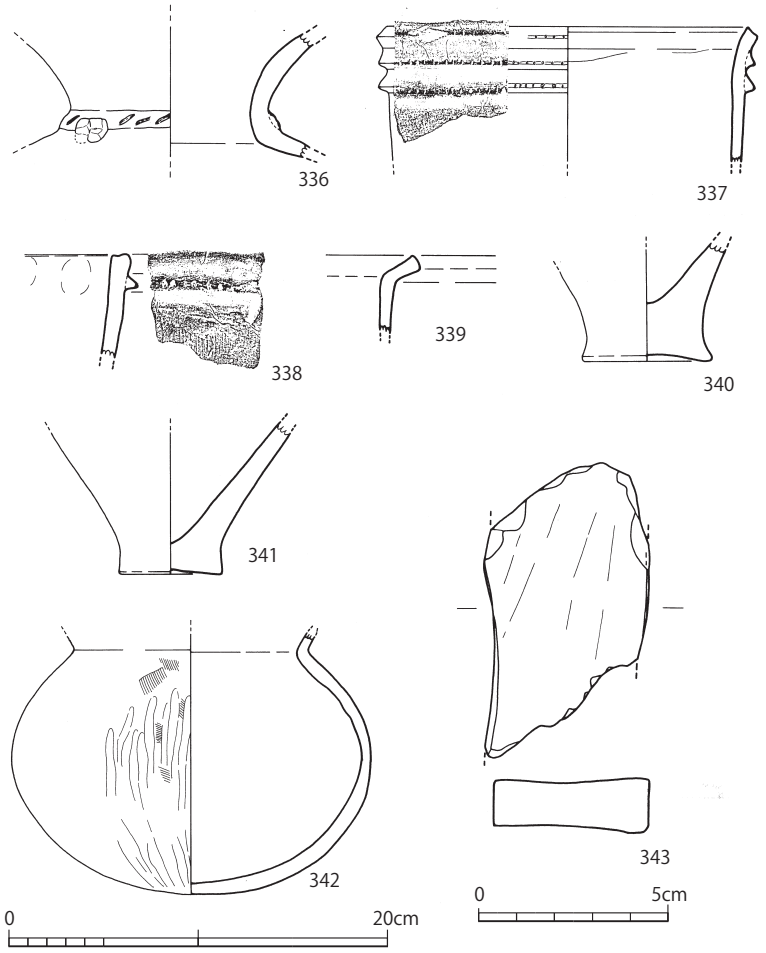
ここでは B1 号竪穴建物と B2 号竪穴建物のどちらに帰属するか不明な資料（336 から 343）と、調査時に表採した資料（344 から 375）を紹介する。

第 67 図 336 は頸部に扁平な刻目突帯を廻らせ、勾玉状浮文を付す安国寺式土器壺、337 と 338 は刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、339 は口縁端部を小さく摘み上げる東北部九州系の甕、341 は平底の甕底部、342 は丸底の壺である。343 は泥岩製の砥石である。

1 号、2 号ともⅢ期（中期中頃）としたが、336 はⅨ期（弥生終末）の資料であり、出土が間違いないならば、どちらかがⅨ期に下る可能性がある。

第 68 図 344 から 346 は小川原式土器と考えられる壺の口縁部である。口縁部は鋤先状をなして、344 と 345 は

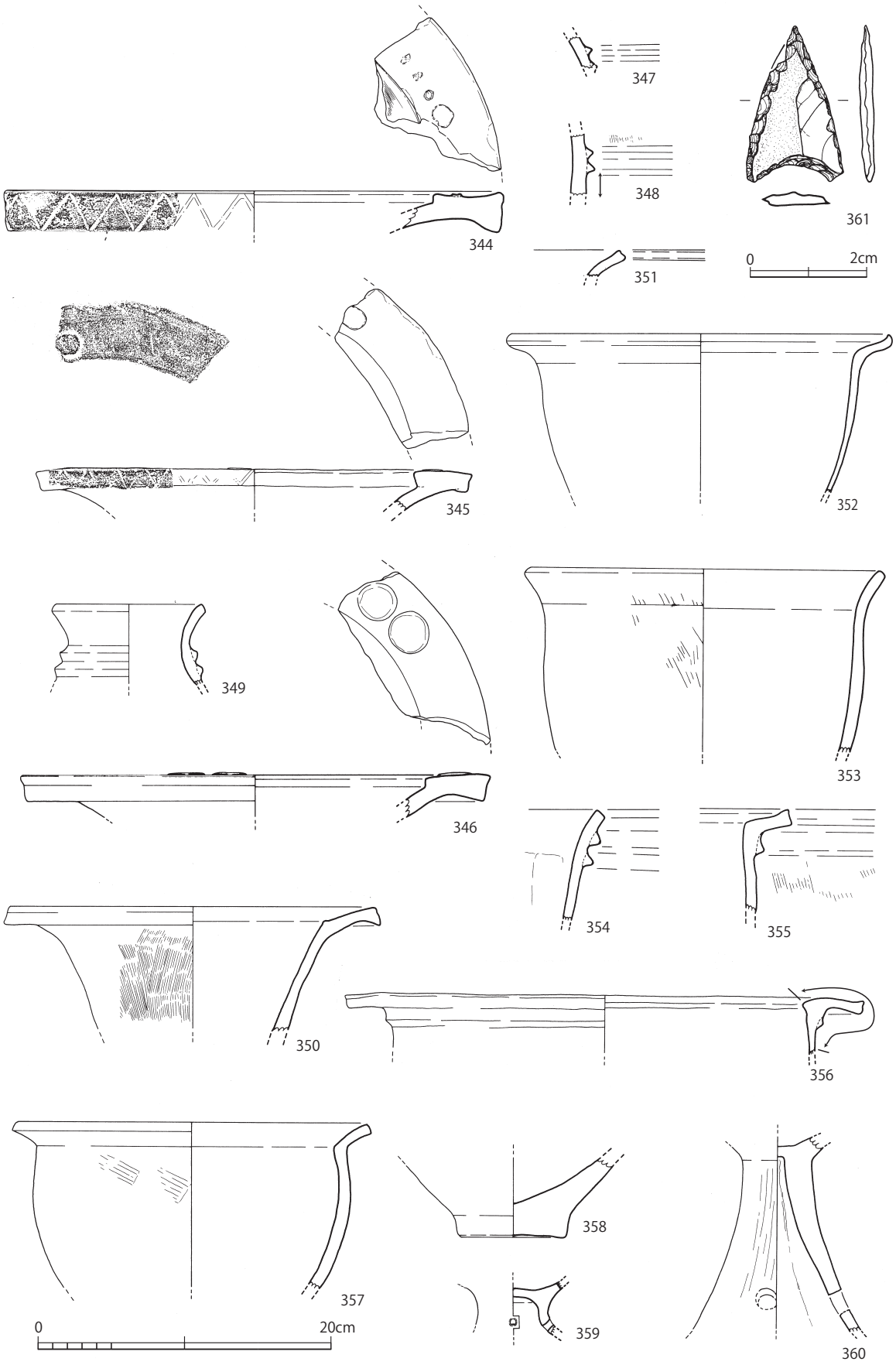
外面に連続山形文を施し、上面には円形浮文を付す。347 と 348 は断面三角形の突帯を廻らせる壺、352 から 356 は甕。352 と 355 は口縁端部を摘み上げる東北部九州系の甕、353 は口縁部が緩やかに開く甕、354 は二条の突帯を廻らせる下城式土器甕であるが、刻目はない。356 はベンガラが塗布された逆「L」字状の口縁部の甕である。357 は鉢、358 は平底をなす壺の底部、359 は穿孔のある鉢の脚台か。360 は高坏の脚部で裾が緩やかに開く。361 はサヌカイト製の打製石鏃である。



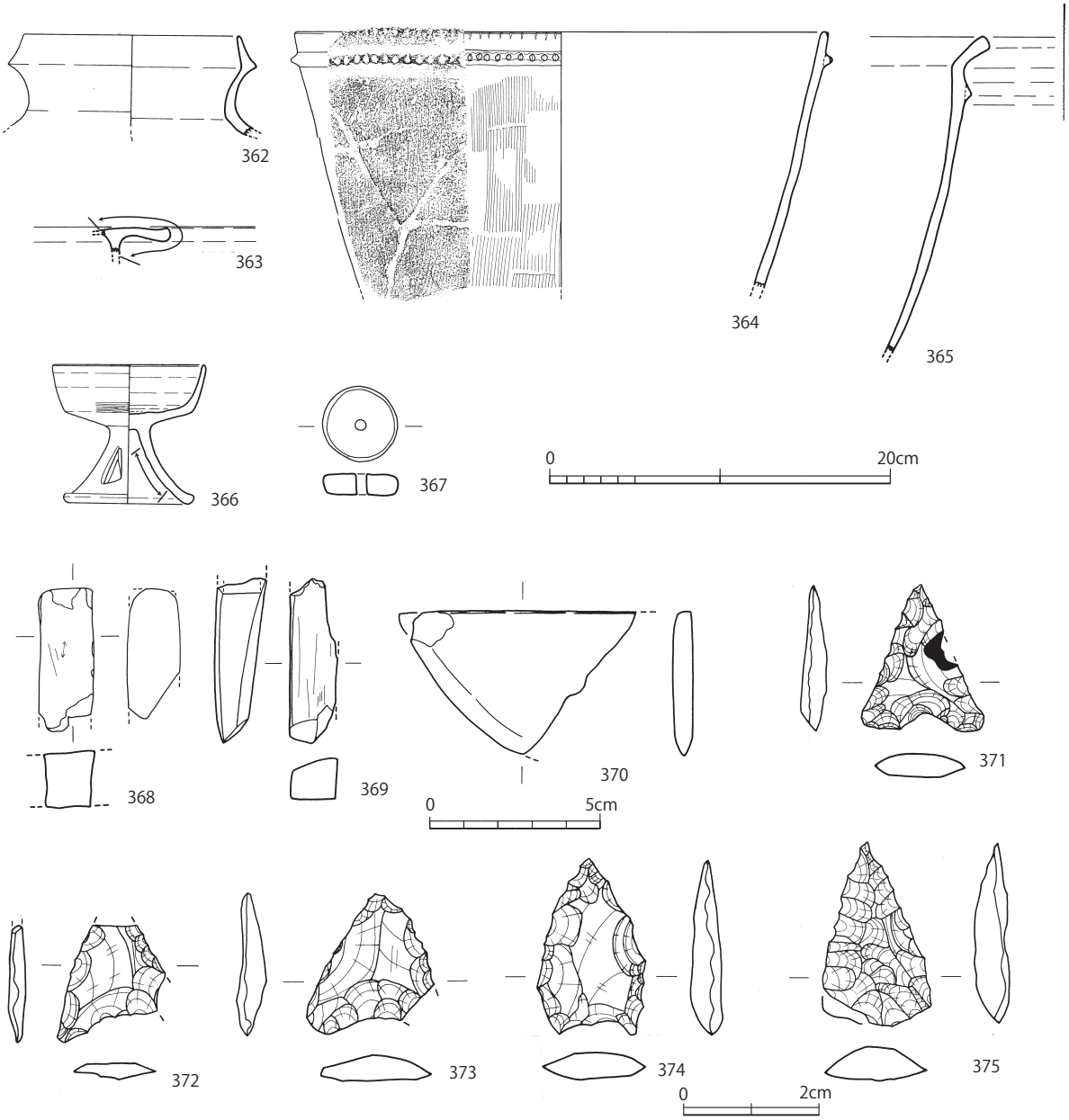
第 67 図　3 次 A 1、A 2 号竪穴建物出土遺物

第 69 図 362 から 375 は出土地点が A 区か B 区か不明な資料である。362 は複合口縁をなす壺、363 は逆「L」字状の口縁部の甕である。364 は一条の刻目突帯を廻らせる下城式土器甕、365 は口縁端部を摘み上げる東北部九州系の甕で、口縁下に一条の突帯を廻らせる。365 は須恵器高坏で、脚部に透かしを持つ。367 は直径 4.4cmの土製紡錘車である。368 と 369 は泥岩製の砥石、370 は泥岩製の石包丁、371 から 375 は打製石鏃で、371 はガラス質安山岩、372 から 374 はサヌカイト、375 は姫島産黒曜石製である。

この 3 区の一括資料は、344 から 346 に象徴されるように、雄城台遺跡では遺構の少ないⅣ期（中期後葉～末）の資料を含むので、3 次調査区あたりに当該期の遺構が展開していた可能性が高い。



第 68 図　3 次一括遺物①



第 69 図　3 次一括遺物②

（4）まとめ

３次調査では、比較的残りの良い（プランの明確な）、明確に壁溝が廻る竪穴建物が確認された。この地区では貯蔵穴などの土坑は確認されておらず、台地の周辺部に近い部分には主に竪穴建物が建っていた可能性が考えられた。